

---

# **最強のメイジ殺し**

海東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最強のメイジ殺し

### 【著者名】

N4202Q

### 【作者名】

海東

### 【あらすじ】

“最強のメイジ殺し”と呼ばれた男、レイ。そんな彼がハルケギニアの世界を旅する話です。オリキャラを割と出すつもりなので、苦手な人はご注意を。原作キャラも勿論出しますし、絡ませます。アンチ要素は時と場合によりけりですが、極端なヘイトはしないつもりなのでご安心を。

## プロローグ（前書き）

息抜きで前々から妄想していたものを書き下ろさせて頂きました。  
息抜きなので更新は不定期になると想います。

## プロローグ

その男はあまりの強さ故、歴史に名を残すことすら憚られた。ハルケギニアにおいて、彼の存在は一種のタブーであった。故に彼のことを実際に知っている者は少ない。

男の名はレイ。

ダー・ティーブロンンドのやや長い髪にアッシュグレイの瞳。顔立ちは良く、とてもハンサムだが左目に付けられた大きな傷跡が、異様な雰囲気を醸し出していた。

年齢は20代後半から30代前半といったところ。

何処か老熟しているように見えるかと思えば、時に少年のようなどこなさを見せるなど、見た目からは分かりづらい。長身だが、筋肉が目立つと言う体格では無く、着ている鎧もあまり大きいものではない為、寧ろ細身に見える。

だが、その実無駄な筋肉が無いだけで、脂肪も少なく非常に引き締まった体をしていた。

その体中に細かいものから大きなものまでありとあらゆる傷が刻み込まれていて、左目の傷と合わせて、彼に近寄り難い印象を与えている。

平民出身で魔法を使うことは出来ないが、それを補つて余りあるほどの剣術、そして体術を持つている。

その剣さばきは、それを見た者に、かのガンダールヴの再来とまで言わしめるほどのものであった。

レイは“最強のメイジ殺し”と呼ばれていた。

メイジ殺しとは、その名の通り魔法を使えずともメイジを殺すこと

の出来る者のことである。

彼には、眞偽はともあれ、様々な尊があった。

スクウェアクラスのメイジ数名を瞬殺した。

ドラゴンを一人で討伐した。

エルフと戦い勝利した。

等々

尊は一人歩きをするものだが、彼の本当の強さを語る時、彼を知る者は皆口を揃えてこう言つ。

「物凄く力持ちだとか、剣術が秀でているとか、そういうんじゃない」

「彼は、ただ純粹に“強い”」

これは、そんな彼の語られることの無かつた旅の物語である。

## プロローグ（後書き）

この先、かなりオリキャラが出て来ると想いますが、「ジア承下さい」。また、原作キャラとの絡みは勿論予定しております。オリ主の強さはグインサー・ガのグインとかそんな感じです。

## トリスターニアにて 1（前書き）

早速ですが、原作キャラが登場します。

## トリスターニアにて 1

レイは旅をしている。

だが、その目的は特に決まってはいない。

ただ思うがままに歩き、世界を回る。

それがレイの旅であった。

時には東方にある幻の秘薬を探しに行つたり、時には火竜山脈へ魔物退治に行つたりと、その時その時で旅の理由は変わった。

今、トリステイン王国の首都トリスターニアへ向かっているのも特に理由は無かった。

強いて言うならば、風の向くまま気の向くままである。

レイは自由を愛していた。

トリスターニアへ向かう街道を歩いていると、レイは視線を感じた。

「…………ん？」

つけられている。

気配の消し方からして、素人ではない。

相手は明らかに自分を狙っているようだ。

ここはあまり人気がない。

暗殺者か、それとも山賊の類か。

前者については身に覚えがあつて余りあるだけに思わず苦笑する。だが、どちらにしろ殺氣や敵意のようなものは感じられなかつた。それでも、万が一を考えてレイはいつ襲い掛かられても大丈夫なよう身構えていた。

それから数メイルの距離を進んでも追跡者に新たな動きは無く、ただ自分の後をついていくだけであった。

追跡者の意図はよく分からないが、このまま街までつけられて四六時中監視されるのはいい気分ではない。

それに相手はどうやらかなりの実力者らしい。

このレベルならば街の中、人混みに紛れて……といった手段も通用しないだろう。

仕方無い。とレイは立ち止った。

仮にやり合ひ羽田になつても街の中でやり合ひよりはマシだな。レイは振り返らずに追跡者へと声を掛けた。

「何者だ。何故、俺をつけている？」

それ程大きな声では無かつたが、それでも確実に相手に届くようと言つた。

すると、追跡者は意外と呆氣なくレイにその姿を現した。

「あ～あ、バレちまつたかい。まだまだだね、あたしも

悪びれる様子もなくさう言つてのけたのは、エメラルドグリーンの髪の美女であった。

レイは女の顔に見覚えがあつた。

「お前は確か……フーケ、だつたか？」

「久しぶりだねえ。レイ」

女は巷で話題の盗賊、“十くれのフーケ”であつた。

「俺をつけていたのは何故だ？お前は確か貴族専門の盗賊では無かつたのか？……野盗にでも成り下がつたか？」

レイが訊ねると、フーケは顔に少しだけ悔しさを滲ませながら答えた。

「なあに、今のあたしの実力であんたに気付かれることなく街まで行けるのかちよつと試ただけだよ。結果は一覽の通りバレバレだつたけどね」

「俺がお前と氣付かずに、そのまま殺してたらどうするつもりだったんだ？」

「おや？あんたは確か殺人狂では無かつたんじゃないのかい？」

そう言つてフーケは肩をすくめる。  
相変わらず食えない奴だとレイは思った。

「ま、ここで会つたのも何かの縁つて奴さ。久し振りの再会を祝して飲みにでも行かないかい？」

フーケがそう言つと、レイはこくりと頷いた。

「そうだな。街に着いたらどのみち酒場には寄るつもりだった。1人よりは2人の方が話も弾むし酒も美味くなる」

「それもこんな美人が一緒なら尚更、だろ？」

「ああ、そうだな」

レイはフツと笑った。

トリスター・アヘン着くと、すっかり日も暮れて宵の口であった。

2人は手頃な酒場を見つけて中へ入った。

「乾杯」

そう言つて2人は木製ジョッキを軽くぶつけ合つた。

2人同時に中のぶどう酒に口をつけた。

「あー、美味しいねえ」

「……確かに」

2人はぶどう酒の味を楽しむと、木製ジョッキをテーブルの上に置いていた。

「……しかし、レイ。何だつてこんなトリステインくんなりまでやつて来たんだい？」

フーケがそうレイに訊ねると、レイは素つ氣無く答えた。

「さあな。気付いたらここへ来ていた」

「相変わらずだねえ。少しは何處かに落ち着こうとは思わないのかい？あなたの腕なら、ゲルマニアにでも行けばすぐに貴族になれると思うよ」

「生憎、一つの場所にじつとしていられない性分でね。王族に生まれなくて本当に良かつたと思つてゐるくらいだよ」

「そつかい。ま、貴族のあなたなんか想像出来ないしね」

「お前はどうなんだ？フ……」

レイは思わずフーケと呼びそうになつて口をつぐむ。

場末の酒場とは言え、誰が聞いているか分からぬ。  
それを察したフーケは小声で言つた。

「取り敢えずはロングビルとでも呼べばいいよ  
「ロングビル……分かつた」

レイは再びぶどう酒に口をつけた。

「……ロングビル、お前はどうなんだ？お前こそゲルマニアに行つたら、成功しそうな気がするが」「あたしは貴族なんてもう真つ平なのさ。今の稼業も嫌いじゃないしね」「でも、何時までもその稼業は続けられないだろ？」「まあ、ね。だからこそ、今の内に稼げるだけ稼いどかないとね」「……そつ言えば養つている子たちがいる。と言つてたな」

レイは思い出しあたしのようになつた。

すると、フーケが少し寂しそうな顔をする。

「そり。その子たちの為にもあたしは捕まるわけにはいかないのさ」「そうか」「そうだよ」

2人は暫く無言でぶどう酒を飲むと、その後はお互に他愛の無い話をした。

酔いの効果もあって、素面ならそれ程面白くない話でも、とにかく笑えた。

「……それで、あの成金ジジイの間抜けな顔と来たら、もう爆笑もんだったよー」

「それは是非見たかったな」

「ああ、あんたがあたしのパートナーだつたら、この稼業もどんどんけ楽だろうかねえ」

「パートナー、か」

レイは片手で木の実を弄びながら呟いた。

「……守るものが出ると、人は弱くなる」

「それは何だい？」

「守るべきものが無ければ、人はどんな無茶でも出来る。いくらでも自分を傷付けることが出来る。だから強い。だが、守るべきものが出来ればそうはいかない。そいつを、そして自分を守らなければならぬ。結果的に弱くなる」

「そういうものなのかねえ？でも、守るものの方に人は強くなれるんじゃないのかい？」

「それも正しい」

「矛盾しているねえ」

「ああ、矛盾している」

「……あたしはあんたに守られるのかい？」

「そういう日が来れば……な」

フーケはぶどう酒を一気に煽つた。

「普ハツ、……フン、否定出来ないのがどうにも悔しいねえ。あたしのパートナーなんて、あんたにとつては役不足以外の何者でもないからね」

「そうだな」

「否定しないんだね。……でも、あんたのそういうところは嫌いじゃないね」

「それは愛の告白と受け取つていいのか？」

「プツ、あんたがそんなジョークを言つなんてね」

「いつぞやのお返しだ」

「アハハ、そんなこともあつたねえ」

楽しい時間は早く過ぎ去るもので、気付くと店の客もボチボチ帰り始めていた。

「そろそろ出るかね？」

「ああ……」

2人はお勘定を済ませ、酒場を後にした。

酒場を出ると、フーケは「うーん」と伸びをする。

「ちょっと、喋り疲れたね」

「話が弾めばそうなる。お前はこの後どうするんだ？」

「少し野暮用があつてね」

「例の稼業か？」

「ハハハ、まさか。酒が入つてゐるのにそんな大仕事は出来ないよ。ちょっと、人に会いに、ね」

「そうか。じゃあ、ここでお別れだな」

「あんたにはまた会えそうな気がするよ」

「その時はお互ひ敵でないことを祈る。流石の俺も気に入つた奴を殺すのはいい気分じゃない」

「おお、怖いねえ。安心しな。まがり間違つてもあんたの敵になるような真似はしないからさ。でも、気に入つて貰えたことは素直に嬉しいよ。それじゃあね」

手をヒラヒラと振りながらフーケは路地の向こうへと消えて行った。フーケと別れたレイは取り敢えず宿を探そうと歩き始める。明かりの少ない路地を歩きながら、ふと夜空を見上げる。

空はすっかり深い闇に覆われ、一つの月の輝きだけが夜を照らしていた。  
その幻想的な美しさは何度見ても見飽きることがない。

暫く、夜空の双月を見ながら歩いていた。

「おじさん

その時、背後からレイを呼び止める声が聞こえた。  
振り向くと、そこには1人の少女が立っていた。

暗くて顔はよく見えない。

こんな時間、しかもこんな暗い夜道に1人でいる幼い少女。  
ただごとではない。

「何か用か？」

レイは訊ねた。

レイは別にお人好しでも無ければ、どちらかと言つて厄介ごとは避けたいタイプの人間であったが、この状況で自分を呼ぶ声を無視する程冷たい人間でも無かった。

少女は何処か暗鬱な目をこちらへ向ける。

「おじさん、もしかして凄く強い？」

「……弱くは無い」

それだけ答える。

少女はポケットの中を弄ると、2枚の銅貨を取り出した。

「……それがどうかしたか？」

「おじさん、これである人を殺して欲しいんだけど……」

「殺しの依頼？誰を殺すんだ？」

少女は今にも掠れそうな声で言った。

「……ラ・ヴァリエール公爵」

## トリストニアにて 1（後書き）

と言つわけで、マチルダさんと絡ませてみました。  
この2人は過去にも何かあつたようですが、その話は追々とこうじ  
とで。

## トリスターニアにて 2（前書き）

今回も原作キャラが出ます。

## トリスターニアにて 2

ラ・ヴァリエール公爵

言わざと知れたトリステイン『屈指の名門貴族である、ヴァリエール公爵家の当主である。

トリステイン王国とも関係が深く、国の重要人物の一人である。

政治や世相にあまり関心の無いレイでもそれくらいは分かっている。更に彼の妻力リーヌ夫人は、かの伝説のマンティコア隊隊長『烈風のカリン』である。

そんな人物を殺して欲しいと頼むのだ。

まともな思考をしていれば、誰も少女の言葉など歯牙にもかけないであろう。

何が少女をそこまで駆り立てるのか。

レイは少女にわずかながらも興味を抱いた。

レイは少女の顔を改めて見る。

暗くてよくは見えないが、薄汚れていて怪我もしているようだ。

近付いて間近で見てみると、少女の顔は痣と乾いた血にまみれていった。

ちゃんとしていれば年相応にあどけなく、可愛らしい顔つきをしていたのである。

「誰にやられた？」

「いっぺ……」

レイが訊ねると、少女は小さな声でそれだけ言った。  
どうやら少女は通りすがる屈強そうな者たちに手当たり次第に声を

掛けていたのである。

大半の連中は少女を無視したのだろうが、中には暴力を奮った輩もいたようだ。

レイは懐から特製の軟膏を取り出すと、少女に握らせた。

「…………これは？」

「見ての通り、俺みたいな奴の必需品だ。塗れば多少痛みは和らぐ」

「…………」

「いらないなら返せ」

「…………！」

少女は無言で軟膏を顔にペタペタと付けた。

時々、沁みたのか痛みに顔を歪ませるが、一通り塗りたくった後に軟膏をレイに返した。

それを懐に仕舞いながら、レイは少女に話し掛ける。

「さっきの話だが……」

その時、少女の腹の虫が「ぐーー」と鳴った。

少女は恥ずかしそうに顔を赤くして俯く。

見た目通りろくな食生活をしていないのである。

そう言えばレイも小腹が減っている。

先程の酒場ではつまみ程度の食事しか取つていなかつたことを思い出した。

レイはある程度空腹でも問題は無いが、少女はそもそも行かないだろう。

もつも田はまともなもの口にしていないという顔をしている。

「…………取り敢えず何か食つか？」

少女はこくりと頷いた。

無口だが、割と素直な性格らしい。

レイは少女を連れて歩き出した。

先程の酒場には大分長い時間滞在していたようで、もう深夜になろうとしていた。

この時間だと定食屋などの店はまず開いていない。

(そう言えば、確かにこの辺だつたか……)

レイはかつてこの街へ来た時の記憶を辿つて歩く。すると、1軒の酒場が見えてきた。

「さう、ここだ。『魅惑の妖精』亭」

そこは小洒落た看板と店構えが特徴的な酒場であった。外から見ると、店の中は盛況らしく、客入りも少なくない。レイは少女と共に店内へと足を踏み入れた。

「いらっしゃいませ~」

店に入ると、際どい格好をした黒髪のグラマラスな少女が出迎える。

彼女はレイの顔を見とめると、驚きの声を上げた。

「レイ! レイじゃない!」

「久し振りだな。ジェシカ」

「うわー、まさかレイが来るなんて夢にも思わなかつたよ。……しかも子供連れで」

「立ち話も何だ。取り敢えず席へ案内してくれないか?」

「はーい。えーと、2名様でいい?」

「ああ」

ジョシカに案内されて、レイと少女は店の方の席へと向かう。席に着くと、ジョシカが注文を聞きにやつて来た。

「『注文は何にする?』

「取り敢えず何か食うもの。そんなに高くも無く量があるものを出来るだけ早く頼む」

「ハーサイ、かしこまりましたー」

ジョシカが去ると、入れ替わりに中年の男がこちらへやつて來た。男はやたら筋肉質な肉体に女性用の服を着込んでおり、レイとは違った意味で人を近寄らせない雰囲気を醸し出している。男はレイの姿を見るなり、やたら甲高い声を上げた。

「あら! レイちゃんんじゃない! 久し振りねえー!」

「あんたも相変わらずだな、スカロン」

「ほんつと久し振りよ! いつこっちへ來たの? 手紙くらい寄越しなさいよ! ...」

「生憎だが俺は筆不精でね」

「そう.....。ところでその子は誰? .....まさかレイちゃんの子供!? 隠し子なの! ? ねえ! ?」

一人テンションを上げるスカロンに対し、レイは苦笑する。

「少々ワケありでね。まあ、俺の子供で無いことだけは確かだ」

「あらそり? ところで、フンフン.....お酒の臭い。レイちゃん、うち以外の店に入つて飲んだのね?」

「ああ、珍しい奴と出会つてな。ここで飲んでも良かつたんだが、

相手の素性が素性だけにな。お前も面倒に巻き込まれるのは御免だろ？」

「ふーん。ま、そういうことにしておこてあげるわ」

スカロンは拗ねたような顔をして言った。

その時、「ぐーー」という音が聞こえた。  
音がした方を向くと、少女がばつの悪そうな顔をして皿をそらす。  
そんな少女を見て、スカロンは「あらあら」と笑いながら去つて行つた。

すると、調度良いタイミングでジョシカが料理を持って現れる。

「お待ち遠様！鶏肉と野菜のクリーム炒めです」

ジョシカは馴れた手つきで皿を二つテーブルの上へ置いた。

いい匂いが漂つて来る。

レイは少女にフォークを渡す。

「ほら、食べる

「うん！」

少女はガツガツと料理を食べ始めた。

クリームソースが服や顔に飛び散つている。

傍から見れば行儀悪いことこの上ないが、レイは特に注意はしない。すると、ジョシカがナップキンを手に少女へ駆け寄つた。

「ほりほり、お口の周りがベトベト

まるで母親のようだ。ナップキンで少女に飛び散つたクリ

ームソースを拭つた。

ジョシカはレイの方を振り向く。

「もうー」いつ間にかちゃんと注意するのが大人の役目でしょ！」

「やうか。善処するよ」

「もう！」

ジョシカは頬を膨らませる。

レイは気にしないで料理を口にした。

「ふむ、美味しいな」

「でしょー？」

料理を讃められ、ジョシカが得意気になる。

実際に料理を作ったのはジョシカでは無いのだが。

今度はジョシカがレイに話し掛ける。

「でも、レイがここへ来たのって、そんなに前つてわけじゃないんだよね。何がずっと昔つて感じがするけど。トリステインに何か用でもあつた？」

「いや、特に理由は無い。暫くは滞在するが、またすぐ何処かへ行くなつむりだ」

レイは、田の前の少女をチラシと見ながら言った。

「なーんだ。私を嫁に貰いに来てくれたわけじゃないのね」

「それはまたの機会にさせてもいいよ」

ジョシカの冗談を軽く受け流すと、店の奥からスカロンが声を上げた。

「ジョシカー下らないこと言つてないであつちのお客に付いて頂戴

！」

「ハーアー……あれが地獄耳つて奴？」

「奴も奴なりにお前のこと我が心配なんだろ」

「そうなのかな？ そう言えば暫く滞在するんだつけ？ ならウチに泊まりなよ！ レイなら大歓迎だからさ！」

「そうだな……宿を探す途中だつたし、その好意を受け取ることにするよ」

「本当！ ？ ヤツター！ ジャあ、また後でね！」

レイに向かつて軽くバイバイをすると、ジェシカは別のテーブルに座つている客のところへ行つた。

ジェシカがいなくなると、この店に来て初めて少女と2人きりになる。

レイは田の前の少女の名前を知らないことに気が付いた。

「お前、名前は何だ？」

「……………」

「……………」

少女はもじもじと咀嚼しながら答えた。

何か口に入れたことで大分顔に生気が戻つて来ているようであった。先程までの思わず幽鬼と間違えてしまいそうな暗鬱な顔はもうしていない。

傷や痣を除けば、愛らしい少女そのものである。

こうして見ると、こんな少女がどうしてラ・ヴァリエール公爵の殺害などを口にするのだろうか。

レイは後できつちつとその辺のことを訊ねることとした。

「んつー！」

ユイは突然、フォークの手を止めた。

レイはやれやれといった感じで水の入ったコップを渡す。

「……急いで食つかうがつなる。ほら水だ」

ユイは慌ててコップを受け取るとじっくりと水を飲み干した。

一通り食事を終えると、2人はジェシカに寝室へと案内される。2人で1つの部屋であった。

「別に構わないよね？レイ」

「俺は構わないが……お前はどうだ？」

「…………（こくじ）」「

「だ、そうだ」

「じゃあ、お休みレイ。また明日ね」

そう言ってジェシカは欠伸をしながら再び仕事場へ戻つて行つた。酒場の喧騒は夜明けまで続くのだ。

部屋へ入るなり、レイはユイに訊ねた。

「ここならば、他人には聞かれないと……さつきの話の続きだが、何故ラ・ヴァリエール公爵の殺害なんかを企む？」

「…………」

「流石に何も聞かずに殺してくれ。と言われて殺すほど俺はお人好しでも血に飢えてもいないのでな

「…………お母さん」

「母親がどうした？」

「ラ・ヴァリエール公爵のせいでお母さんが……」

そこまで言つとコイの田から涙がこぼれた。

レイは何も言わず、続きを待つ。

コイは袖口で涙と鼻水を拭くと、話を続けた。

「……お母さんが病氣で、ずっと治らなくて。それで、お母さんの友達の人がお母さんを診てくれたんだけど。お母さんが凄く苦しくなっちゃって、そのお友達の人がいないとお母さん助からないのに、そのお友達の人をラ・ヴァリエール公爵がね取っちゃったの」

コイはたどたどしく起きたことを連ねていく。

「それでね。お母さんが……死んじやつたの……」

コイはそこまで言つて、わーっと泣き出した。

レイは今の話を自分の中まとめてみた。

「……つまり、お前の母親は重病で、それをその母親の知り合いの水メイジが看病していた。だが、ある日お前の母親は発作を起こした。だが、その時側にいる筈の水メイジはラ・ヴァリエール公爵に呼ばれて、お前の母親を診られなかつた。と、こうことだな?」

コイは泣きながら頷く。

「コイ、お前は貴族だったのか?」

レイは訊ねた。

平民であればいくら知り合いとはいえ、水メイジの看病をずっと受けたことなど財政的に難しい。

となると、コイの家は貴族である可能性が高い。

コイは鼻水を啜りながらまたも頷いた。

「そうか……不羨なことを聞くよりで悪いが父親はどうした?」

「スン、スン……お父さんは私が赤ちゃんだつた時に死んだつて聞かされました……」

「そうか。他に親類は?使用者とかは?」

ユイはブンブンと首を振った。

「そうか。コイ、お前は独りなんだな」

親を失つた小さい娘がそのまま貴族として生きるのは難しかつたのだろう。

誰の庇護も受けられず、そのまま家も失い路頭に迷う。  
没落貴族の成れの果てである。

残酷なことだが、その中で少女は生きて行かなければならなかつた。ゴミを食べ、地面を這いつくばり、時にはとても言えないようなことをさえしなければならない。

そんな劣悪な環境の中、少女を支えていたのが、あの日母親を救うチャンスを奪つたラ・ヴァリエール公爵への復讐心だつたのである。

自分では無理だと分かりつつ、それならばその復讐を実行してくれる人を探して、時に殴られても諦めずに。

「お前は強いな、コイ」

そんな絶望の中でも死を選ぼうとしない少女をレイは称賛する。  
生き抜くこと、それはとても誇りあることだから。  
レイは決めた。

「ユイ  
「  
「その復讐……元も受けたる」  
「……………」

ユイはレイの力強い言葉に思わず泣き止んだ。

## トリストニアにて 2（後書き）

出ました、スカラウンちゃんとジエシカ。

そして魅惑の妖精亭。

彼らとも過去に何かあつたようですが、それも追々……（こんなんばっかだ）。

そしてオリキャラであるコイ。

コイの年齢は大体10歳くらいです。

ちなみにコイという名前は某軽音楽部のキャラでは無く、某奇面組のヒロインから取りました。

## ヴァリエール領にて 1（前書き）

作中の文章を一部修正しました。

## ヴァリエール領にて 1

翌朝、レイは夜明けと同時に目を覚ました。

長年の習慣で、レイは起きたい時に起きる「」ことが出来るようになっていた。

例え起きる意思が無くとも、夜明けには目が覚めるように体が出来ている。

隣を見るとコイが安らかな寝息を立てて眠っている。

レイは音を立てずに部屋から出て行った。

暫くしてから戻ると、今度は寝ているコイの側へ寄つて行き、躊躇なく体を揺すつた。

「起きる」

「ん……ん～～～？」

コイは寝惚け眼を擦りながら顔を起こすと、不機嫌なのを隠さずには声を上げた。

「…………何？」

「起きる。出発するぞ」

「…………もう行くの？」

「善は急げ、とこつ奴だ」

「いぐり何でも早過ぎないか？」と聞く前にレイは支度を調えていた。  
コイはベッドから降りると欠伸をしながら着ている服を脱ぐ。  
コイが今まで来ていた服はあまりにもボロくなり過ぎていた為、昨日の晩スカラロンからジョシカが小さい頃に来ていた服を借りて寝たのだ。

また着替えも用意されており、『ひらひらが覚めたら着ていいの』ことであった。

若草色のワンピースで、高価な装飾こそ無いもののコボンなどの飾りが着てこる者の可愛らしさを強調させている。

（ジョシカの子供の頃のお洋服、もう着られないんだけどネ。でも何だか捨てるのも勿体無くて……。コイちゃんが着てくれるならきっとお洋服も喜んでくれるわ！どうぞ持つて行つて頂戴！）

スカラの言葉に甘えて、その服を貰つことにした。

ジョシカの服を着て見た目を多少改善すると、コイはとても可愛らしい少女に生まれ変わった。

元々貴族の出ということもあり、何處か氣品が漂つている。顔にはまだ腫れや痣が残つてはいたが、それでもなお可愛いと言わしめるだけの魅力は持つていた。

（腐つても貴族の令嬢……と言つたところか）

「…………」

「おつと、すまんな。じろじろ見て」

「…………別にいい。レイなら」

何時の間にか呼び捨てにされていたが、レイは特に咎めはせず、ただ肩をすくめるだけだった。

「何処へ行くかは知らないけれど、行つてらっしゃいね。また何時でも来て頂戴！」

「レイ～今度こそ私を嫁に貰いに来てね～！」

スカロンとジェシカに別れを告げ、レイとコイは『魅惑の妖精』亭を出発した。

街中でヴァリエール領方面へ向かう駅馬車を見つけると御者にいくらかの金を渡して2人で中へ乗り込む。

中には他に誰もおらず、まるで貸し切りのようであった。

馬車はそのままトリスターニアを発つと、街道をひたすら進んで行く道中、レイは特に言葉を発することはなく、目を閉じて瞑想をしていた。

対して、コイはこの沈黙があまり心地良くないのだが、レイに話しがけられる雰囲気でも無かつた為、せわしなく指を動かしたりして時間を潰していた。

そんな風に暫く揺れていると、途中の駅で商人風の格好をした壮年の男が乗り込んで来て、2人の前に座る。

男はレイの姿を見ると、物珍しそうな顔でこちらへ話し掛けってきた。

「おや、子連れの傭兵とは、これは珍しい」

男は口髭をいじりながらレイとコイの顔を交互に見やる。

「ここの先はヴァリエール領ですが、あなたさんはあそこに何か御用で？」

「……彼の高名なラ・ヴァリエール公爵殿」血魔の兵团に自分の腕を買つて貰えないかなと思つてね」

流石に今からラ・ヴァリエール公爵を殺しに行くとは言えない為、レイは口から出任せを言つて誤魔化した。

「成る程……。しかし、ここ最近のラ・ヴァリエール公爵は争いご

ととなるべく避けるように振舞っています。ここ最近兵力の増強もしていないみたいですし、あなたがいかに強くとも雇つてもうつの難しいかも知れませんよ?」

「その時はその時で考えるさ。何しろ、小さい子供を一人、養わなければならぬからな」

そう言つてレイはコイの頭を撫でた。

コイは少しだけ憮然とした表情でレイの顔を見る。

男はふんふんと頷きながら言つた。

「そうですか……。やはりこのご時勢、我々みたいな平民は大変ですね。……ああ、これはこれは私ばかり話してしまって申し訳ありません!」

男は被つていた帽子を取つて頭を下げた。

「申し遅れました。私はハイマンと言うケチな商売人です。普段はゲルマニアの方で商売をしとるんですが、少々こちらに用がありましてね。今はその帰りなんですよ」

ハイマンと名乗つた男はその手に焼けた浅黒い顔をニカッと笑わせた。

「どうです?御入り用のものは何かありますか?ここで会つたのものかの縁。お安くしますよ?」

なかなか商魂逞しい男だなとレイは思った。

こうして他人と積極的にコミュニケーションを取り、隙あらば密にしてしまおうという抜け目のなさ。

彼は生糸の商人なのだろう。

「いや、今は特に必要なものは無い」

「ナリですか……。では、また何かの縁で出合えたらその時はようしひお願ひしますよ、傭兵さん」

そう言つと、男は軽くウインクして見せた。

いつかこの男と再会したら、その時に思いがけず何か買つてしまいそうである。

「お、そろそろヴァリエール領ですよ。傭兵さん」

外の風景を覗いて見ると、畑が広がる田園地帯を進んでいた。  
農民たちがせつせと畠仕事に精を出している。

馬車はそのまま道を進み、最寄の駅が近付いて来た。

「俺たちはここで降りることにするよ」

「いやあ、短い間でしたが旅の仲間との別れはやはり辛いものですね。……お、着いたか。ここをずっと先へ行けばラ・ヴァリエール公爵の屋敷が見える筈ですよ」

「有難う、ハイマン……だつたか?」

「名前を覚えて頂いて光榮です。では、また縁があれば」

ハイマンは馬車の中からこちらへ向かつて手を振った。  
レイとユイもハイマンに向かつて手を振り返す。

やがて馬車は出発し、あつといつ間に見えなくなってしまった。

それから暫く経つたが、2人はまだヴァリエール領内の街道に立つたまま動かない。

ユイが不安そうな顔で訊ねる。

「…………どうやって、ラ・ヴァリエール公爵を殺すの？」

「それを今考えているところだ」

レイは特に問題はない。といった表情で返した。  
コイは少しだけ啞然とする。

そんなコイの顔を見て、レイは言った。

「まあ、何とかなるだろう

あまりにも堂々と言つてのけたので、コイは逆に何か安心してしまつた。

確かにレイならば何とかしてしまいそうだ。  
そういう雰囲気が何処かレイには漂っている。

「つたぐ、ここにいたのかい！」

突如、後ろから誰かに声を掛けられた。  
振り向くと、そこにいたのはエメラルドグリーンの髪の美女であつた。

レイは「待つっていたぞ」と言わんばかりの表情で彼女に話し掛ける。

「やあ、フーケ」

「やあ、じゃないつづーの。全く、朝いきなりあんたの顔見た時は心臓が止まるかと思つたよ

「悪かつたな、心臓に優しくない顔で」

「大体、何であたしの泊まつてた宿が分かつたんだい？」

「勘、だな」

「恐ろしい勘だねえ……何処ぞのカジノで大儲け出来るんじゃないかい？」

「お前の気配を感じした。と言つてもお前は信じないだろ?」

「そっちの方が余計に恐ろしいよ！あんたは本当に化け物じみてるねえ」

フーケは両手で体を抱いて震えるポーズを取った。  
レイはフツと笑った。

「お前が俺を尾行していた時のことを覚えているか？あの時、気配を消していてもお前が何処にいるかは分かつていた。それならば逆也可能だろ？」

「随分とまあ、簡単に言つてくれちゃつてるケドねえ……」

フーケはチラリとコイの顔を見た。

「……で、この子は一体あんたのなんなのさ？……隠し子？」「いや、違う。……実はこの子のことでお前に頼みがある」「まさかあたしに養え！とか言わないだらうね？」「そうしてくれるなら是非とも頼みたいが、今頼みたいことはそれじゃない」

「……何だい？……聞くだけなら聞いてやつてもいいよ」

「回りくどく言つのは面倒だし、お前と腹芸するのもアレだ。單刀直入に言おう。ヴァリエール公爵家の情報……主にラ・ヴァリエール公爵の動向についてだが、それをお前に探つて欲しい。出来るか？」

「……これまた無茶言つねえ。ラ・ヴァリエール公爵と言つたら彼のヴァリエール公爵家じゃないか！そこへ忍び込めつてかい？」

「別に盗みに入れとは言つていない。ラ・ヴァリエール公爵の動向。その情報だけ知りたい。それならば、宝を盗むよりもリスクは少ない筈だ」

「元々でかいリスクなんだから少し小さくなつたって危険なのは変わらないよ。それに情報つて言つても、どういう情報が欲しいんだ

い？成功する確率はその内容にもよるよ？」

「例えば……」

「例えば？」

「ラ・ヴァリエール公爵が必ず一人で出掛ける用事……とかな」

「そんな都合のいい情報あるわけが……」

「当てはある」

レイはユイの方を振り向いた。

ユイが昨日話してくれたこと。

ラ・ヴァリエール公爵はユイの母親を看病していた水メイジを呼び寄せた。

一体、何の為に？

ただの嫌がらせ？

……そんなことする意味も理由も無い。

誰かが急病だつた？

……ヴァリエール公爵家は貴族の中でも有数の名家だ。お付きの水メイジや懇意にしている水メイジの一人や二人はいるだろう。

それらの水メイジでは解決出来ない問題があつた？

……「これが正解だろう。でなければわざわざ他人が懇意にしている水メイジを呼び寄せたりはしない。

では、その問題は何か？

恐らく、ずっと長い間病気で苦しんでいる身内がいたのだろう。

その身内には自分たちが知る水メイジのありとあらゆる治療を試したが効果が無かつた。

それ程の重病なのだろう。

だから、一縷の望みを託してユイの母親を看病していた水メイジを呼び寄せた。

ユイの母親も相当な重病だつたらしいから、その水メイジも相当優秀だつたのだろう。

これがラ・ヴァリエール公爵の目に留まらぬ筈が無い。

そして、それ程の重病ならばいくらその水メイジが優秀でも完治はしていないうだろ。

貴族の中には体裁を保つ為、重病の身内を別の場所で療養せることがあると聞いたことがある。

ここからはあくまで都合のいい想像だが、ラ・ヴァリエール公爵の身内が別の場所で療養しているならば、その病氣の身内をラ・ヴァリエール公爵が訪問する口があるかも知れない。

いや、身内だからこそ訪問せざるを得ないだろ。

そして、ラ・ヴァリエール公爵と言えば、ただでさえ国の重要人物と謳われているような人物である。

ならば堂々と訪問はしない。

訪問するならば隠れてこつそりとする筈。

その時を狙え。

レイは自分の考えをフーケに伝えた。

「出来るか？」

「……ちょっと考え方をさせてくれるかい？」

フーケはそう言つと考え込んだ。

無論、先程の意見はあくまでレイの推測であり、希望的観測も含ま  
れている。

理路整然としているなどと胸を張つて言えたよつたことではない。  
断られる可能性は低くはない。

断られれば、別の手段を考えるまで。

レイが1人そつ思考にふけていると、コイが心配そつな顔でレイを  
見つめた。

レイはコイの頭を馬車の中でしたのと同じ様に撫でた。

そうじてこる間もフーケは考え込んでいた。

暫く考えた後に「ウン」と頷くと、フーケはレイに改めて向き直つ  
た。

「面白いじゃないか。いいよ、引き受けろ。あんたには借りもある  
しあ。ついでに、ヴァリホール公爵家の宝でも見つけたら儲けものだ  
しねえ。『土くれのフーケ』一世一代の大仕事だね！」

そう言つフーケの顔は、まるで悪戯をする子供のように無邪気な顔  
となつていた。

## ヴァリエール領にて 1（後書き）

オリキヤラその2、ハイマンが登場しました。

年齢的には40歳程度です。

そして、マチルダさん再登場で話は佳境へ。

## ヴァリエール領にて 2（前書き）

今回は多少原作とは異なる設定が入ります。  
ご了承下さい。

## ヴァリエール領にて 2

レイとコイはヴァリエール領内の小さな農村に滞在していた。いくらフーケが凄腕の盗賊とは言え、相手はあのヴァリエール公爵家である。

そんなすぐには情報を得ることは出来ない為、暫くは何処かに滞在する必要があった。

2人は村長に話をつけて、宿泊費を出す代わりに村長の家へ泊めてもらっていた。

「すまないな、村長。急に押し掛けるような感じになつて」「いえいえ……。婆さんに先立たれてからずっと独りだつたからねえ。誰かが側にいるつてだけで儂は嬉しいよ。それで更に宿泊費までくれるんなら、文句なんかとても言えないねえ」  
「やう言つてもらえると助かる」

レイは村長に素直な感謝を述べる。

一方、キッテンの方ではコイが何やらシチューのよつなものを作つていた。

いい匂いが仄かにしてくる。

ここ数日間、村長の家の炊事洗濯などはコイが行つている。まだ幼く、しかも元貴族の令嬢という身でありながら、こうして家事が出来るのは、そういう教育が行き届いていたことは勿論、やはり母親が病気だったといふことも関係しているのだろう。

「……出来た」

耳をすまさないと聞こえないほど小さな声でコイは料理の完成を告げた。

村長はそんなユイを見ながら微笑む。

「あんたたちと一緒にいると、まるで息子と孫娘が同時に出来たみたいで……。死んだ婆さんは子供が作れない体で、孫はおろか、子供すらないなかつたからねえ。いい死に土産だよ」

「あんたが死んだら次の村長はどうするんだ?」

「村長って言つても、ここは見ての通り村と呼ぶのもおこがましい集落でして。こんな集落でも人がそれなりにいると領主様は税を取りになられますから、そういう時に面倒な手続きをする役を押し付けられただけなんですよ。儂が死んだら、別の奴がその役をやる。それだけでねえ」

「そうか」

レイはそれだけ言つに留めた。

すると、ユイが出来たてのシチューを皿に入れて運んできた。

「……どうだ?

レイは木のスプーンでシチューを一口啜った。

村で採れた野菜の残りくずで作った割にはなかなかの出来である。

「美味しいな……体も温まる」

「……有難う」

ユイははにかんだ。

その様子を村長は満面の笑みで見つめていた。

こうして今日も楽しい夕餉となつた。

食事が終わると、村長はゆっくりと立ち上がる。

「さあ、儂はもう寝ますだ。どうも年を取ると、飯食つた後にすぐ

に眠くなつていけねえ

そう言つて村長は寝室へと向かつた。

この数日間、村長は夕食の後はすぐに眠つていた。

だが、早く眠りにつく割にレイより起きるのは遅かつたりする。

食器の片付けを終えたコイはテーブルに戻つて椅子に座ると、向かい側に座つているレイに訊ねた。

「……怖くないの？」

「……何がだ？」

「……メイジが。レイは平民でしょ？」

ここハルケギニアの世界において貴族、そしてメイジといつ存在は別格である。

平民が彼らに逆らうことは勿論、戦うなど以外である。

仮にそういうことを口にする平民がいたら、気でも触れたかと思われるることは必至である。

特に貴族の場合は下手すれば侮辱した罪で処刑されかねない。

これから対峙するであろうラ・ヴァリエール公爵は生粋の貴族で優秀なメイジである。

彼の伴侶が伝説とも謳われた『烈風のカリン』であることからレイマチ忘れられがちだが、彼自身も高い実力を秘めている。

殺すと言つて簡単に殺せるような相手では無いのだ。

レイは確かに何処となく普通の平民とは違う雰囲気を持っている。だが、魔法を使うことも出来ない彼は、やはりただの平民でしかないのだ。

「逆に殺されるって思わないの？」

「……じゃあ、逆に聞くがメイジだから何なんだ？」

コイの問いにレイは淡々と答えた。

コイはあまりに素っ気ない答えたのと、自身もレベルが低いながらもメイジの端くれであつた為、少しムッとした。

「だつて、メイジは魔法を使う……。私だつて少しの魔法なら使える。でもレイは使えない。魔法を使われたら……」

「魔法を使われたら何が不味いんだ？」

「え？」

「魔法なんて言ったところで所詮は武器の一つに過ぎない。銃やナイフと一緒にだ」

あっけらかんとレイは言つてのけた。

コイはレイのあまりに無謀な態度に首を横に振つた。

「レイは分かつていないよ。魔法つて怖いんだよ？」

「分かつてるさ。十分過ぎる程に、な」

そう言つと、レイは左手の手袋を外した。

コイはレイの左手を見て思わず息をのんだ。

「……それ……！」

レイの左手は細かな傷跡があちこちに刻まれているが、それより目立つたのは左手の半分を覆うほどの火傷の跡であった。  
肌が妙な色に変色し、ただの火傷で無いことが一目で分かる。

「どう……したの？」

「……これは何処ぞの陰険クソジジイとやり合つた時に出来たものだ。相手は相当な強者だった。そいつはスクウェアを超えた。とか

自称していやがつたが、その戯れ言に違わないくらいには強かつたよ。そいつの火の魔法を受けて左手が炭クズみたいになつてな。知り合いに治療してもうひとつやくこじまで回復したよ。だから俺には魔法の恐ろしさも便利さもよく分かってるつもりだ

「……そのメイジは？」

「叩き切つてやつたわ。この手で真つ一につにな。まあ、それでも死んでるとは思えないのが奴の本当の恐ろしさではあるが……」

レイは苦笑する。

「俺にとつて魔法なんてそんなよつたものだ。相手が使う武器の一つでしかない。使われると不味いなら使われる前に斬り伏せてしまえばいい」

普通の人人が言えれば、夢物語、または妄言となりそうな言葉だが、レイが言つとまるで簡単な出来事のよつて聞こえる。

「俺もお前に一つ聞いていいか？」

「……？ なあに？」

ユイが小首を傾げた。

レイはユイの顔を改めて見据えた。

「お前は本当はじつしたいんだ？」

「……じつこじつ」とつ

「言葉を変える。お前は本当にラ・ヴァリエール公爵を殺して欲しいのか？」

「……じつじつむずつ思つの？」

「お前の言葉には殺意が無いからだ」

レイは指摘する。

「本気で相手を殺したいと思つたら、普通は殺意を抱く。それはどんなに隠していても言葉や仕草から読み取ることが出来る。だが、お前からは一切の殺意を感じない」

「…………」

「お前は一体どうしたいんだ？」

「…………分からぬ」

ユイはそう言つとボロボロと大粒の涙を零した。

「分からぬ……分からぬよ。ラ・ヴァリエール公爵がおじちゃんを呼び出さなければおじちゃんがおかあさんを助けてくれた。おじちゃんを取つたラ・ヴァリエール公爵がにくい！殺したい！でも、でも……分からぬの」

今、ユイの中には様々な感情が渦巻いているのだろう。

母親を失い、家を失い、全てを失つた。

幼い彼女がその現実をすぐに受け止めるのは、とても難しいことだつたに違ひない。

最初は困惑、そして時を重ね、現実を受け入れていくことでは復讐心に変わつて行つた。

だが、幼い彼女は憎悪をずっと心の中に飼つておける程強くは無かつた。

彼女は生きている。

だから、日々を重ねていく内にそれは別の感情によつて薄れしていく。復讐相手のラ・ヴァリエール公爵にしても、彼が直接ユイの母親に手を下したわけでも無いが故に復讐の相手としてのイメージは薄かつたのだ。

「殺して欲しい」と街往く人たちに頼んでいたのも、その憎悪を忘

れたくない一心だったのだらう。

憎悪を忘れることは母親を忘れることに等しい。

幼い彼女にはそう思えて仕方なかつたのだから。

本当はもう復讐なんて考えていかないかも知れない。

「……でも、復讐は成就させるべきだ」

「え？」

レイの意外な一言に、ユイは目を丸くした。

「俺の知り合いがこう言つていた。『復讐しなかつた後悔は、してしまつた後悔よりも深い』とな。俺は何となくだが理解出来る」

「復讐しなかつた後悔……」

「殺す、までは行かなくても、すべき復讐はするべきだと、俺は思

う」「  
レイ

(レイ、君は歪んでいるね)

かつて、言われた言葉。

レイはそれを自覚しているつもりであった。

自分は決して正しくないし真っ直ぐではない。

間違つていて当然の存在であると。

だが、改めて他人に言われると、それに反発している自分がいることに気が付く。

自分はどうありたいのか。

レイはまだそれを完全に見つけてはいない。

だから、旅を通してついでにそれを探しているのだ。

「俺は歪んでいるか？」

思わずレイはその言葉を口に出していた。  
すかさず口元を手で押さえる。

自分はどんな言葉を期待しているのか。  
ユイが不思議そうにこちらを見ている。  
そして、何か言おうと口を開こうとした。

その時、何かが窓を叩く音が聞こえた。  
窓の方へ目をやると、そこに人の影が見える。

「……来たか！」

レイの言葉にユイは思わず口をつぐんだ。  
目をじっじっと擦つて涙を拭き取る。

2人は村長の家を出て裏手に回ると、そこには黒いロープを羽織つたフーケが立っていた。

フーケの姿は夜の闇に溶け込んでおり、よく目を凝らさないと気付かない程である。

こういうところからも彼女がただのゴソ泥とはレベルが格段に違うことが伺える。

レイはフーケに話しかける。

「世間を騒がす大怪盗にしては、少し遅かつたんじゃないかな？」  
「相手はあのヴァリエール公爵家だよ？寧ろ、これでも早い方さ」「で、どうだつた？」

「あたしを誰だと思っていたんだい？あなたの欲望の情報、掴んで  
来たよ」

フーケは指でOKのマークを作った。  
レイは素直に感心する。

「流石は世間を騒がせているだけのことはあるな」「実力あつての名前ってわけさ。……で、ラ・ヴァリエール公爵のことなんだけどさ」

フーケは辺りを警戒し、声を潜める。

「ラ・ヴァリエール公爵は月に一度か二度、虚無の曜日に非公式で、ある場所へ出向いているそうだ」「ある場所とは何処だ？」

「ラ・フォンティーヌ領。聞くところによると、そこにはラ・ヴァリエール公爵の娘が療養しているそうだよ。ラ・フォンティーヌ領へ続く道でヴァリエール公爵家の馬車が通ったのを何人かの農民が目撃してる。お忍びの訪問の割に厳重に口止めしていないのを見ると、たかが平民と氣にも掛けていなかつたみたいだねえ。まあ、根っからの貴族主義の公爵様らしいけどさ」

そう言いつと、フーケは肩をすくめて見せた。

「虚無の曜日……丁度明日か」

「更に耳寄りな話があるんだけどねえ、明日の昼頃にびりやう・ヴァリエール公爵が例の非公式訪問を行うみたいなんだよ」

「それは本当か！？」

「ああ、間違いないよ。非公式訪問の際にいつも連れる護衛のメイジを呼び寄せたらしいんだよ」

「なるほど、それならラ・フォンティーヌ領へ先回りするか……それでもお前のその情報網は凄いな」

「情報は本業の命綱だからねえ。それなりに信頼出来る情報屋をあ

ちこちに置いておくれるのは常識だよ

「怪盗の常識は知らんが……助かつたよ」

「いいよ。それに言つたら？あんたには借りがある。それを返すチヤンスが来たと思えばね」

フーケは不敵な笑みを浮かべて見せた。

「行くぞ、コイ。今から行けば、ラ・ヴァリエール公爵より先にラ・フォンティーヌ領へ着くことが出来る」

「…………うん」

「こくりと頷くコイ。

レイはフーケに向かつて袋を投げた。  
フーケは慌てて受け取る。

「何だい？これは？」

「あの爺さんに渡す予定だつた宿泊費の残りだ。俺たちはもう発つてここへは戻らないからな。その金はお前への謝礼代わりだ」「別にあんただつたら金はいらないんだけどねえ。おや、そこの入つてるじゃないか。……あとでテファのところに送るかねえ」

「…………有難うございました」

コイは礼儀正しくペニワと頭を下げた。

フーケは笑いながら手を振ると、やがて夜の闇に完全に溶け込み、  
その姿を消してしまつた。

レイはコイを連れて夜の街道を進む。  
その道中、コイはボソッと呟いた。

「レイは別に歪んでいないよ…………」

その言葉はレイに届くことは無く、夜の闇へと消えて行った。

## ヴァリエール領にて 2（後書き）

カトレアさんを二つの都合で血祀ではなくラ・フォンティーヌ領へ移動させてしました。  
色々と申し訳ございません！

## ラ・フォンティーヌ領にて 1（前書き）

今回もかなりのオリ設定が入っています。  
ご了承下さい。

## ラ・フォンティーヌ領にて 1

ラ・フォンティーヌ領に2人が辺り着いたのは、夜明けから少し経つた後であった。

まだ朝の気配が辺りを支配している。

フーケから教わった場所へ近付くと、大きな屋敷が見えた。あそこにヴァリエル公爵の娘が療養しているという。

「行くぞ」

「……………！」

レイの言葉にユイは無言で頷いた。

なるべく人目に触れずに、道無き道を移動する。やがて、屋敷の敷地内へと足を踏み入れた。

敷地内に入ると、珍しい鳥や動物などが放し飼いにされているのをよく目にした。

山猫や狼などがこちらを監視するように見つめている。

本来夜行性である筈の彼らがこんな朝っぱらから人前に姿を現すはどう考えても不自然である。

（人の手で飼われた……か）

何処か威嚇するような目付きをしているが、迫力は野生のそれとは明らかに劣っている。

恐らく屋敷の中の“主人”を守ろうとしているのだろうが、これで

は小心者のコソ泥ぐらいしか追い払えないだろう。レイが少しだけ殺氣を向けると、彼らは目に見えてたじろぎ後ずさ

つていつた。

相手が自分では敵わない存在であることを認識出来るくらいには野生が残つているようである。

屋敷の側まで来ると、レイは感覚を研ぎ澄まして、敵の気配を探つた。

これだけ大きい屋敷で、更に公爵の娘が療養しているとなれば見張りも少なくはないだろう。

(……おかしい。明らかに人が少ない)

先程よりも感覚を研ぎ澄ますが、それでも感じる気配は僅かであった。

レイのこの能力は何度も死線を潜り抜けた末に身に付けたもので、感覚的なものである。

機械のように正確では無く、相手の数が多いか少ないかくらいしか分からぬ。

それなりの実力者であれば、その者の“オーラ氣”として認識することも可能であり、フーケの時のように相手を探すのに使えることもある。この能力は幾多の場面でレイを救つて來た。

敵の数を知ることは戦場ではとても重要なことであり、それ如何で戦い方も変わつてくるからである。

故に、レイは自分のこの感覚を大事にしていた。

それが示す情報なので、疑うのはレイにとつても不本意ではあるが、常識的に考えて公爵家の娘の家の警備が手薄などとは有り得ないことである。

(考えられるのは、ヴァリエール公爵自身が既に娘を切り捨てているか、もしくは娘本人がそう言い付けたか……つてところか)

月に必ず一度は非公式で訪問する程に通いつめているヴァリエール公爵が、いくら重病だからとは言え愛する娘を切り捨てるとは考えにくい。

ということは、その娘があまり警備されるのが好きではないという方が可能性が高いであろう。

自殺願望でもあるのだろうか。とレイは思った。

公爵家の娘である以上、彼女を付け狙う輩はいくらでもいるだろう。しかも、本人は重病なのである。

それに対する備えを拒否するのは、公爵家に生まれた人間としては正気の沙汰ではない。

僅かに感じた気配は、恐らくヴァリエール公爵が彼女に内緒で置いて行つた者であろう。

そこそこの手練ではあるようだ。

「見張りが邪魔だな……」

レイは一人ごちた。

「ユイ、お前はここで待つていろ。すぐに戻つて来る

「え? ……うん」

レイは血の氣配を消すと、さつと駆け抜けて行つた。

「ヘクトス。調子はどうだ?」

「ダイラーか。ああ、悪くは無いよ」

2人の男がそれぞれ庭の整備をしながら会話を交わす。  
ヘクトスは植木の手入れを。  
ダイラーは花に水をやっていた。

2人は、この庭について何か変化は無かつたか。  
動物たちはどうしているか。

などの情報をお互いに笑顔交じりで交換し合っていた。  
そうした話を終えると、2人は途端に顔から笑みを消して、違う話を始める。

「……今のところ、何か問題は無いか？」

「ああ。問題は無い」

「……この間は、山賊の連中が屋敷の中へ押し入るうとしさがつた  
からな」

「そうだな。あの時は俺とお前で連中をやらなかつたら、カトレア  
お嬢様に危害が及ぶかも知れなかつた」

「カトレアお嬢様もお嬢様だな。『警備はいりません』って頑なに  
拒んでしまわれて。……公爵様からのお言い付けで、俺たちが庭師  
としてここに潜り込んでなければ何度も死んでいたか」

「侍女や執事も遠ざけて……あの大きなお屋敷にはカトレアお嬢様  
と最低限のお付きの者しかいない」

「……こんなこと聞かれたら公爵様に殺されるかも知れないけど…  
死にたいんだろうな、カトレアお嬢様は」

「やはり、御病気のことを負い目に感じていらっしゃる?」

「……エレオノールお嬢様もカトレアお嬢様の為にアカデミーに行  
つて研究の毎日……この間のご婚約も破談となってしまったそ  
うだ」

「ルイズお嬢様もカトレアお嬢様の為に水メイジになると仰られて

ましたね。……御自分の御病氣のことで愛する姉と妹の将来が狂わしてしまつことが耐えられないのかも知れないな」

「……ああ、始祖ブリミルも何と残酷な運命をカトリアお嬢様に背負わされたのか」

「……そろそろ仕事に戻るぞ。……庭師のな」

「……ああ」

ヘクトスとダイラーはそれぞれ仕事に戻らうとお互に背を向けた。その時であった。

「！？」

ヘクトスは目の前に見知らぬ男が現れたのを直視すると、その直後に重たいハンマーで殴られたような衝撃を腹部へ受けた。

胃の中のものが急激に逆流して彼の口を塞ぎ、呻き声一つ上げられずに膝をつく。

その状態で頭部へ更なる衝撃を受け、ヘクトスはそのまま深い深い闇に沈んだ。

ドサッとう音を聞いて慌ててダイラーは杖を抜いて振り返る。しかし、そこには倒れたヘクトス以外に誰もいなかつた。

「ヘクトス！…」

ヘクトスへ駆け寄ろうとした瞬間、ダイラーの首に何かが巻きついた。

それが男の腕だと分かった瞬間、そのまま絞め上げられた。

急激に首を絞め上げられた為、瞬間に呼吸が止まり意識が混濁する。

首に巻きついた腕はそれ程太くもないのに、振りほどくことが出来

なかつた。

男はダイラーの手に持つた杖を奪つと、田の前でへし折つて見せる。そして、ダイラーの耳元で囁いた。

「……他に見張りは？」

「……賊に語る言葉など無い！」

「……」

男はダイラーの口に片手を突っ込むと、奥歯を2、3本素手で引き抜いた。

「ゴア！？ガツ！…！」

激痛と同時に口の中が鉄の味に塗れる。  
男は冷たい声でもう一度耳元で囁く。

「他に見張りは？」

「……いない。俺とヘクトスだけだ」

「見張り以外は？」

「……お嬢様を世話をする者が一人いる。それ以外は……いない」

「そうか……」

男はそれだけ言うと、首を絞める力を強めた。

ダイラーはあつという間に意識を手放し、口から血を零しながらガクッとうな垂れる。

それを確認すると、男は彼らを近くの茂みの中へ隠してその場を去つて行つた。

数分後、レイが戻つてくるのを確認してユイは安心する。

「レイ……！」

「見張りは消した。他にはいないそうだ」

「……殺したの？」

「いや、殺してはいない。それなりに怪我は負わせたかも知れんが、魔法なら十分治療出来るレベルだ。……屋敷の中にも世話係が1人いるだけらしい。乗り込むなら今だな」

「……分かった」

レイとユイは堂々と正面から屋敷へと乗り込んだ。

屋敷の中へ入ると、中にも様々な動物たちが放し飼いにされていた。まるで、動物園のようである。

2人はそれらに構わず進んで行くと、途中で中年の女性と鉢合をする。

どうやら彼女が見張りの言っていた世話係のようだ。

「……ひ、ひいい、ど、どちら様で！？」

「調度いい。案内しろ。ユイで療養しているという女の元へな

そう言うとレイは彼女を案内役へと仕立て上げた。

彼女も恐怖のあまり、レイの言いなりとなつて行った。

彼女はある部屋の前まで案内すると震えながら言つた。

「ユイ、ここがカトリアお嬢様のおおおお部屋でござります……」

レイとゴイは額を合ひつて、その部屋の扉を躊躇無く開けた。

部屋の中には、大きなベッドとその中で上半身を起こしながらこちらを見ているピンクブロンドの女性がいた。

彼女は柔和な笑みを浮かべると、その可憐な口を開いてレイへと話し掛けた。

「どなたですか？……私に何か用ですか？」

「ああ……」

レイは感情も込めずにそれだけ言つて、部屋の扉を閉めた。

## ラ・フォンティーヌ領にて 1（後書き）

完全にオリ<sup>設定</sup>入ってますね（汗）。  
あまり原作と乖離してしまった展開は少ない方がいいですかね？  
ご意見、ご感想お待ちしています。

## ラ・フォンティーヌ領にて 2（前書き）

コイの復讐の物語もいよいよ佳境を迎えるました。  
不定期更新と言つた割に、しつちのが定期的に更新されてるのは内  
緒です（汗）

## ラ・フォンティーヌ領にて 2

某日、虚無の曜日。

ラ・ヴァリエール公爵は護衛用に2人のメイジを連れて、ヴァリエール家を出発した。

馬車を走らせ、ラ・フォンティーヌ領へと急ぐ。  
車内は重たい沈黙に満ちており、2人のメイジも口を開じて、ただじつとしているのみであった。

ラ・ヴァリエール公爵が目を閉じ、ため息を吐く。

「……またもカトリアを救つてくれる水メイジは見つからなかつたか」

誰に言つても無く、そう呟く。

こうして月に1度か2度、わざわざ会こに行くのも、ただ愛娘の顔見たさだけで行くわけではない。  
巷で評判の腕のいい水メイジを探しては、治療の為に連れて行くのも目的の一つであった。

しかし、どんなに腕のいい水メイジを連れて来ても、娘の病氣を完全に治療してくれる者は一人もいなかつた。  
現状維持が闇の山である。

そうして国内有数の水メイジを次々と連れて行き、今では連れて行く水メイジもいなくなってしまった。

それでも、娘の顔を見たいと思うのは親としては当然の感情である。故に、訪問自体を止めることはしなかった。

ラ・ヴァリエール公爵は田の前に座る2人のメイジに声を掛けた。

「エイフラン、シイモン

「「はっー。」」

「……いつもすまないな。私の我が身に付き合わせてしまつて」「そんなことはありませぬ！」

エイフランが首を振つて否定すると、シイモンも続く。

「我々の身も心も公爵様のものでござります。何をお気遣いなされますか！」

「公爵様は氣兼ねなく、我々をチエスの駒のように扱つて下さつて良いのです」

2人の言葉にラ・ヴァリエール公爵は田頭を押さえる。

「……私としたことが、カトレアのことで少々参つていたよつだ。そうだな、貴様らの命は私のものだ。これからも存分に働いてくれるな？」

「勿論でござります」

「右に同じ……！」

その時、ポツポツと雨が窓を叩き始めた。

ラ・ヴァリエール公爵を乗せた馬車が間もなくラ・フォンティーヌ領へ入るという頃には雨は本降りとなつっていた。

「……嫌な天氣だな」

ラ・ヴァリエール公爵は呟いた。

まるで、この先の未来を暗示するかのように暗くなつた空を見上げて。

ラ・フォンティーヌ領に入つてから暫くすると、カトレアが療養している屋敷が見えて来た。

その途端、かつてない程の不安に襲われた。

(何だ……!) もやもやしたものは? )

ラ・ヴァリエール公爵は突然湧き上がった不安を何とかして振り払おうとする。

……大丈夫、何も無い。

いつもの様に屋敷の中でカトレアと世間話をして、その後に帰る。それだけだ。

……本当に?

ザ――――――

しかし、それを許さないかのように兩足は強くなるばかりであった。

「あなたたちは……一体何者なんですか! ?」

カトレアは顔に不安の色を滲ませながら言った。

レイはまるでそこらに落ちて いる石を見るかのように興味無むをつ

な顔でカトレアを見つめている。

その無機質で機械的な表情がカトレアに恐怖を『え』ていた。

カトレアは幼い頃からとても感受性が強かつた。

動物たちの心が手に取るように理解出来、まるで会話をしているかのようであった。

動物たちもそんなカトレアに懐き、自然とカトレアの周りには様々な動物たちが集まるようになっていた。

また、カトレアは人の心の機微にも敏感であった。

相手がどういう人物であるかも、一目見ると何となくだが分かるような気がしていた。

そしてそれは実際によく当たつており、カトレアの勘のするどさは、まるで魔法みたいだと彼女の父や母も驚きながら話していた。カトレア自身は人の心を完全に理解出来るなどと自惚れたことは無いが、それでも人と出会った時の第一印象は大事にしていた。

だからこそ、目の前の男にカトレアは脅えていた。

それは相手が殺意に満ち満ちていたからとか、そういうことでは無かった。

目の前の男があまりにも空っぽであること。

そのことに脅えていた。

その目はガラス細工のようで、生氣を感じられなかった。

その口は死人のような土氣色で、まるで呼吸をしていないかのように微動だにしていなかつた。

そして、その心は何も無い、正に空虚であった。

彼女のそつ多くは無い出会いの中でも、レイは異質の存在であった。まるで人間であることを捨ててているかのように。

「……俺はまだ人間を止めたつもりは無いんだがな」「え？」

レイの一言にカトレアは思わず息が止まる。

自分の心が読まれたのか。

そう思つていると、レイがフツと笑う。

「前にそんな風に俺を言つた奴がいてな……。お前は今、そいつと  
同じ目をしていたぞ？」

「…………すみません」

カトレアはそう言って、本当に申し訳無む邪じやくに頭を下げた。  
それを見てレイは肩をすくめる。

「あんたは面白い人だな。今の状況を見てみる。あなたの生殺与奪  
を握つてるのは俺たちだ。罵られこそすれ、謝られる道理は無いな  
「…………すみません」

カトレアは再び頭を下げる。

改めてレイの顔を見ると、先程よりかは人間らしさを感じられるよ  
うになつていた。

どうやら、先程は不安などで少々困惑していたらしい。

とは言え、やはりレイの心は他の人に比べて読みにくいくには変  
わらない。

カトレアは不安な表情のままレイの顔を見つめていた。  
レイは興が削がれた、という表情でコイの方へ顔を向ける。

「…………！」

コイは無言ではあったが、まるで悪鬼のような目付きでカトレアを  
睨み付けていた。

歯を食い縛り、拳を強く握り締めている。

ユイに取つてカトレアは母親が死ぬことになった最大の要因である。それを実際に目の当たりにすることで、ユイの中で燃り始めていた復讐心に火がついたのである。

「…………」

レイは再びカトレアの方へ顔を向けた。

「俺たちがここへ来たのは何故か、それは分かるか？」

「いえ……。でも、あなたの隣にいるその子からは私に対する強い憎しみを感じます」

カトレアはユイの方へ視線を移した。

「ごめんなさい……。何であなたがそんな風に私を憎んでいるのか、私には分からないの……」

「…………！」

ユイは何も言わない。

ただ無言で睨み付けるだけであつた。

レイが言葉を続ける。

「ここに用があるのはこの子……ユイだ。勿論、あんたにも用はあるが、それ以上に用のある奴がいる」

「…………もしかしてそれは……！」

「あなたの父親、ラ・ヴァリエール公爵。俺たちはそいつへ復讐の為にやつて來た。いや、俺たちでは無いな。この子は、か。俺はその手助けだ」

「…………！」

カトレアは絶句する。

まだ見た目にも幼い少女が、自分と父親へ復讐の為に、ここへとやつて來た。

そして、その理由にまるで見当がつかない。

そのことにカトレアは大きなショックを受けていた。すると、カトレアは急に咽始める。

「ウツ、ゴホツ、ゴホツ！」

「カトレアお嬢様！？」

レイの後ろで震えていた世話係の女性が慌てて部屋内に置いてある水差しを取つてカトレアへと駆け寄つた。  
水差しを直接カトレアの口に付け、少しづつ彼女の口の中に水を流し込む。

カトレアの喉がぐくりと動く。

「……ハア、ハア。有難うビーチ。も、もう大丈夫よ」

「し、しかしカトレアお嬢様！！」

「ハア、ハア……」

荒い呼吸を何度も繰り返すカトレアだったが、暫くするとそれも落ち着いてくる。

「……本当に大丈夫よ。急なことに少し驚いただけ。あなたはこれから出た方がいいわ。もしかしたらあなたを巻き込んでしまうかも知れない」

「そ、それは出来ません！！カトレアお嬢様にもしものことが起きたらどうなさるおつもりですか！」

「……すみません」

「カトレアお嬢様！そんなこんな卑しい身分の者に頭をお下げにならないで下さい」

「……すみません」

そのやり取りを冷めた目で見ていたレイは再び口を開いた。

「まあ、今すぐにあなたをどうしようつてことはしないさ。ただ、あんたもこの子の復讐の相手だとこう」とを分かつて貰いたくてね  
「……あなたたちは悪魔よ！」

レイの言葉を聞くなり、ビーチュと呼ばれた世話係の女性が「ちらをまるで汚物でも見るかのような目で睨み付けた来た。

「カトリアお嬢様が何をしたって言うのですか！？お嬢様は産まれた時から御病気で、今まで決して幸福では無かったのですよ！？そななお嬢様にあなたたちは……」

「何もしなかつたことが悪いってこともある」

「！？何ですって！？」

「関係者なのに何もしていないから、本人は自覚無し。これが一番タチが悪いと俺は思うがな」

「……一体どういうことなのですか？」

カトリアが震えながら訊ねた。

「一体、私はその子に何をしてしまったのですか？」

「カトリアお嬢様！こんな連中の言葉をお耳に入れていけません！…」

「！」

「ビーチュ、それは違うわ。耳を塞いではいけないの。私は……私はこの子が私を憎む理由を知らなければいけない」

「カトリアお嬢様……」

レイはカトリアの言葉を聞いて、ため息を吐く。

ふと窓から外を見ると、雨が降っているのが見えた。

大降り、という程ではないもののすぐに止みそうな感じは無い。

「ん？」

入り口の方に屋敷の中へ入つて来る馬車が見えた。  
馬車にはヴァリエール公爵家の紋章が付いている。  
それは間違いない、ヴァリエール公爵家の馬車で、中にはラ・ヴァリ  
エール公爵がいる。

「行くぞ、コイ」

「…………」

コイは「ぐりと頷いてレイの後についていった。  
レイの背中へ向けてカトレアが言つた。

「何処へ……？もしや父を！？」

「…………」

レイは何も答えずにカトレアの部屋から出て行く。  
閉まる扉に向かつてカトレアは手を伸ばすが、それは何も掴むこと  
は無かつた。

ビーチェがカトレアの手をひとつ両手で包み込む。

「カトレアお嬢様…………」

「ビーチェ…………」

部屋の中に残されたカトレアとビーチェは互いに身を寄せ合ひ、窓  
から雨が降りしきる庭を見ていた。

## ラ・フォンティーヌ領にて 2（後書き）

次回、とうとうラ・ヴァリエール公爵との対峙です。

ラ・フォンティーヌ領にて 3（前書き）

いよいよラ・ヴァリエール公爵との対面です。

## ラ・フォンティーヌ領にて 3

屋敷の敷地内に入ると、ラ・ヴァリエール公爵一行は馬車を降りた。雨はまだ降り続いている、すぐに屋敷の中へと入る。

「ふー、まったく……何もこんな口に降らんでもいいだろ? まあ、天気相手に怒るのも馬鹿馬鹿しいか」

そう言つと、ラ・ヴァリエール公爵は服に付いた水滴を払つた。屋敷の中はしんと静まり返つてゐる。

普段ならば、放し飼いに動物の鳴き声やら気配がする筈である。いくら雨が降つて辺りが暗くなっているからと言つて、ここまで静かなのは何処か不気味である。

「おー、ビーチョー! おらんのかー?」

大きな声でカトレアの世話係を呼ぶ。

呼べばすぐに入るよう指示してあつたが、彼女からの返事は無い。

「……サボつてこらの? フン、馬鹿な。あいつに限つてそんなことある筈が無い」

10年以上も愛娘を見守り続け、自分の命に背いたことも無い従者である。

その仕事ぶりにはラ・ヴァリエール公爵も最大限の評価を下している。

そんな人間が今までサボったことも無いのに急にサボつたりするだろ? うか。

「やつ言えれば、ヘクトスにダイラーの姿も見えないな

庭師として潜り込ませた、カトリア護衛用のメイジ2人。警備の為に衛兵やメイジを置こうとする、カトリアはとにかく嫌がつた。

その為、こつして身分を偽らないと彼女の護衛をする者を置くことが出来なかつた。

そうやつて他にも護衛用のメイジを置こうとしたが、それもカトリアは強く拒否を示し、結局最初に置いた2人しか彼女を護衛する者はいない。

彼らは一応庭師なので、普段ならば庭で仕事をしている筈だが、外は雨が降つている。

ならば屋敷の中へ居てもおかしくない筈である。

「……この雨の中、庭の手入れをしているのか。まあ、それもいいだろ」「

彼らは自分の護衛についているヒイフラン、シイモンに負けず劣らず優秀なメイジである。

何かあつたとしても、ただの悪党に負ける。とこつことは無いだろうと思いつつ直す。

「おい、ビーチュービーチュー！」

もう一度世話係の名前を呼ぶが、やはり返事が無い。  
ラ・ヴァリエール公爵は取り敢えずカトリアの部屋まで行くことにした。

廊下を歩いていると、やはり何かいつもと違う雰囲気を感じる。

ラ・ヴァリエール公爵は思わず気を張った。

「カトーレア……？」

愛娘の名前を呼んでみる。

娘に何か起きたのではないかと思い、動悸が早くなつていいくのを感じた。

その時、エイフランがラ・ヴァリエール公爵の耳元で囁いた。

「公爵様……お氣を付け下さい。誰かいます」

エイフランがそう進言するとラ・ヴァリエール公爵は無言で頷いた。この違和感、侵入者がいると考えたら納得出来るものであった。ということは、ヘクトスとダイラーはどうなつたのだろうか。

やられた。

そう考えるのが自然であろう。

となれば、相手は相当の実力者であることが伺える。

ラ・ヴァリエール公爵は杖を抜き、身構えた。  
彼とて歴戦のメイジである。

例え相手がただ者では無くとも、それに遅れを取るようなことは無い。

神経を研ぎ澄ますし、相手の気配を伺う。

エイフランとシイモンも杖を抜いて身構えた。

辺りを沈黙が支配し、雨の音だけが僅かに聞こえる。  
稻光が辺りを照らした。

その時、バン！という扉が開く音と同時に一迅の風が通り抜けた。それは剣を構えたレイであった。

次の瞬間、シイモンの杖を構えた腕が宙を舞つた。

あまりに速すぎる太刀筋に、本人もすぐには腕を斬られたことに気が付かなかつた。

切り口から血が噴き出すまでに数秒のタイムラグが発生した。

「うわああああああ

腕から血が噴出すると同時にシイモンは悲鳴を上げる。

レイは体の向きを変えると同時にシイモンの後頭部へと蹴りを放つた。

それが綺麗に延髄に決まると、シイモンは呆気なく失神する。

「え、貴様！」

エイフランは振り返ると、レイに杖を向け、詠唱を開始する。だが、その半分も終わらない内にレイが目の前まで迫つてくると、突風をその身に受けた。

次の瞬間、杖を持つ手はエイフランの体を離れ、地面を転がる。

「ああああああーー！」

エイフランが叫ぶと同時に血がまるで炭酸水のように噴射する。レイはすかさず剣の峰をエイフランの腹部へと力任せにぶち当つた。

「「ハ」おあー？」

言葉にならない呻き声を上げると、エイフランは吐瀉物を口から垂れ流しながら、糸の切れた操り人形の如く地面に突つ伏した。

この間、僅か10数秒。

2人の人間の腕を斬り落としたにも関わらず、レイの剣には一滴の血も付着していなかつた。

エイフランヒシイモンが犠牲になつていた隙に詠唱を終えたラ・ヴァリエール公爵は杖をレイに向けた。

「ウインディ・アイシクル！」

「……………！」

しかし、ラ・ヴァリエール公爵の魔法は発動しなかつた。

呪文を唱え終えるよりも早く、レイの剣がラ・ヴァリエール公爵の杖を真つ二つに斬つっていたのである。

ラ・ヴァリエール公爵は半分になつた杖を向けながら自身の敗北を認めた。

「……貴様、何が目的だ？」

抑えたつもりではあつたが、その言葉は怒りにより震えていた。  
非公式の訪問故に護衛は最低限しか連れていない。

それでも、相手に遅れを取るようなことは無いだろうとたかをくくつていた。

だが、目の前の男はあつという間に護衛のメイジを斬り倒し、自身の杖を真つ二つにした。

とんだ屈辱である。

「……復讐」

レイはそれだけ言つと、ラ・ヴァリエール公爵の目を見据える。ラ・ヴァリエール公爵は苦虫を噛み潰したような顔をしながら再び訊ねた。

「……もう一つ聞く、貴様は平民か？」

「貴族に見えるか？」

「……だろうな。貴様みたいな卑しい顔した者が貴族な筈が無い」

そう言つと、ラ・ヴァリエール公爵は陰惨な笑みを浮かべる。

「貴様……ここから、生きて帰れると思うなよ？仮に生きて帰れたとしても、このハルケギニアに貴様が平穏無事に過ごせる場所は無いと思え！」

「と、言つど？」

「平民如きが貴族に刃を向けたのだ……貴様の顔と名は世界に轟くだろうな。罪人として！」

ラ・ヴァリエール公爵は勝ち誇ったように笑い声を上げる。すると、レイは哀れな者を見るような目で笑つて見せた。

ラ・ヴァリエール公爵が激昂する。

「貴様……何がおかしい！？」

「そりやあ笑いたくなるだろ？つまりあなたはこの世界に触れ回りたいわけか。『彼の高名なヴァリエール公爵家の当主は、たかが平民に手も足も出ませんでした』と

「何だと！？」

「俺は別に罪人にならうが構わない。かかる火の粉は払うだけだが、その間にもあんたたちの名声は地に落ち続けるだろ？がな。今まで蔑んでいた平民に敗北した貴族としてな。そんな奴がこの貴

族社会でどれだけ有意義に過ぐせるか、是非とも見てみたいものだ

「罪状などいくらでも変えられるわ！」

「つまりでっち上げるわけか。誇り高きヴァリエール公爵家が聞いて飽きれるな。『偽らす背を向けず』があんたたちの信条じやなかつたのか？」

「ぐ、ぐぬぬ……」

これが普通の貴族ならばなりふり構わなかつたであろう。

しかし、ラ・ヴァリエール公爵、そしてヴァリエール公爵家は普通の貴族ではない。

王家と深い関係があり、そして貴族の手本とならなければならない存在なのだ。

それが平民にいいようにされたなどといふことが知られれば、貴族そのものの權威が失墜しかねない。

とてもじやないが表沙汰には出来なかつた。

貴族としての矜持を何よりも重んじなければならぬイラ・ヴァリエール公爵にとつて、目の前のレイという存在はとても大きい。

「さ、貴様という奴は！くつ……！」

ラ・ヴァリエール公爵は悔しさのあまり唇を千切れんばかりに噛みしめる。

そしてレイの顔を睨み付けるが、喉の奥から搾り出したような声を出すのが精一杯であつた。

「……何が望みだ？」

「生憎だが、あんたに用事があるのは実は俺ではない。……ユイ出て来い」

レイが名前を呼ぶと、今まで隠れて様子を伺っていたユイが出て来た。

ユイの目はラ・ヴァリエール公爵へと向けられている。

ラ・ヴァリエール公爵はユイの顔を見た後、レイに訊ねた。

「……その娘は？」

「あんたが殺した母親の娘だよ」

「私が……殺した？」

「覚えていないか？一年前、あんたが呼び寄せた、元々は他人付きの水メイジのことを」

「……すまないが、呼び寄せた水メイジはここ一年でたくさんいてな……誰のことを言っているのか分からない」「ブローリン……」

ユイがボソッと告げる。

その名前を聞いてラ・ヴァリエール公爵は目を見開いた。

「おお……。その名は覚えてある。カトレアが急な発作で生死の境をさまよっていた時に救つてくれた男だ。忘れよう筈もない」

「そのブローリンという男はこの子の母親付きの水メイジだった。そしてこの子の母親もまた急な発作で床に伏せていた。頼りの水メイジがないままにな」

その言葉でラ・ヴァリエール公爵は悟った。

自分が娘可愛さに起こした行動が、目の前の少女に何をもたらしてしまったのかを。

「そう……か。そうこうことだったのか」

「……………！」

コイは知らず知らずの内に目から涙を流していた。

唇をきつく結び、嗚咽が出来るのを防ぎながら公爵を睨み付ける。

ラ・ヴァリエール公爵は負い目もあり、目の前の小さな少女から思わず目を逸らしてしまった。

ユイはゆっくりとラ・ヴァリエール公爵の元へ近付いて行く。

そして目の前まで来ると、ラ・ヴァリエール公爵の顔を再び睨み付けた。

まるでこれからどうやって殺してやるかと算段しているかのように。

ラ・ヴァリエール公爵は観念したかのように目を開じた。

「話は聞かせて頂きました」

その時、何処か弱々しくも凛とした声が聞こえて来た。

声のした方を振り向くと、そこにはカトレアが立っている。

「カトレア……」

「お父様……」

ラ・ヴァリエール公爵が娘の名を呼ぶと、カトレアはそれに答える。カトレアは何とも言えぬ沈痛な面持ちで言った。

「……私があの時死んでいれば。いいえ、もつと早くに死んでいれば、こんな悲劇は起こらなかつたのですね」

「何を言つのだカトレア！」

ラ・ヴァリエール公爵は愛娘の言葉にまるで悲鳴のような声を上げた。

それは親として当然の感情であった。

カトレアはラ・ヴァリエール公爵の言葉に目を閉じて首を振る。

そして、コイの方へと顔を向けた。

「コイ……と言いましたね？貴女が復讐すべき相手はお父様ではあります。……この私は？」

「カトレア！？」

ラ・ヴァリエール公爵の言葉は最早カトレアの耳には届いていなかつた。

コイはこれでもかと言つほどカトレアをきつく睨み付ける。そして、真一文字に結んだ口を開いた。

「あなたさえ……あなたさえいなければ！……」

血を吐くように叫ぶコイの顔を見て、カトレアはただ頷いた。

「……そうです。私さえいなければ貴女のお母様は死ななくて良かつたのです。……だから、貴女の手で私を殺して下さい」

そう言つと、カトレアは全てを投げ出すかのように手を広げた。まるで、母親が子供を抱き寄せるかのよつ。

「…………うわあああああ！」

コイは獣のように叫び声を上げると、その小さな体でカトレアに飛び掛かった。

そして、その細い首を小さな手で力一杯絞め付ける。

「…………！」

「うつ…………！」

その様子を見て、ラ・ヴァリエール公爵は慌てて飛び出す。

「カトレアー！」

「…………！」

しかし、それよりも早くレイがラ・ヴァリエール公爵の首に剣をあてがい、動きを止めた。

ラ・ヴァリエール公爵は憎悪に満ちた目でレイを睨み付ける。

「貴様あああ！？その剣をどかせ……どかせえ！……どかしてくれ、頼む！……」

「…………」

レイは無言のまま何も答えなかつた。

ラ・ヴァリエール公爵は全ての力を失つたかのようにその場に崩れ落ちた。

カトレアは一切抵抗せず、顔からは見る見る内に生氣の色が失われて行つている。

その憐い命は、今、ラ・ヴァリエール公爵の目の前で失われようとしていた。

「…………ひくつ、ひくつ」

突如、泣き声が聞こえて来る。

見ると、ユイが大粒の涙をボロボロと零していた。

ユイはカトレアの首を絞めていた手の力を緩めていった。カトレアの顔に赤みが差し込んでくる。

「ツー！ホツー！ホツー！」

カトリアは咳き込んだ。

そして、2度3度深呼吸をすると、ぽつりと言った。

「何故……殺してくれなかつたのですか？」

そう言つと、カトリアの田から自然と涙が零れ落ちていた。コイは声も上げずに泣きじゃくる。

外では、相変わらず雨が降り続いていた。

まるで世界が泣いているかのよつて。

「死にたがつてる奴を殺しても、それを復讐とは言わない。その女の自殺に、コイが手を貸す必要は無い」

何時の間にかコイの側にレイが来ていた。

レイはコイの顔を見つめた。

コイもまた見つめ返す。

レイはコイの頭をわしわしと撫でると、再び口を開いた。

「どうせや、あんたたちは殺す価値も無いそつだ

レイがやつ言つと、コイはレイの腰へと抱きつき、そのまま顔を埋めた。

レイはコイの背中を優しく叩きながら、ラ・ヴァリエール公爵の方へと向き直った。

「……ラ・ヴァリエール公爵。あんたに頼みがある

「……頼み？ハハ、頼みと来たか、この下郎が！」

床に手をついたままラ・ヴァリエール公爵は言った。

「あなたは」の子の為に何かをしてやる義務があるんじゃないかな?」

「…………!! 一体何が望みだ?」

「何だと!?

その申し出は、セミリーハーリーとガトレーは頭を丸くする

「ユイには家も何も無い。また路頭を彷徨うだけだ。こいつをこんな風にしたのはあんたたちだろ？」

卷之三

ラ・ヴァリエール公爵は押し黙つてしまつた。

「どうする？この血分を殺しに来るかも分からぬよつた、そんな子をあんたのすぐ側に付ける気はあるか？」

それが和の罪は文の罪に歸るにあらず

カトリアは迷わず即答した。

「罪？罰？……貴族という奴は相変わらず言葉を着飾るのがお好きなことで。これはあんたたちが昔やつたことに対する尻拭いだ。それ以上でもそれ以下でも無い」

レイはやつぱりヒ、剣を鞘の中に仕舞う。  
ふとコイの方を見ると、ようやくコイは泣き止んで袖で涙を擦つて  
いる。

レイはゴイの皿をじっと見ながら訊ねる。

「……お前はどうだ？」

「…………」

「お前のことはお前が決める。俺はお前の決定を尊重する。自分の母親を奪った相手に世話になるのが嫌ならそれでもいい」

ゴイはレイの皿をじっと見つめていた。

そして、覚悟を決めたといつぱりに頷く。

「……………」

「それは肯定と受け取つていいか？」

「うん！」

「やうか……」

レイはゴイの頭を再び撫でた後にラ・ヴァリエール公爵へ向けて言った。

「当人同士は問題無いようだが、あんたの腹は決まつたか？」

「ぐぬぬぬぬ……」

ラ・ヴァリエール公爵は歯を食い縛りながら唸つていたが、やがて大きなため息を吐いた。

「致し方あるまい。カトレアがいいと言つたのだ。ならば私から言うことは何も無い。ただ……」

ラ・ヴァリエール公爵はカトレアの方へ向き直つた。

「やはり、そのゴイとかいうのとお前を2人きりにはさせたくない。

すまんがカトリアにはそろそろヴァリエールの屋敷へ戻つてもうつ  
ことになるが……」

「……分かりましたお父様。」の親不孝な娘カトリアは「」ラ・  
フォンティーヌからヴァリエールの屋敷へと戻らさせて頂きます

そう言つと、カトリアは深々と頭を下げる。

レイはそれを見ると、こくりと頷いた。

そして、倒れている2人のメイジをチラツと見て、ラ・ヴァリエール公爵に言つた。

「生憎と俺は殺人狂では無いんでね、こいつらと外にいた2人は殺  
していない。水メイジに診せればすぐに怪我も回復するだろうから、  
その代金くらいは持つてやるんだな」

ラ・ヴァリエール公爵はレイのその言葉に激昂した。

「言われなくとも……」

「それは良かつた。俺は無意味な殺生は好まないんでな」

感情を込めずにレイは言つた。

ふと、外を見てみると雨足が弱くなつていた。  
この分なら、すぐに雨も止むだろ。

そうすれば、濡れずにここを出ることが出来そうだ。  
と、レイは思った。

こうして、ラ・ヴァリエール公爵への復讐劇は幕を閉じたのであつ  
た。

## ラ・フォンティーヌ領にて 3（後書き）

次回でラ・ヴァリエール公爵編の完結です。

ご都合主義全開の強引な展開ですみません（汗）

## 荷馬車の上で（前書き）

ラ・ヴァリエール公爵への復讐編、いよいよ完結です。

## 荷馬車の上で

「……旦那あ、旦那はどうちらから来たん？」

荷馬車を運転している野暮つた男が何となく訊ねると、堆く積まれた藁から声が返つて来る。

「……さあな。強いて言つならば風の吹く方から、かな？」

「へえ、旦那は見た目は凄腕の傭兵みたいなのに、随分とまあ詩人みたいなことを言つんですねえ」

そう言つと、男は欠伸をしながら荷馬車の運転へと戻つた。

もそつと藁の上で何かが動く。

それは寝返りを打つたレイであった。

あの後、ユイと別れたレイは道を走る荷馬車に乗つけてもらつていたのであった。

レイは藁の上に寝転びながらラ・ヴァリエール公爵の元へ置いてきた幼い少女のことと思い出していた。

「レイ……」

その場から去るひとするレイの背中へ向けてユイが言った。  
レイは振り返る。

「どうした？」

「……あのね、私、本当はレイと一緒に旅をしたかったの

コイは誰にも聞こえないよつ、レイにだけ伝えるよつと言つた。

「レイと一緒に色々な国を廻つて、色々な人と出逢つて、色々なことを経験したかったの。でも……」

「でも？」

「でも、私はきっと途中でレイの足を引っ張つたりやつ。私はレイの足手纏いにはなりたくない」

コイは悲しそうな、でも少し悔しそうな、そんな何とも言えないような表情をしていた。

レイは肩をすくめる。

「そんな今生の別れみたいな顔をするな。お前ともまた逢えるや生きていればいつかは、な」

そう言つと、レイはコイの頭をわしゃわしゃと撫でた。コイは「うふー」と頷くと、精一杯の笑顔になつて言つた。

「さよならレイ！……私の好きな人！」

「旦那あーもうすぐラ・フォンティーヌ領から出ますぜ！」

気が付くと、荷馬車は既にラ・フォンティーヌ領内から出ようとしていた。

レイは次の目的地を何処にしようかと思案していた。

「……次はゲルマニアにでも行って見るかな」

帝政ゲルマニア。

ここハルケギニアにおいて、一風変わった社会風習を持つている国で、例えば平民でも金さえあれば貴族の地位を手に入れられることが可能であるなど他国とは一線を画している。

レイはこの国が嫌いでは無かつた。

この国には挑戦する自由がある。

生まれ、育ち、そんな下らない縛りから平民を解放してくれる。

「……いい風だ。さつきまで雨が降っていたとは思えないな」

レイは口を閉じて風を感じていた。

もう少し時間が経てば日が沈み、夜が訪れる。

それまでに何処か小さな村にでも着けばいい。

そう思いレイはそのまま寝入ってしまった。

まどろみの中、レイの頭の中にはユイが別れ際に見せた笑顔が浮かんでいた。

さて、その後のこととを少しだけ語る。

ヴァリエール公爵家にて、カトレア付きの侍女となつたユイは、その眞面目な働きぶりからカリーヌ夫人に見込まれて色々と指導をさ

れでいるそうだ。

出会いの印象から最初は不穏な関係だったビーチェとも今は打ち解けて、2人でカトレアの世話をしている。

その世話っぷりは、カトレアを大事に思つて三女のルイズが自分よりもカトレアと一緒にいる時間の長いユイに軽い嫉妬心を覚えるくらいであつた。

カトレア自身もあれだけのことをされたユイをぞんざいに扱うことはせず、ユイもまたカトレアを付きつ切りで面倒を見ていて、傍から見れば共に良好な関係を築いているように見えた。

こうして、ユイは晴れてヴァリエール公爵家の従者の一員として迎え入れられたのであつた。

ただ1人、ラ・ヴァリエール公爵だけはあまりユイのことを好いてはいなかつたが、カリーヌ夫人には色々と逆らえないらしく、それを表に出すことはなかつた。

ユイは今もカトレアを、そしてラ・ヴァリエール公爵を憎んでいるのか。

殺してやりたいと思つてゐるのか。

それは当人にしか分からぬ。

一つだけ付け加えるならば、ここ最近のユイは笑顔を見せることが多くなつたということである。

## 荷馬車の上で（後書き）

といった感じで序章終了といった感じです。

この先、色々な話を考えていますが、少しだけ注意事項を。  
それは時系列です。

今後、いつこいつた感じで1HPソードずつ書いて行きますが、  
その時系列はバラバラにしていく予定です。  
つまり、次に書く話がゲルマニア編とは限らないことになります。

今、どのHPソードを書くか思案中です。  
どんな内容かは次回のお楽しみ。  
ではまた ノシ

## リュティスにて（前書き）

お待たせしました。  
新章です。

## リュティスにて

幸福はその訪れを誰も前もって知ることが出来ない。不幸もまた同じである。

そしてそれは人の出会いもまた同じ……。

「どうしてくれるんだ？ ああ？」

ガリア王国の王都リュティスにある、とあるレストラン。

貴族御用達のそこそこ高級な店である。

そこで豪華な装飾の服を着飾った、貴族と思わしき中年の男がレイに向かってがなり立てていた。

恰幅が良い、というよりは肥満と言つた方が正しいと思われる体型を揺らしている。

レイはただ無言で突つ立っていた。

「見てみろ」これを！

太った貴族の男が指差した部分には、ステーキ用のソースらしきものが付着していた。

その部分をレイに見せつけると、嫌みたつぱりに言つた。

「この服は貴様のような平民風情が一生掛かつて働いても手に入らぬ特注品なのだぞ？ わあ、どうしてくれる？」

レイはハアと軽くため息を吐くと、太った貴族の男に言った。

「百歩譲つて俺が悪いとしよう。で、何が望みなんだ？」

「ああん？ それが貴族様に対する口の聞き方か？」

太った貴族の男は近くにあった水の入ったコップを取ると、それをレイの頭上で傾けた。

零れた水がレイの頭から体へと滴つていく。

「いい格好だな？ 平民」

太った貴族の男は下品な笑い声を上げた。

一方、レイは特に動搖することもなく、冷めた目で目の前の男を見つめていた。

その態度に太った貴族の男は激昂する。

「貴様あ！ 何だその目は！」

そう言つて懷から杖を取り出した。

杖の先をレイに向けている。

「……生意気な平民め。今すぐに土下座して謝つて見せろ。そして、奴隸としてその一生を私に捧げて見せろ！ そうすれば貴様の今までの行い、許してやらんことも無いぞ？ ん？」

「…………断る」

「何イ？ 聞こえんなあ？」

「断る、と言つた」

「何だとオー？」

「人に仕える氣なんぞ無いし、仮に仕えるとしても相手くらいい選ぶ。お前のような下衆な奴などこちらからお断りだ」

「貴様ア、平民如きがよくもまあそんな口を利けたものだ。……最早、弁解の余地も無いな。……なら、死ねえ！！」

太った貴族の男はそう言つなり詠唱を開始する。  
レイも素早く剣の柄に手を掛けた。

その時、パチパチと手の平を打つ音が聞こえた。

2人は音の方へ振り向く。

そこには、同じように貴族の格好をした垂れ目の男がニヤニヤと笑いながら拍手をしていた。

「何だ！？何者だ貴様！？」

太った貴族の男は怒号混じりに声を上げた。  
すると拍手していた男が「ククク……」と低く笑う。

「平民如きにムキになるとは、伯爵殿も随分と焼きがお回りのよう

で……」

「……貴様は……」

「我々貴族は、常に寛容な精神で愚かな平民を生温かく見守つてい  
ればいいのです。平民の言葉や態度をいちいち気にするのは、貴族  
としては些か度量が狭いのではないですかな？」

「くっ！」

太った貴族の男は、杖を仕舞うとレイをひと睨みしてから店を出て行つてしまつた。

レイはそれを見届けると、柄から手を離した。

そして、店員らしき男にいくらかの金を渡すと、すぐに店を出て行つた。

すると、先程こちらに話しかけてきた男が後をついてきた。

男は店を出るなり口を開いた。

「ククク……あのケツの穴の小さい能無しめ。奴は自分が命拾いしたことも気が付いておらぬのだろうな」

「…………」

レイは男の言葉を無視してどんどん歩く。だが、男も話を中断することなく、レイの後を歩きながら喋りていた。

「全く、これだから名前だけの連中は……能無しのくせに態度だけは一人前を気取りやがる」

「…………」

「お前……あの能無しを殺そつとしていただろ? そして、奴は確實に殺られていた。奴が魔法を唱え終える前にお前の剣は確実に振られ、その首を地面に落としていたであろうからな。ククク……俺が割つて入らなければな」

「……こんな白昼の街中でそんなことするわけが無いだろ。杖ぐらいは叩き斬つてやるうと思つたがな」

思わずレイは言葉を返してしまった。

男は大げさに驚いて見せた。

「こやいや、凄まじいな。お前、ただの傭兵では無いだろ? もしかして噂でしか聞いたことのないあの“メイジ殺し”って奴か?」

男はまるで立て板に水の如く喋りを止めない。悪意はあっても、敵意は無いように思える。

レイは男に向かつて一言だけ言った。

「よく喋るな」

男は再び「ククク……」と笑った。

「喋るのが好きなんだよ。お前の気に障つたとしても止めんよ?」「好きにすればいい。……ところでいつまでついて来るんだ?」

レイが訊ねると、男は首を振った。

「お喋りってのは聞く相手がいて成り立つものでねえ。聞き手のいないお喋りはただの独り言だ。俺はお喋りがしたいんだがねえ?」「俺はしたくないわけだが」

「なら聞くだけでもいい。……貴族がここまで譲歩してやっているのだから平民としては断る理由は無いよなあ?」

「……あんたが何か言つて来ても俺は何も返さんぞ?」

「いいねえ! その平民とは思えぬ不遜な態度と物言い……。お前は俺が見込んだ通りの人間だ」

レイはやれやれと肩をすくめた。

「勝手に見込まれてもな」

「ククク……何も返さないのでは無かったのか?」

「皮肉の一つでも言わないと精神衛生上に良くないと気が付いたんでな」

「やはり面白いな、お前は。……お前の名は何だ?」

「貴族様に覚えていたくような名前などございませんが?」

レイはわざと丁寧に答えた。

男はニヤニヤと笑つてゐる。

「構わぬ、答えよ平民。俺がそんな小さいことを気にするような…

…さつきの能無しと同じ人間だと思うか?」

「ああ、確かにあんたとさつきの男は違うな。あんたの方が面倒臭い」

「なら分かるだろ?これ以上面倒臭くなりたいか?」

「……レイ」

レイは心底面倒臭そうに言った。

男は満足そうに含み笑う。

「そうか、レイか。ククク……」

「もういいか?」

「まあ、急くな。俺の名前も聞いていけ。貴族の口から直接名前を聞かせて貰うのだぞ?光栄だとは思わんか?」

「生憎と俺には貴族を敬うような殊勝な心掛けは無くてな」

「いかんなあ。それではこの貴族社会であるハルケギニアで生きては行けんぞ?」

「何とか生きていけてますので。わざわざ貴族様に心配して頂くようなことはございませんが」

レイは慇懃無礼に答える。

しかし、男は全く気にする素振りを見せなかつた。

「ククク……。俺の名はパークーだ。本名はもつと長いが、それで呼ばれることはあまり好かん。パークーでいいぞ」

「そうか」

「これはまた薄いリアクションだ。いいねえーお前は俺の期待を裏切らない!実際に素晴らしい」

「……勝手に期待するな」

「お前とはこんな道端なんかでは無く、じつへつと話したい…。  
…。どうだ？ウチへ来ないか？」

「…………」

「……おっど、断るうとしているな？表情で分かるぞ。大方、その為の皮肉でも考えていたのだう？残念だが、無理にでも来て貰うよ」

「…………」

「ん～？俺を殺しても誘いを断るつもりだったりするか？だが見ろ、俺はお前に杖を向けてはいない。丸腰だ。お前は攻撃の意思もない者を自分の都合だけで消すような、そんな男なのか？血に飢えた殺人狂なのか？」

「……俺は殺人狂では無いし、そもそもあんたを殺すつもりも無い。半殺しくらいにならしてやつてもいいかと一瞬頭の中をよぎったがな」

「せうかそうか。それは是非ともしてもらいたいものだな。その御礼はたつぱりとさせてもううが」

「…………」

「なら、来るだう？お前が俺の見込んだ通りの男なら来るよなあ？」

レイは観念した。

「……分かつた。行く。行かせて貰う。だからこれ以上ベタベタするの止めろ」

「そうかそうか。いや、やはりお前は俺の見込んだ通りの男だ！ちゃんと物事の是非が判断出来る……実に素晴らしい…」

「お前、友達いないだろ？」

「いるが。たつた今出来た。そつ、田の前にな」

「…………」

レイは馬に聞こえたことないに舌打ちをした。

## リュティスにて（後書き）

新章はガリア王国編です。  
時系列的には、前章の前です。

そして、新キャラのパーカー。

貴族で変わり者、年齢的には30代後半といった感じのキャラです。  
凄く好き嫌いが分かれそうなキャラです。

この章にも原作キャラを出す予定ですのでお楽しみに。

## パークーの別荘にて（前書き）

ガリアの情勢について、微妙に知識が足りないです。  
原作読み直そうかなあ？

## パークーの別荘にて

レイが連れて来られたのは、王都リュティスから少し離れたところにある屋敷であった。

「ここは別荘でなあ。最近はここにいる」との方が多い

パークーはそう言ってレイを案内する。

屋敷の中に入ると、メイド服の少女が2人を出迎えた。

「お帰りなさいませ、パークー伯爵」

「ああ」

パークーはそう言つなり、いきなり少女の胸を掴んだ。

少女は突然の行為に「キヤッ」と悲鳴を上げる。

それを見てパークーは舌打ちした。

「つまらん。そんな当たり前なリアクションされても俺は満足せんぞ」

「も、申し訳ございません！」

胸を掴まれ、更に叱責まで受けたが、少女は逆らうことなく頭を下げる。

パークーはその様子を心底つまらなさそうに見ながら屋敷の中へ入つて行つた。

レイもその後に続く。

パークーは屋敷の中を進みながら振り返らずに言った。

「好きでもない男に胸を掴まれたのだ。もつと抵抗しても良いと思

わんか？殴りかかってきても良い。『ハニ虫を見るよつな目で蔑むのも良い。でもあの平民のメイドは諦めおつた。自分は意地汚い平民だから貴族に胸くらい触られても当たり前なんだとな。実につまらん！実に愚かな平民らしき負け犬根性だと思わんか？』

「…………」

「その点、お前は違う。お前は平民でありながら平民らしからぬ物言い」と態度。それはその強さと自信がそつをせているのか？』

「…………かもな」

「そう、それだ！その隠そうともしない、俺を心底面倒臭いといふ不遜な態度！いい！実際にいいなあ！面白いぞ、お前は…」

「そう思つなら少しば黙つていて欲しいんだが」

「とにかくお前、あの店で何があつたんだ？」

パークーは突然話を変えてきた。

「あんな能無しでも一応伯爵なんていう、とても分不相應な位が与えられてる。何でそんな奴と言い合いなんかしたんだ？んん？」

「……別にあんたが考える程面白い話じゃない。たまたま臨時収入が入つたので、たまには奮発しようとイイ匂いの店に入つたら、席に着く前にあの貴族殿と肩をぶつけてしまつただけだ。正確には向こうからぶつかつて來たんだがな」

「ほほう……。それであんな命知らずな真似をしたのか……。ククク……普通の平民なら自殺ものだぞ？」

「生憎と自分で命を捨てる趣味は無いものでな」

「ククク……それはいい心掛けだ。と、言つてはいる間に着いたな。ほら、ここが俺の私室だ」

パークーは屋敷の中の一一番奥の部屋の前で立ち止ると、扉を開けてレイを招いた。

「遠慮無く入れ！それとも、お前なら俺が言わずとも遠慮などしないか？」

「そもそも俺はあんたの家に行くつもりも無かつたし、当然あんたの部屋にも入ることは無かつたわけだが」

「いいなあ。お前は常に俺の一歩先を行く！それでこそ、だ」

パークーが「ククク……」と笑いながら部屋の中に入り、「すると、何かがパークーの肩に飛び乗ってきた。よく見ると、それは1匹のカメレオンであった。

「おお、よしよし」

パークーはカメレオンの首元を指で撫でる。

すると、気持ち良さそうにカメレオンが身を震わせた。

パークーは振り向くと、レイにそのカメレオンを見せる。

「ククク……」こいつはアイヴァンと言つてなあ。俺の使い魔だ。こう見えても俺は風のトライアングルメイジでね

「どうか。聞きもしないのにわざわざ答えてくれて有難う」

レイはわざとらしく頭を下げた。

パークーはアイヴァンを肩に乗せたまま部屋の中に入つて行く。レイも次々部屋の中へと入つて行つた。

部屋の中は貴族らしい豪奢な造りであった。

それなりに高級そうな置物や絵などが飾られている。

その中に小さい積み木のようなものが幾重にも重ねられている置物があつた。

それを横目で見ながらパークーが口を開いた。

「お前は最近貴族で流行つているゲームを知つているか？」

「……逆に聞くが、平民の俺が貴族様の娯楽なんぞ知つていると思うか？」

「ククク……確かにあ」

そう言つてニヤつきながらパークーはその置物を指差した。

「あれがそのゲームだよ。積み木を一本ずつ抜いていき、上に乗せる。実にシンプルなゲームだ。いかに崩さないようには高く積み上げて行くかを競うのだ。これが実際に面白くてなあ。その気になれば一日くらい簡単に潰せるぞ」

「そんなので時間を潰さなきやならんとは、貴族も相当忙しいんだな」

「ククク……その通り、忙しくて忙しくてたまらんのだよ」

パークーはレイの皮肉を軽く受け流した。

そして、重ねられた積み木から一本抜き取ると、それを積み木の上に乗せてみせた。

「……このゲームはな、こうして高く積み上げて行くのも楽しいが、更に楽しいのは何だか分かるか？」

「さあな。貴族の高尚なお遊びとやらは平民である俺には理解出来ないみたいだ」

「ククク……なら教えてやるつ。高く積み上がつたタワー。それを崩すのが実際に楽しいのだよ。特に他人が積み上げてきたものなら尚更、な」

そう言つて、パークーは重ねられた積み木を崩すと笑いながらグラスを2つ手に取つた、

そして、近くに飾られていた高級そうな酒を持ち出して、部屋の中

にあるソファに腰掛ける。

「ほり、座れ。……お前は酒を飲むか？」

「まあ、嫌いではないな」

「そうかそうか」

レイがソファに腰掛けるのを確認すると、パークーは高級そうな酒の蓋を開けた。

そして、それを躊躇なくグラス一杯に注ぐ。

琥珀色の液体がグラスの縁ギリギリに揺れた。

「素敵な出会いに乾杯」

「…………乾杯」

面倒臭そうにレイがそう言つのを聞くと、ニヤリと笑いながらパークーは酒を一気に呷つた。

レイもグラスに口を付ける。

芳醇な香りと口クが口の中に広がり、鼻に抜けていく。

かなりアルコール度数が強いみたいだ。

「ブハア！……やつぱり酒とはチビチビやるものでは無いなー…どうだ？美味いか？特注品でな、平民はおろか貴族ですら口にするこ<sup>ト</sup>なんぞ不可能に近い酒だぞ？」

「……確かに美味しい。が、悪酔いしそうな酒だ。……俺には酒場の安酒の方が合っている」

「そうかそうか！」

パークーはあれだけ一気に呷つたのに、顔色1つ変えずに言った。

どうやらかなり酒に強いらしい。

レイは再びグラスに口を付ける。

レイも弱くは無いつもりだが、流石にこの酒を一気に呑る飯にはなれない。

暫しの沈黙。

アイヴァンがパークーの頭の上へ移動する。  
このお喋りにも酒の余韻を楽しむくらいの風情はあったのかとレイ  
が思つてゐると、パークーは再び口を開いた。

「……なあ、この世は実につまらんと思わんか？」

「……いきなり何だ？」

「何10年も無駄に生きてると、人生にはパターンがあることに気  
付く……。大概是そのパターンから外れることはない。この俺とて、  
な」

「それに気付いた後は最悪だ。お決まりの毎日の始まりだよ。寝て、  
起きて、食つて、また寝る。日々はずつとこれの繰り返しだ」

「……まあ、大抵の奴はそうだろうな」

「それは人との出会いも同じだ。人は誰一人同じ者などいない。そ  
れぞれ違う者である。なんて、どこぞの教団の連中が声高にほざい  
てたが、そんなのは嘘だ。会う人間、会う人間が皆同じような奴ば  
かりだった。平民も貴族も」

「……」

「ただ1人、こいつだけは違うと思ったのは現国王、ジョゼフ1世  
だけだな。あの男はこの俺が認める数少ない人間の1人だ。ククク  
……、何故俺が王のことを知つてゐるか不思議でたまらないって顔  
してゐるぞ？」

「別にしていい」

「ちょっとしたコネがあつてね……。「ぐくたまに謁見することがあ  
るんだよ。滅多にあることじゃないがね」

「そうか。それは良かつたな」

「世間ではあの男を無能王と呼んでいるそうだな? ガリアの国民で

さえ、そう思つてゐる奴は少くない。ククク……つづづく救えんよ。物事の本質を捉えられる者の何と少ないことか……とまあ、自國の王を持ち上げるのはここまでにしようか

パークーはグラスに再び酒を注ぐと、また一気に呷った。

「ジョゼフ一世はまさに積み木を高く高く積み上げているのぞ。俺はなあ、それを崩してみたいんだよ。無能王よりも先に、な。その為にはお前がいるんだよ」

「話が見えんが？」

「ククク……すぐに分かる」

その時、扉をノックする音が聞こえて來た。

パークーが「よい」とだけ告げると、扉が開いた。

そこには先程パークーに胸を掴まれたメイドが立っていた。

「パークー伯爵。そろそろお時間です」

メイドは無感情にそう言った。

心なしか、仕草が胸の部分を庇つてゐるよつに見える。

パークーは残念そうにレイの顔を見る。

「そうか……もうそんな時間か。いや、楽しい時間とはあつという間だなあ」

「……なら、俺はもう帰るぞ」

「ところがそうはいかんのだよ」

「……次は何だ？」

「おおう？ 抵抗しないで諦めるのか？ お前らしくも無い」

「どうせ抵抗したところでまた面倒臭くなるだけだ……それとも抵抗してやろうか？」

レイは剣の柄に手をやるフリをした。

それを見て、パークーはわざとらしく脅えてみせる。

「おお、風のトライアングルメイジである私だが、お前に敵う気がせぬぞ！中々酷なことを言つてくれるなあ、お前は」

「……………ようやく酒でも回り始めたか」

「ハハハハ、私は酔わないタチでなあ。今まで酒に負けたことは一度たりとも無いのだよ」

「……………用件を早く言え」

「ククク……喜べ、王に謁見出来るぞ」

レイは思わず自分の耳を疑つた。

「……………ハア？」

レイのその顔を見て、パークーは満足そうに笑つた。

「実はこれからガリア王国、ジョゼフ一世と謁見するんだよ。大した用事では無いので面倒臭いと思つていたんだ……お前と出会つまではな」

キラキラした瞳でパークーはレイを見つめた。  
レイはそんなパークーに思わず引いてしまった。

「……………何だ？俺に何を期待している？まさか俺に国王を殺せとでも言つのか？」

「おお！殺してくれるのか！？」

「……………ふざけるな」

「ククク……何もそんな何かして欲しいわけじゃない。ただ、お前

とジョゼフー世。この2人を会わせたらどうなるか。俺はそれが見たいんだよ」

パークーはそう言つと、アイヴァンを頭の上から腕に乗せる。

「ククク……実に素晴らしいことか。俺はお前と出会えた今日というこの日を最高の幸福だと思つだ」

「俺はあんたと出会ってしまった今日という日を最悪の不幸だと思うがね」

そう言つた2人の顔はとても対照的であつた。

## パークーの別荘にて（後書き）

急展開に次ぐ急展開。

ということで、次回はジョゼフ王との謁見です。

ちなみに作中に出て来た積み木のゲームは要するにジョンガの「」と  
です。

## ガリア城にて 1（前書き）

今回、原作キャラが出ます。

## ガリア城にて 1

ガリア城前。

衛兵たちと何やら話しているパークーをレイは非常に面倒臭いと思  
いながら見ていた。

(俺は何か悪い夢でも見ているんじゃないか?)

レイは思わず一人ごちる。

しかし、現実として目の前にはハルケギニア最大の国家の象徴であ  
り中心でもあるガリア城とそこへ自分を連れて来た、いけ好かない  
貴族の男がいる。

レイはここへ来るまでの道中、何度も吐いたか分からぬため息を改  
めて吐いた。

パークーの誘い自体は、無理にでも断ることも出来た。

それだけの力も意志もレイにはあり、それを抑えるだけの物理的な  
力をパークーは持ち得ていなかつたのだから。

だが、実際に断れば、あの粘着質な男が何をして来るか分らない。

少なくとも今以上に面倒臭くなることは間違ひ無い。

同じ面倒なことならば、一度従つてからスッキリ別れた方がいい。  
そう思つて割り切つてはいたが、流石にこれは事が大き過ぎる。

王への謁見。

それも相手はハルケギニア最大の国家、ガリア王国の王ジョゼフ  
一世である。

色々と脛に傷を持つレイとしては、王家のの人間なんてのは一番関わ  
り合いたくない人間である。

最悪、その場で処刑されかねない。

それだけのことを過去にしてきたといつも自覚はレイにもある。

「……まったく、いつも思つが、ijiの衛兵は要領が悪い。掛からないでいい時間を掛けてる時点で俺が王ならクビにしてやつてるがな」

衛兵に文句を言いながらパークーが戻つて来た。  
レイは相変わらず無言である。

ジョゼフー世とレイが出会う瞬間を見たい。

そうパークーに言われてから、レイは彼と一言も口を利いてはいけなかつた。

ちなみに、レイの素性としてはパークーが雇つた護衛の為の私兵といふことになつてゐる。

パークーはニヤニヤと笑いながら言つた。

「どうした? 王への謁見がそんなに嬉しいか? 何、緊張することはない。楽にしろ」

「…………」

これが王に謁見出来て嬉しくて緊張しているように見えるか。  
と、レイは田で訴えた。

パークーはウンウンと頷く。

「そうかそうか。何、ジョゼフー世……おっと、こんな王の御前では誰に聞かれている分からんな。……ジョゼフ王は気さくな男であらせられる故、そんなに構えんで大丈夫だ。お前が平民だろうが、ジョゼフ王は御自分が認められた者には誠意で話される。お前なら

問題なかろ？」

「……………」

これ以上、この男に言葉や感情での解決を求めても無駄だと悟ったレイは何も言わずに目を閉じた。

暴力的な解決をしたところで、状況はより悪化するだけである。殺せば殺したで後始末が面倒だし、そうしなければこの、貴族に対しての誇りも矜持も持たない変人は平氣で自分の恥を世間に公表するだろ？

そうなればレイは全世界のお尋ね者である。

最悪それでも別にいいやと思つてはいるが、自由を何よりも愛するレイはなるべくならばそつならないよつにしたかった。

王への謁見は確かにしたくはないことではあるが、自身の自由を秤に掛けようつなことをしてまで避けるべきことではない。

「……………フウ」

仕方がないとレイは一応、腹を括つた。

そうしてから改めてパークーという男を見据えると、つぐづぐこの男の強かさに舌を巻く。

恐らく、ここまで計算してからあの時自分へと接触してきたのであらう。

わざとらしく拍手して、人の目を引いてから声を掛けってきた辺り、抜け目ない。

秘密裏に自分が消されないような仕掛けを隨所に盛り込んで来ている。

仮にそれらが無かつたとしても、レイはそんな野蛮な手を易々と選びはしなかつただろうが、それでも打てるべき手は全て打つておく。

目の前の男は一見飄々とした変人貴族であるが、その実見えない牙

を何本も隠し持つ狡猾な獣であった。

「ほれ、ついて來い。この城には何度か入ってるからな。僭越ながら、友人の家に行くみたいだ」

パークーはそう言って城の中へと歩き始めた。レイは無言でその後をついて行く。

(友人の家……か。フン、ビの口が言つのか)

レイは心の中で毒づいた。

(この男は友人がいないんじゃない。友人を作らないんだ)

自分以外は誰も信用しない。

それがパークーという男の生き方なのだとレイは感じた。

広々とした城内をパークーについて行きながら、レイは改めて王宮というものを感じていた。

城内は豪奢でありながら、貴族とはまた違った氣品と風格を見るものに感じさせる造りであった。

それでいて、辺りに張り詰める緊張感は、やはりその他の貴族たちの屋敷とは一線を画している。

(……まあ、俺もそんなに貴族というものを知っているわけじゃないがな)

レイは誰にも気付かれないようにフツと笑った。

しかし、そんな城内を歩いていても、いわゆるロイヤリティやセレ

ブリティといったものは感じなかつた。

どちらかと言えば、レイが慣れ親しむ戦場に近い空気を感じていた。

それは全ての城がそうなのだろうか。

それとも、このガリア城が特別なのか。

「…………」

やがて、謁見の間の前まで来ると、レイとパークーは門の前にいる男たちからボディチェックを受けた。

レイは剣やナイフ、パークーは杖をそれぞれ取り上げられる。

そして、何か他に武器になるようなものが無いことを確認すると、男たちは頷き合つた。

「入れ！」

まるで家畜に言つかのように男たちが2人へ言つと、扉が重々しく開かれた。

開かれた扉の向こう、遙か遠くにその男は鎮座していた。

レイは睡をぐくつと飲み込むと、思わず口を開いてしまつた。

「あれがガリア国王……」

「そう、ガリア国王ジョゼフ一世にあらせられ~る」

パークーはさつきまでニヤニヤしていたのが嘘のように精悍な顔つきになると、瞬時に膝をつき、頭を下げてから厳かにそう言つた。その口振りから普段の軽口はなりを潛めている。

レイもその一連の所作を真似た。

ふと横目で隣のパークーを見ると、固く目を閉じて胸に手まで当っている。

流石に国王の御前ともなれば、この男でも畏まるらうじ。

(猫を被つた、といつよつは体の色を変えたつて感じだな)

レイは心中で、今のパークーを彼の使い魔アルヴァンになぞらえて評した。

「良い」

一言。

ジョゼフ一世はそれだけ言つた。

それ程大きな声では無かつたが、その声は威厳に満ち満ちていて、耳にスッと入つて来る。

これが王というものかと、レイは感心した。

パークーは「ハツ！」と受け答えると、すくつと立ち上がつた。レイも立ち上がる。

「来い」

再びジョゼフ一世はただ一言、そう発した。

短いが、故に断ることを許さない威圧感がある。

これに逆らえるのは、よつぽどの大物かただの大馬鹿者だけである。

パークーは無言で王の元へ歩き出す。

レイもそれに続いた。

やがて王の顔が確認出来る距離までやつて来ると、レイは初めてジョゼフ一世の顔を目の当たりにした。

ガリア王家独特の目の覚めるよつな青い髪と髪。  
何処か虚ろ気ながらも力強さを感じさせる瞳。

若ささえ感じさせる整った顔立ち。

よく鍛えられた逞しい肉体。

そして全身から漂う威圧感。

王の器という言葉がここまで相応しい人間も他になかなかいないだろ」とレイは感じた。

レイは相手がどういう人物かを一目見ただけである程度判断出来る。目の前の男は良し悪しは別としても、間違いなく大物である。レイでも思わず畏縮してしまいそうなオーラを今でもひしひしと感じている。

こうして実物を見ると、彼が世間からは無能王と揶揄されているのが全く信じられない。

確かジョゼフ一世がそう呼ばれる最大の要因は、彼が系統魔法を使うことが出来ないことに起因するとパークーから聞いた。

魔法が使えるか否か。

それだけで、これだけの男を無能扱いとは。

レイはこの世界の構造を改めて下らないと思った。

視線を僅かにずらすと、王の近くに長い髪の男が立っているのが視界に入った。

物憂げな顔をしながらこちらを見つめている。

旅の詩人のような風貌からすると、王宮の関係者とは思えない。

ましてや、あんな国王のすぐ側に置くような人物には到底見えなかつた。

そして、何よりも一番目を引くのはその特徴的な長い耳であつた。

(……エルフ、か)

エルフとは東方の砂漠に住む、人よりも長い耳を特徴とする種族である。

その姿は男女共にとても美しく、またスタイルも良い為、ハルケギニアの姿を持つ種族とされている。

また彼らは見た目が良いだけでなく、先住魔法の一番の使い手でもある。

先住魔法とは、精靈の力を借りることで杖を使用せずに唱えることを可能とする魔法のことであり、杖無しでは系統魔法を使用することが出来ないハルケギニアのメイジにとってはまさに天敵であった。かつて、エルフと人間は聖地を巡り幾度も抗争を行つており、人間側はそんなエルフたちに大きく負け越している。

時には、10倍近くもの人数の差がものの見事にひっくり返された、などということさえあつたといつ。

そうしたこともあり、ハルキギニアの人間にとつてエルフは恐怖の象徴として認知されている。

そんなエルフを身近に置いている時点での、やはじこのジョゼフ一世という男は只者ではない。

レイは何となく気を引き締めていた。

2人が王の側までやつて来ると、「止まれ」とジョゼフ一世が言った。

2人とジョゼフ一世との間の距離は長身の剣を振つても届かないくらいの距離であった。

ジョゼフ一世はまるで彫刻のように表情を読み取ることの出来ない顔で2人を見ていた。

「……そんなに固くならなくて良いぞ、伯爵。それに護衛の者も、だ」

「……ハツ！」

「…………」

パークーは了解の意思を込めた言葉を発し、レイは無言のまま頭を下げる。

貴族で伯爵といつ爵位を持つパークーはともかく、ずぶの平民であるレイが国王の目前で勝手に言葉を発するのは失礼にあたる。そのくらいの礼儀はレイも弁えていた。

ジョゼフ一世は口元を僅かに歪ませてレイを見た。

「…………良いぞ、言葉を発しても。貴様の声を聞いてみたい」

「…………こんな平民の声で良ければ」

レイの言葉を聞くと、ジョゼフ一世は更に口元を歪ませた。

「良いなあ、良いぞ伯爵。先程、急に連れて行きたいと言つた男。是非とも俺に会わせたいと言つていたのがその男なのであろう?なんか面白そうだ」

「それは良うございました。私めといたしましても、王に喜んで頂けるならば感謝の極み」

まるで別人のような口調で話すパークーを見て、レイは少し苛立ちを覚えた。

ジョゼフ一世は再びレイに話し掛けた。

「貴様、名は何だ?」

「…………こんな平民の名を聞いても仕方ないでしょう?」「王の前でその態度……。確かに面白いな」

ジョゼフ一世は声を上げずに笑った。

「他の誰でも無く俺が聞きたいのだ。……お前の名は？」

「…………レイ」

「レイ、か。レイ。レイ……フム、なるほどなるほど」

ジョゼフー世はレイの名を咀嚼するかのように何度も呑む。  
そして、納得したように頷く。

「……それでレイよ、一つ聞きたいことがあるのを答へよ」

「…………自分に答えられることでしたら」

「いいな、その平民とは思えぬ物言い。なるほど、伯爵が俺に会わせたくなるわけだ。……では聞くが、レイよ。お前はこのビダーシヤルを見てどう思った？」

側に立つエルフの男を横目で見ながらジョゼフー世は訊ねた。

レイもエルフの男をチラッと見る。

「どう……と言われましても？」

「平民なら……いや、平民に限らずハルケギニアに暮らす者であればエルフを見て恐怖を抱く。だが、お前は違った、この男……ビダーシヤルを見ても何も感じていないうつであつた。それは何故だ？」

「買い被りという奴ですよ。自分はそんな大した人間じゃありません」

「はぐらかすな。俺は聞いている。『何故だ?』と

ジョゼフー世の口が鋭くなる。

その口は他の解答を決して許さないと訴えかけていた。

レイは仕方ないと首を軽く振った。

「……エルフに知り合いがいましてね、それで今更エルフに脅えることがない。それだけですよ」

レイのその言葉にジョゼフー世は「おおつ！」と反応する。

「エルフに知り合い？平民の癖にエルフと知り合いだと…？これは久々に驚いた…！」

心なしか声のボリュームも上がっている。

エルフの男 ビダーシャルもレイの言葉に少し驚いた様子であった。

エルフの多くは人間を蛮族と蔑視している。

ビダーシャルもその一人であつたので、そんな人間に同胞の知り合いがいるということが信じられなかつた。

ジョゼフー世は改めてレイを真正面から見据えた。

「……面白い。お前は実に面白いな！」

声に幾分か明るさみたいなものが混じつっていた。  
どうやら本当に面白いと思つてゐるようだ。

レイは何も言わずにただ頷いた。

レイとしては早くこの面倒な謁見を終わらして、パークーともおさらばしたかったのだ。

どんな用件でこの王とパークーが会つてゐるのか知らないが、そもそもそんなに長く時間を見るようなことではないだろう。

王とは、王宮とはそんなに暇では無い筈だ。

一貴族に長々と時間を取ることは無い。  
ましてや、それが平民なら尚更だ。

ジョゼフー世が何やら、ビダーシャルとは別の側近の男に耳打ちした。

男は急いで謁見の間から出て行くと、すぐにレイの剣を持ってやつた。

て来た。

それをレイに渡す。

「……………？これは何ですか？」

王が目の前にいる男に剣を渡す。

もしもレイが暗殺者なら、王を殺す絶好の機会である。

何でそんな自殺紛いのことをするのか、レイは理解に苦しんだ。

「俺は噂だが聞いたことがある。このハルケギニアには、どんなメイジでも敵わないという最強のメイジ殺しがいる。と」

「……………」

「貴様を一目見て、俺は分かった。レイ、貴様がその最強のメイジ殺しなのだろ？」

「……………」

肯定も否定もせずにレイは無言のままジョゼフ1世の顔を見ていた。ジョゼフ1世は「ウム」と何かを確信したように頷く。

「ならばその強さ、どれ程のものか俺に見せてくれ。相手はこのビダーシャルだ！」

「王…？」

突然の指名にビダーシャルが思わずジョゼフ1世の方を振り向いた。ジョゼフ1世は薄く笑いながらビダーシャルを見た。

ビダーシャルは何かを言おうとして、しかし何を言えばいいのか分からず、言葉に詰まっている。

そしてその様子をまるで他人事のようにレイは見ていた。その肩をパークーがポンと叩いた。

「ククク……どうする? ハルフと戻し合いだぞ? もしかしたら殺し合いになるのかな? ククク……」

「…………もう、どうでもなれ。という奴だな」

レイはセリフをつぶし、今日一番の深いため息を吐いた。

## ガリア城にて 1（後書き）

とこうわけでジョゼフとビダーシャルの登場です。  
パークーのキャラがジョゼフとちょっと被つてたので、キャラを分  
けるのに苦労しました。（汗）  
ガリア編はそろそろ終わりかな？

## ガリア城にて 2（前書き）

この話で今回のガリア国編は終了です。

レイはガリア国王ジョゼフ一世の突然の提案により、ビダーシャルといつエルフと一緒に打ちをする羽目になってしまった。

(断る)とは……出来ないのだろうな)

ビダーシャルの必死の抗議を右から左へと受け流しているジョゼフ一世を見ながらレイは思った。

ジョゼフ一世といつ男は、やると決めたことは何があつてもやる男だ。

出会つてまだそんなに時間も経つておらず、一一三言葉を交わしだけだが、それでも充分王の人となりは分かつた。

恐らくあのビダーシャルというエルフの抗議を聞き入れることは無いだろう。

レイはジョゼフ一世の顔を見てそれを確信した。

王は実に楽しそうな顔をしていた。

レイはビダーシャルに向かつて声を掛けた。

「おい、あんた……。ビダーシャル、と言つたか？」  
「……私に話し掛けるな蛮族めが」

ビダーシャルはレイの方へチラリと顔を向けると、見下すような目で見た。

「貴様のような下等な輩と相まみえところで、死体が一つ転がり、この場が穢らわしい血にまみれてしまつだけだ。私は無駄な殺生は好まない。だから王に考え直して貰つよつに進言しているのだ。断じて貴様の為では無いぞ」

「……そうか

こちらはこちらで随分と高尚な考えを持つているらしい。

無駄な殺生は好まない、といった点くらいは共通した考え方のようだが、その根源はまったく異なっている。

レイは少なくとも相手の血に汚れることを穢らわしいと思ったことは一度もない。

相手が流した血、自らが奪つてしまつたであろうそれは相手の生きていた証であり誇りなのだから。

ジョゼフ一世はビダーシャルの言葉を受け流しながら、何か思い付いたような顔をする。

「そうだ、レイよ。何か褒美でもあれば貴様もやる気になるのではないか?……そうだな、貴様がこのビダーシャルに勝利した暁には、貴様の望みを何でも叶えてやろう!」

「王!」

ビダーシャルの声を無視し、ジョゼフ一世は続ける。

「ビダーシャルは強いぞ?何せエルフだからな。最強のメイジ殺しは果たしてエルフを倒せるのか……実際に興味深い。なあ、伯爵?」

「ええ。僭越ながら私めも、勝敗が気になつて気になつて夜も眠れなくなりそうです」

「…………」

レイは目の前の現状に思わず頭を抱えそうになる。

そして、自分がまるで玩具のように扱われていることに不愉快さえ感じていた。

「……望み」

「んんー?」

レイが口を開くと、ビダーシャルは再びチラリとだけこっちを見、ジョゼフ一世は少しだけ身を乗り出した。

レイは改めて、ジョゼフ一世とだけ田を合わせ、僅かに歩を進める。

「何でも叶える……と仰られましたね?」

「おおっ! 乗つてきたか! そう来なくてはなー!」

ジョゼフ一世は年甲斐も無く、少年のよつて田を輝かしている。レイは歩みを止めると、軽く息を吐いた。

「……では、叶えて貰こまゆ」

次の瞬間、ジョゼフ一世の田の前で旋風が巻き起こった。

レイはいつの間にか鞘に入つたままの剣を地面へと振り下ろしていく。

レイは軽く剣先で地面を叩いた。

すると、それと同時にレイに背を向けていたビダーシャルがバタリと倒れた。

突然の出来事にジョゼフ一世とパークーは状況を理解出来なかつた。

数秒経つて、よつやくジョゼフ一世が口を開いた。

「レイ。貴様、一体ビダーシャルに何をしたといつのだ?」

レイは鞘に入ったままの剣を背負い直すと、何食わぬ顔で言つた。

「戦えと仰られたので戦いました」

「俺はそういうことを聞いているのではない。ビダーシャルに何をしたかを聞いている!」

ジョゼフ一世が問い質すと、レイは倒れたビダーシャルを一度見下ろし、それからまたジョゼフ一世の目を見た。

「簡単なことです。自分はあなたと話しながら僅かずつ距離を詰め、そのビダーシャルというエルフに近付いて行き、彼が気付かぬ内に射程圏内に入るのを確認したら素早く彼の後頭部へとこの剣を叩き付けた次第でござります。言わば、不意打ちです」

「何と……！」

「陛下は一騎打ちをしろ、と。戦えと仰られました。しかし、ルールは提示されなかつた。それならばここは戦場と同じです。戦場で愚かにも彼は自分に背を向けました。よつて、戦場のルールを用いさせて頂きました。……まさか卑怯だ。とでも仰られますか？」

「……いや

レイが無表情でそう語ると、ジョゼフ一世は小さく首を振った。

「貴様の言うとおりだ。確かに一騎打ちとは言つたが、ルールまでは提示していなかつた。故に貴様の言い分は正しい。だから不意打ちだろうが何だろうが相手を倒した以上は貴様の勝ちは勝ち。それは認めようぞ」

ジョゼフ一世はそう言つた後に、倒れたビダーシャルを横目で見ながら、「うつむ」と呟つた。

「……だが、ビダーシャルとてそちらの凡夫では無い。不意打ちしたところで素直にやられる程弱くも無い。少しでも殺氣があれば反

応は出来た筈だ。されば奴の先住魔法で倒されたのは貴様の筈だ

「簡単です陛下」

「いつ言つと、レイは不敵に笑う。

「彼が殺氣を感じるよりも、自分が剣を振る方が早かつた。それだけのことです

「何と……」

ジョゼフは今日一番の驚きの声を上げた。

パークーも驚いていたが、すぐにいつものニヤリ顔に戻ると、出会った時と同じように拍手した。

「やはり素晴らしい！素晴らしいなあお前は……」

「……で、陛下。例の約束ですが」

レイはパークーを無視してジョゼフ王へ話し掛ける。

「おおー！ そうであったなー！ 何が望みだ？ 金か？ 土地か？ 女か？ それともシユヴァリエでもやろうか？」

「では……」

レイは一呼吸置いてから答えた。

「陛下の自分に対する永久的な不干涉と無関心をお願いします  
「何と……」

ジョゼフーはまるで悲鳴のような声を上げた。

「貴様みたいな面白い男に2度と関わってはならぬと、貴様はそんな残酷なことを俺に言つのか！？」

「まさか、陛下ともあらつ方が自分から申し出たことを反故なるなど……」

「見ぐびるな！俺は自分の言葉を偽る真似などせぬ」

ジョゼフー世は田つきを鋭くして言つた。

しかし、すぐに寂しそうな表情になる。

「……勿体無い。本当に勿体無いぞ。お前みたいなのが側にいれば決して退屈などせぬところに」

「陛下、お言葉ではござりますが、自分は陛下の玩具では無いのです」

レイはそれだけ言つて、無言で頭を下げてから、ジョゼフー世に背を向けた。

ジョゼフー世は去つて行くレイに声を掛けた。

「……最後に聞かせてくれ。お前は一体何だ？」

漠然とした問いを投げ掛けられる。

レイは少し考えてから、ジョゼフー世に背を向けたまま口を開いた。

「ただの平民です。それ以外は陛下の見たまま、感じたままで結構です」

レイはそのまま、謁見の間から出て行つた。

レイが出て行つた後、ジョゼフー世は側近の男に氣絶しているビダーシャルを運ぶように命じた。

側近の男はレビテー・ショーンの魔法を使い、ビダーシャルを謁見の間から医務室へと運ぶ。

やがて、謁見の間はジョゼフ一世とパークーしかいなくなつた。

「ふうむ、俺の見たまま、感じたまま……か」

ジョゼフ一世は先程レイに言われたことをふと思ひ出していた。

「ここの俺の空虚な心でも、あやつからは何かを感じることが出来た。その何かは分からぬ……がな。だが……久々に興奮したな！」

ジョゼフ一世はレイと向かい合つた時間を回想し、いつの間にか笑顔になつていた。

そして、パークーの方へ向き直る。

「伯爵。今日は俺にとって、久々に良き日であった。その機会を作ってくれて有り難く思つぞ！」

「勿体無きお言葉」

パークーは再び膝をつき、胸に手を当てながら頭を下げた。

「だからこそ、勿体無い。俺はもうあやつに関わることが出来ないのだなあ。自分が言い出したことはじえ、実に勿体無い」

「差し出がましいことを申し上げるようで誠に恐縮なのですが、何故そんなにあの平民と交わした口約束をお守りになられるのでしょうか？所詮は口約束ですよ？」

「先程はああ言つたが、確かに俺にはあやつとの口約束を守つてやる義理は無い。あんなもの、俺の意志1つで簡単に破棄出来る。……だが俺とて、そう出来る相手とそれをしてたくない相手との区別はつく。あやつとの約束は例え口約束でも破りたくないのだ。俺の空

虚な心がそれを望まない。言葉は偽れても、俺の心までは偽れないからな

「それ程までにあの平民のことを……」

「あやつは平民では留まれぬ存在よ。それは伯爵。お前も感じていることだらう?」

「さあ、どうでしょ?」

「お前もなかなか食えぬ男だ。……しかし、あやつは惜しい男だ。もしもあやつが他国の王であれば、俺は嬉々としてあやつの治める国を欲しいと思つただらうな」

ジョゼフ一世は遠くを見つめながらひつひつと、その後にはまた剛刻のような表情を読み取ることの出来ない顔へと戻っていた。

パークーはそれを見とめると、無言でジョゼフ一世に頭を下げ、そのまま謁見の間から出て行つた。

ジョゼフ一世は暫くの間、誰もいない謁見の間に鎮座し、虚ろ気な目で視線を宙に彷徨わせていた。

レイはガリア城から出ると、軽く深呼吸とストレッチをした。

慣れない敬語や礼儀作法に、今更ながらひとつと疲れを感じる。

首をパキパキと鳴らしながら先程までの夢のよくな      勿論、い

い意味ではない      時間を思い返していた。

その中でも取り分け、ジョゼフ一世のことが強烈に頭の中に焼き付いていた。

「あの王……」

レイがビダーシャルに不意打ちを仕掛けて叩き伏せた時のこと。レイはジョゼフ一世の真正面に立つていたが、その時奇妙なものを

田にしていた。

それは、レイの一拳一動を田で追つてゐるジヨゼフ一世であった。まるで、スローモーションでも見るかのよつてじつと。

相手がエルフ故、殺すつもりは無かつたものの、レイはそれ程手加減をしていなかつた。

そのレイの動きを田で追つのは、並みの戦士では不可能である。ということは、ジヨゼフ一世自身も並みの戦士ではないということか。

あの場ではレイが何をしたか分からぬフリをしていたが、あれはそれを隠そうとしていたのだろうか。

「……いずれにせよ、やはりあの王はただ者では無い、といつ」と  
か

レイは改めてジヨゼフ一世といつ男の底知れぬ何かを感じた。

「……あの望みもいつまで叶えてくれるか分からんな」

誰に言うでも無く一人ごちる。

あの王が本氣で自分の欲に忠実になつてレイを追いかけ回し始めた  
ら、きっとパークー以上に面倒なことになるに違ひない。

誰も自分の後をつけていなことを確認すると、どうやらレイの望みは叶えて貰つてゐるようであつた。

そのままリュテイスを出ようとした時、会いたくない男がそこに立つていた。

「ククク……俺に挨拶無しとまづよつと冷たいんぢやないかな?」

パークーが今すぐ殴り飛ばしてやりたくなるよつな一矢つけ顔でレ

イを見ていた。

「……不干涉と無関心はどうした?」

「あれはお前とジヨゼフ一世の取り決めだろ?俺には適用されん」

「……そつか、それはしつじつたな」

レイは本気でそう思つていた。

「……ところで、どうやって先回りした?お前より先に出て来たと記憶しているが」

「ククク……忘れちゃいないか?俺はこれでもトライアングルのメイジだぞ? フライくらいお手の物ぞ」

「そう言えば、そんなことを言つていたな」

「ククク……実は聞きたいことがあってなあ」

「……何だ?」

「おお!いいなあ、その面倒臭そうな顔! ジヨゼフ一世の前では猫でも被つていたのか?」

「あんたに言われたくは無いがな」

「ククク……聞きたいことと言つのはあのエルフのことだ」

レイは自分が倒したエルフの顔をぽんやつと思つて出した。

「奴がどうかしたのが?」

「お前は不意打ちという実に卑劣極まりない行いでエルフを倒した。実際に汚い!」

「……下らないことを言つに来たならひとつとそこをビナ」

「ククク……人の話は最後まで聞け。もしも、不意打ちを使わずに挑んでいたらお前はあいつに勝てたと思うか?」

「何か言えばそんなことか」

レイは肩をすくめてみせる。

「……あのエルフがどんな先住魔法つか知らんからな。だから、やつてみないと分からん。正面から戦うなら戦うで、その時によつて戦術などいくらでも変わるしな」

「戦術次第では勝てる、と？」

「少し違うな。俺は勝てる戦術しか取らない。つまり、戦う以上は勝つ。勝たねば死ぬ。それが俺の生きて来た世界だったからな。俺は生きる為なら何でもするし、それで今まで生き残つて来た。中には卑劣なやり方も勿論あつたろうし、俺はそれを否定はしない。俺はまがり間違つても聖人君子などでは無いからな」

「なるほどなるほど……」

パークーは納得したように頷いた。

「そう言えばお前、エルフに知り合いがいる。とか言つてたな？」

「……まあ、な

「じゃあ聞くが、そのエルフとあのエルフ、どっちが強いのか？」

「何でそんなこと聞くんだ？」

「興味というものは尽きないんだよ」

「……さあな。そのエルフだつて敵対していたわけじゃない。そいつが使う先住魔法を見たことがあるが、あのエルフは先住魔法を見る前に倒した。そんな情報量でどっちが上かなど、俺には判断出来ん」「そうかそうか。いずれお前の知り合いのエルフに会つてみたいなあ。紹介とかはしてくれないのか？友人として」

レイは心底面倒臭そうな顔でパークーを睨み付けた。

パークーはやれやれという表情をする。

「ククク……まあ、そう邪険にするな。それに、こう見えて俺も少

しは悪いと思つている。無理に付き合わせてしまつてとな

パークーは相変わらず人を馬鹿にしたよつた表情でそつと語つてのけ  
ると、懐から何かを取り出す。

それは、手紙のようなものであった。

「……だから餞別代りにこれをくれてやるひつと思つてな

「?これは何だ?」

「ククク……お前は自分を平民と言つてゐるが、時々自分が平民だ  
といつゝことを忘れてこる」とが多いんじやないか?」

レイは再び肩をすくめて見せる。

パークーは続けた。

「知らないかも知れんがこの世界は平民にひとはとても住み辛い。  
時には平民が故にお前がしたくとも出来ないということなんぞいく  
らでも起こり得る。ここガリアでそんなことが起きた時はそれを使  
え。俺の名前がそこに入つている。仮にも伯爵などといつ爵位を貰  
つているんだ。効果が無いわけがない」

「あんたにしちゃ氣の利く餞別だな。明日大雪でも降るんじやない  
か?……まあ、くれるというなら有難く頂いて行こう

皮肉混じりにそう言いながら、レイはそれを懐に仕舞つた。

パークーはうんうんと頷くと、レイに背を向けた。

「ククク……また会おう

パークーはそれだけ言つと、フライの魔法で別荘の方へと飛んで行  
つた。

それを特に目で追つることも無く、レイはリュテイスを出た。

気が付くと、日は沈みかけ、外をそろそろ夕闇が支配し始めた。何処か適当な宿で1泊してからリュティスを出るという道もあったが、野宿は別に苦ではないし、それに今はあの国に1秒でも長く滞在していたくは無かつた。

いずれ再び訪れることがあるだろうが、少なくとも今はこの国から別の国へ行きたくてたまらない。

「……さて、次は何処へ行こうか

行く当ての無い旅というのは、何にも縛られなくてレイは好きだつた。行き先に迷うといふことは、行き先を好きに選べるとこいつことでもある。

そこにはレイが何よりも愛する自由がある。

「……そう言えば、腹が減ったな」

そう言えど、今日1日殆ど何も腹に入れていないことに気が付く。レストランで貴族に因縁をつけられてから、何かを口にする機会が殆ど無かつたので仕方ない。

「まあ、野ウサギでも狩つて、焼いて食べばいいだろ

そう言つと、別の国へと繋がる街道を歩き始める。

野宿は苦ではないが、食べ物が大味になつてしまつのが残念である。レイは料理が出来ないわけではないが、野外では作れる料理などとかが知れているし、調味料の類も持つてなどいない。

結果として、肉か魚の丸焼きか野菜の煮汁くらいしか口に入れることが出来ない。

早く街か村へ行つて、何か人の手が加えられたものを口にしたいと  
レイは今から思つていた。  
だが、張る必要の無い見栄を張つて高級なレストランへ入るのは今  
後は止めようと心に誓つた。

## ガリア城にて 2（後書き）

ビダーシャル戦の決着の仕方は賛否両論出そうですね（汗）

これでガリア国編は一旦終了です。

今回は短編みたいな感じで書きました。

レイヒジョゼフの邂逅、そしてパークーというキャラを出したかったという意図もあります。

ガリアにはまだまだエピソードを予定しているので、今後もお楽しみ下さい。

次回も原作キャラと絡ませる予定です。

## ラ・ロシェールにて 1（前書き）

お久しぶりです。

今度は再びトリステイン王国が舞台です。  
そして、原作キャラも早速登場します。

薄暗い森の中をレイは走っていた。

道なき道をひたすら突き進んで行く。

レイは背後をちらと見る。

すると、黒いロープを纏つた男が猛然と追い掛けで来るのが見えた。

よく見ると、男は地面から僅かに浮いている。

### フライの魔法。

相手の体力切れを待つことは無意味だと悟る。

そして、相手の飛んで来る速さも自分の足と同等、もしくは僅かに速いようであった。

このまま撒くのは無理。

そう判断したレイはその場に立ち止った。

そして、後ろを振り向いて黒いロープの男と向き合つ。男もその場に立ち止まつた。

レイは男に訊ねた。

「……お前は誰だ？」

「…………」

男は何も答えなかつた。

お互い、無言で睨み合う形となる。

男は不意に被つていたフードを取つた。

すると、その下から禿げた頭と爬虫類っぽい顔が現れる。

右目の方に蛇を模したような入れ墨が彫られていた。

それを見て、レイは男の正体を察した。

(また教団からの暗殺者か……)

レイは無言でその男を睨み付けながら、右手をゆっくりと剣の柄へと持っていく。

それよりも早く男は杖をレイへと向けた。

「……カッター・トルネードー。」

頭の禿げた男は素早く詠唱を終え、淡々と魔法の名を告げ、杖を振り下ろした。

すると、レイの周囲に巨大な竜巻が現れ、周りの木々をなぎ倒しながらレイへと向かつて行く。

レイは迷わず竜巻の中を突つ切つて、そのまま男の方へと向かつて走った。

体が切り刻まれ、赤い鮮血を周囲に飛び散らせてもレイの勢いは衰えず、寧ろ増すばかりであつた。

やがて、レイは男のすぐ目の前まで距離を詰めた。

剣の柄をしかと握る。

それまで無表情だった男の顔に初めて怯えの色が浮かぶ。

「……くつー?」

「…………死ね」

一閃。

目に見えぬ速度で長身の剣を横に払つた。

次の瞬間、男の体は上と下に分かれ、地面を転がる。

そして、すぐに地面が血の海と化した。

レイは剣を振つて、刀身についた血を払うとそのまま背中の鞄の中

に仕舞う。

そして、物言わぬ躯となつたそれを一警する。

「……しつこい連中だ。殺しても殺してもまた次から次へと湧いて来る」

そう呟くと、そのまま何もなかつたかのよつてその場を立ち去つて行つた。

「ア――――――！」

その時、1羽のカラスが鳴いた。

そのオニキスのように美しい瞳がじつと去つて行くレイを見ている。やがてその姿が見えなくなると、カラスは翼を広げてその場から飛び去つて行つた。

ラ・ロシェール。

トリステイン王国の南部に位置する都市である。

浮遊大陸アルビオンへの航路を有しており、夜になつても街は賑わつてゐる。

また、スクウェアクラスのメイジが岩から切り出して作つたとされる建物群が特徴的であつた。

その街のとある酒場でレイは1人で酒を飲んでいた。  
体のあちこちに包帯を巻きながら、殻の固い木の実を左手で弄んで  
いる。

レイの纏う独特の雰囲気に、他の客は彼に関わり合つのを自然と避けていた。

興味本位で遠巻きに見る者も何人かはいたが、レイと田が合いつになると慌てて田をそらす。

レイは周囲の田は一切気にせず、酒の味を楽しんでいた。

そんな時、一人の女が店に入つて來た。

女は傭兵のような格好をしている。

彼女はレイの目の前までやつて來ると、彼の田を真正面から見ながら言つた。

「相席、構わないか？」

他にも空いている席はあつたが、彼女は敢えてレイとの相席を望んでいるようであつた。

「ああ……」

レイは特に断る理由も無かつた為、素つ氣なく答える。

「どうか。では遠慮なく座らせてもらつ

そう言つと、彼女はレイの真正面に立ち、椅子を引いてそこへ腰掛けた。

レイは彼女へ訊ねる。

「俺に何か用か？」

「別にそんなんじゃない。席が空いていたから座つただけだ」

「……席なら他にも空いていると思うが？」

「そうか？ 気付かなかつたよ」

彼女はそのまま豪快に笑った。

嫌味の無い、気持ちのいい笑い方である。

レイは彼女に少しだけ好感を持った。

彼女はウエイトレスの女性を呼び止め、レイと同じ酒を注文した。

注文を終えると、彼女は一息つく。

レイは再び彼女に訊ねた。

「……見たところ、傭兵か？」

「そんなようなものだ。……あんたもそうだろ？」

「……まあ、似たようなものだ」

レイはフツと笑った。

すると、先程のウエイトレスが酒の入った木製ジョッキを持って來た。

レイたちのテーブルの上にそれを置くが、その手は震えていた。

「う、うわー！」

そう言って頭を下げるが、そそくせとその場を去つて行つた。

どうやらレイの雰囲気に怯えていたらしい。

それを見て、彼女は「ハハハ」と笑つた。

レイは首を傾げる。

「何だ急に？」

「何だつて……そりや、そんな顔してたらウエイトレスも怯えてし  
まうな」

「顔？」

「お前もそんな仏頂面していいで、少しは笑顔でも見せてみたら  
どうだ？ただでさえ人当たりがあまりいいとは言えないのに、今

お前はまるで悪鬼のようだ」

「俺は今、そんな顔しているのか？」

レイは自分の顔に触れてみた。

指先で感じるたくさんの傷跡。

確かにこれで悪鬼のように佇んでいたら、怯えられてしまつのも無理はない。

レイは自嘲氣味に笑う。

「……まあ、努力はしてみるよ」

そう言つてレイを見て、彼女は再び笑つた。

一頃り笑つた後、彼女は何かを思い出したかのよつて口を開いた。

「……そう言えば、お互い自己紹介もまだだったな。これは失礼した」

彼女はそう言つと、木製のジョッキを手に取る

「私の名はアーネスだ。是非とも、お前の名前も聞かせて貰いたい」

「……………レイ」

「レイ……か。じゃあ、レイ、済まないが乾杯をしてくれるか? 1人で飲むのはやはり味気ないからな」

「そのぐらいならお安い御用だ」

レイは自分の木製ジョッキを手に取ると、それをアーネスの方へと向けた。

アーネスは自分のジョッキを突き出し、それに軽く当てる。

その後、2人で同時に中の酒をくいつと飲んだ。

その時、店の中でピアノが流れた。

夜はまだこれから……とでも告げるかのようこそ

それはとても落ち着いた、耳心地の良い曲であった。

ラ・ロシェールにて 1（後書き）

とこりわけアーネスさんの登場です。  
時系列的にはアンリエッタに仕える前ですね。  
彼女は活躍させる予定なのでお楽しみを。

「……フーッ。なかなか美味しいな。やはり酒は一人で飲むよりも誰かと一緒に飲んだ方がより一層美味しい」

「それは同感だな」

アニエスの言葉にレイも同調した。

レイは1人でいることが多いものの、決して孤独を愛しているというわけではない。

時には人並みに寂しいと感じることもある。

よく酒場に立ち寄るのは、酒が飲みたいという理由以外にも、そういつた寂しさを紛らわせたいという気持ちが少なからずあるからかも知れない。

しかし、現実としてレイはそのあまりに異質な雰囲気から他人に避けられることが多い。

そんなレイに近寄つて来るのは、何か他に思惑があるのか、それともよっぽど変わった人間かのどちらかであった。

彼女もまた、そのどちらかなのだろう。

だが、それでもレイは人と接しているこの時を嫌いにはなれなかつた。

例え最後に冷めた別れが訪れるのだとしても、それまでは樂しみたい。

それが偽りざるレイの本心であった。

2人は暫く他愛の無い談笑を楽しんでいた。

ふとアニエスがじつとレイの顔を見つめ出す。

「…………」

その探るよつたな視線に、レイは少しだけ眉を顰める。

「……俺の顔に何かついているのか？」

「……深そつだな、傷」

そうつ言いうと、アニメスは自分の左目を指差し、上下に指を動かした。

「やつちの田ははちゃんと見えているのか？」

「……ああ、御陰様でな」

レイはそう言うと、木製ジョツキに口を付けた。

そして、今度は自分がアニメスを田で探つてみる。

首までの長さに切り揃えられた金色の髪。パツツン前髪が何処か幼さを感じさせる。

顔つきは飛び抜けた美人という程では無いものの、傭兵などといふ稼業をやつている割にはそれなりの容姿を持っていた。

化粧をして綺麗に着飾れば、男たちが放つては置かないであろうことが容易に想像出来る。

体格も細身ではあるが、しつかりと筋肉がついていて、実に均整が取れていると言えた。

また、こうして一緒に酒を飲みながらも相手に隙を見せないのは、彼女の戦士としての資質の高さを窺わせる。

レイの視線に、アニメスは少し顔を赤らめた。

「……そんなにじろじろと見るな。女性をそんな風に見るのは失礼だぞ」

「男をじろじろ見るのは失礼に当たらないのか？」

「……と、これは済まないな」

アニメスは慌ててレイから視線を逸らす。  
その仕草にレイはつい笑つてしまつた。  
アニメスが少し不機嫌な顔になる。

「何がそんなに可笑しいと言つんだ？」

「すまんな、そんな乙女みたいな一面もあるんだな、と思つてな」「！…あまり、人をからかわないで欲しいな…まったく！」

アニメスは顔を真つ赤にしながらそう言つて、木製ジョッキに口を付けた。

レイは再び笑つた。

「……それにしても、女一人で傭兵生活は色々と大変じゃないのか？」

「まあな。何、女だから出来るところ」ともある。例えば……色仕掛け、とかな」

「ほお？それは意外だな。そういうことをするようなタイプには見えなかつたが」

「それはそうだ、そんなこと一度もやつたことないからな」

アニメスは「ハツハツハ」と笑つた。

そして、そのすぐ後。

「……だが、必要があれば色仕掛けだろ?とやつてやるがな

ボソッと呟くよつて」アニメスが言つのをレイは聞き逃さなかつた。

「……何か成さねばならないことでもあるのか？」

レイが聞くと、アニエスは驚いたような顔をした後、少し躊躇いがちに答えた。

「……聞かれたか。まあ、いい。……実は復讐したい奴らがいるの

だ」

「復讐？」

「……お前になら話してもいいかな」

アニエスはレイの目を見てから頷くと、木製ジョッキをテーブルの上へ静かに置くと話し始めた。

「あれは今から10数年前だつたか……トリステインの北部にダングルテールという小さな村があつてな。そこはとても田舎で本当に何も無くて、その日捕れた魚の艶がいいだの、隣の爺さんが腰を痛めたら村中が騒ぎになつたりだの、そんなことが全てな、そんな村だったよ。でも、とても平和だった。村の人皆明るくて楽しくて優しくてな」

アニエスは懐かしむよくな顔になつて話していた。

「……やつ、あの日が来るまでは

そこまで言つと、アニエスは突然拳をぎりりと強く握り、歯を食い縛つた。

「ある日のことだつた。村に集団で男たちがやつて來た。連中は我々にこう言つた。『新教徒どもは弾圧する』とな。……そう、確かに村の皆は新教徒だつた。だが、我々が何をした? ただその日その日を精一杯生きていただけじゃないか!なのに奴らは村に火を放ち、

村の皆を次々と殺していくつた！私の田の前でな……」

アーネスはたまらなくなつてテーブルを思い切りドンと叩いた。木製ジョッキの中になんか残った酒が大きく揺れる。

何事かと周りの客がこちらを奇異の目で見て来るが、レイがひと睨みすると、皆そそくかと目を逸らして他人のフリをした。

「隣の爺さんも！よく遊んだ友達も……母さんも父さんも……皆殺された……奴らの手で……！」

まるで火を吐くかのようにそつとアーネスの口は、まるで今すぐでも人を殺してしまいそうなほど憎悪に満ち満ちていた。レイは黙つて彼女の話を聞いている。

今のアーネスの姿は、彼女が先程冗談めかしてレイに言つた悪鬼のようであつた。

暫くの間、沈黙が流れた。

アーネスは静かに口を開いた。

「……私はあの中で運良く生き残ることが出来た。生き残ったのは恐らく私だけだ。何故私だけが生き残れた？……それはきっと奴らに復讐する為だ。村を焼いた奴、皆を……母さんや父さんを殺した奴、そしてそれを指示した奴……！」

アーネスは自嘲気味に微笑んだ。

「……フフ、よくある話だろ？」「……確かにな」

レイはそれだけ言つと、木製ジョッキを手に取つて、アーネスへと向けた。

アニメスも無言で木製ジョッキを手に取り、レイのそれへとぶつけて、一気に中の酒を飲み干した。  
木製ジョッキをテーブルの上へ置くと、少し申し訳無さそうに口を開いた。

「……実を言うと、お前に話しかけたのも、その復讐が関わっているんだ。気を悪くしたなら済まないが」

「別に気にしてはいない。人が人に接触する時は何かしら含むところがあるのは当然だ。無償の善意という得体の知れないもので人と関わるような奴と比べれば理解出来るだけ大分マシというものだ」

「そうか。そう言つてくれると私も楽だ」

レイの言葉にアニメスはホッと胸を撫で下ろした様子であった。  
その後、身を少し乗り出し、声を潜めた。

「……実は、この近く奴らの仲間の1人が潜んでいるという話を聞いた。ブルギッシュと言つて、何でもこの辺の領主に納まつてるとか」

「その情報は確かなのか？」

「ああ、間違いない。信頼出来る情報筋からの情報だからな。だが、そいつはたくさんの護衛に守られている」

忌々しそうにアニメスは言い捨てる。

「1対1なら、相手がメイジだろうが何だろうが、私は何とか出来る」

「ほあ、なかなか言つた」

「……だが、対複数となれば違う。1人だけでは絶対に無理だ。そのくらいの判断が出来るくらいには私も復讐に狂い過ぎてはいけない」

「そうか。それで俺は何をすればいいんだ？」

「察しがいいな。流石私が見込んだ男だ」

アニメスは久々にニッと笑つてみせる。

「……お前には護衛の陽動をお願いしたい。ブルギッシュ自身は私の手で殺す！その為にお前を囮に使いたいのだ」「別に構わん」

「え？いいのか？囮だぞ？私に利用されるだけなんだぞ？こう言つのも何だが、お前に引き受ける義理なんて何も無いんだぞ？」

「お前を気に入つた。その理由だけじゃ不十分か？」

「なつ！？」

アニメスは思わず顔を真っ赤にした。

その様子を見て、レイは声を出して笑つた。

アニメスはレイを睨み付ける。

「……あまりからかうなと言つてる！」

「ハハハ、済まんな。だが、お前を気に入つたのは本當だ。それに……」

「それに？」

「復讐は成し遂げられなければならぬ」

レイはすぐに真面目な顔へ戻つて言った。

「『復讐しなかつた後悔は、してしまつた後悔よりも深い』。かつて俺にそう言つた奴がいた。そしてそいつはこうも言つた。『復讐はしてもしなくとも、どっちみち後悔する』と」

「……そいつの言つ」と、私には分かる気がするな。初めて人を殺した時、確かに私は後悔のようなものを感じた。私に僅かに残つた良心の呵責だったのだろうな。だが、やらなければ私はいつか、

憎しみの末に自分自身を殺していたかも知れん

「どうせする後悔ならば、自分の心が望むままにすればいい。アーニエス。お前はそいつらを殺したいと本気で思つたんだろ？なら、それは完遂すべきだ。と俺は思う。……すまんな、部外者の人間が勝手なこと言つて」

「いや、いい。寧ろ、私に善意で『復讐』しろ」と薦めた人間はお前が初めてだ。レイ

「善意かどうかは分からんがな」

そう言つてレイはフツと笑つた。

アーニエスもフツと笑つ。

「まあ、引き受けてくれるのであれば何でもいいさ。……そつ言えば、お前はどんな獲物を使つていいんだ？」

「剣だ。ここに置いてあるだろ？」

「他には無いのか？」

「無い。強いて言えばこの肉体くらいだ」

レイはそつ言つて、拳を握る。

アーニエスはレイの腕と置いてある剣を見比べた。

「……そんな細い腕でよくそんな剣を振り回せるな

「太いと逆に動かし辛くなる。筋肉が邪魔してスピードを殺すからな」

「そういうものなのか？」

「ああ、強くなりたい奴はすぐに無駄に筋肉をつけたがる。だが、大事なのはバランスだ。そして、それを維持出来て初めて強くなる。後は実戦を積み、経験と勘を養つていけばいい

「なるほど、そういう考え方もあるのか。勉強になるな

「ところでお前は何を使つているんだ？」

「私が？私は……」

アーネスは腰のホルスターから銃を抜いてレイへと見せた。

「これは……銃か？」

「……それは、私が初めて貯めた金で買ったものだ。奴らへ復讐する為にな。まあ、子供には過ぎた玩具だつたがな。だが、奴らの仲間を殺すのに役立つてはくれた」

「……そうか。少し触つてもいいか？」

「ああ、お前なら別に構わん」

アーネスに手渡されると、レイはそれによく見てみた。  
大分旧い型でところどころに傷がある。

「なるほどな。だが、これだともうすぐ使えなくなりそうだぞ？」

「そうなる前に復讐を終えたいところだ」

「フツ、そうか」

レイはアーネスへ銃を返した。

アーネスは銃を腰のホルスターに仕舞うと、次に鞘に入ったままの剣を見せた。

「後はこれだ」

「なるほどな。大体分かった」

レイは左手の木の実を握り潰すと、皿の上に中身を落として、それを一つまみ口に入れた。

「……で、何時決行する予定なんだ？」

「すぐにでも、といきたいところだが、何も準備しないわけにもい

がないからな。取り敢えず、奴の屋敷に行こうかとは思つ。下見の意味も込めてな」

「分かつた」

すると、レイはウエイトレスを呼び止め、酒のお代わりを頼んだ。アーネスもお代わりを頼む。

ウエイトレスはすぐにやつて来ると、先程と同じ様に忙しなくテーブルの上に木製ジョッキ2つを置いてから、そそくさとその場を去つた。

2人は新しい木製ジョッキを手に取つた。

「では、改めて乾杯といくか」

「ああ、2人の出会いに……」

「乾杯」

「……ひ、ひいい……」

中年の男が情けない声を上げて後ずさつた。

頼りにしていた護衛は、男にあっせりと斬り伏せられて死体と化して地面へ倒れている。

杖を持とうにも、自分の腕だったものはその辺に転がつていた。

「た、助け……」

「……………」

命乞いをする間も無く、中年の男の首が刎ねられた。

それはまるで「ピタマリのよつて部屋の壁に跳ね返り、地面へバウンドする。

と、次の瞬間、部屋中が血で真っ赤に染まった。

返り血を浴びながら、部屋の中にぽつんと立っている男がいた。顔や全身を赤い包帯でぐるぐる巻きにして、唯一露出している目と口は焼けただれ、機能していること 자체が奇跡的であった。

男の目の赤い部屋を凝視していた。荒く呼吸を繰り返しながら、男は喉から搾り出したような掠れに掠れた声で呟いた。

「許”さ”ん”そ”……村”を”焼”い”た”連”中”……！」

男は振り返ると、ふりつきながらのひのひの場を去つて行つた。

## ラ・ロシェールにて 2（後書き）

とこうわけで、今回もオリキャラが出来ます。  
詳細は追々とこうことで。

## ブルギッシュの屋敷にて

ラ・ロショールから少し離れた場所に、とある領がある。そこは国からも既に忘れ去られたような場所であった。

以前ここを治めていた領主がとてもなく無能な人間で、内政の才能もまるで無く、遂には住む平民もいなくなってしまい、その領主が孤独の中で病死した後、そこは領とは名ばかりのただの荒地と化していた。

領主の死から暫く経つたある日、その領を貰い受けた者がいた。

その者はブルギッシュと言い、トリステイン王国の魔法研究所実験小隊の一員だった男であった。

元は下級貴族であったその男はそこを何年もかけて建て直し、遂には人がまともに住める程にまで復興していた。

次々と離れて行つた領民たちはその地に戻つて来て、そこは以前よりも栄えるようになつていた。

ブルギッシュはひたすら領の建て直しに心血を注いでいた。

やがて彼は領民からも愛される、立派な領主となつていたのだった。

「……それだけ聞けばなかなか出来た男に聞こえるがな」

下見に来たブルギッシュの屋敷の前をうろつきながらレイは言った。共に歩いているアーネスは忌々しそうに屋敷を睨み付ける。

「だからと書いて、村を滅ぼしたことなどが許されるわけじゃない……！」

「確かに。誰も罪を償うことなんて出来やしない。それが出来ると思つこと 자체が傲慢だ。罪は背負うしか無い」

「そして、それはいずれ裁かれなければならぬ」

アニエスは険しい顔で言った。

レイはただ無言で頷く。

こうして、屋敷の周りをうろつくこと約1時間。

明らかに不審者であったが、2人は気配を完全に消すことで他人に気付かれないようになっていた。

入り口の方まで来ると、通り過ぎる際に2人はそこから屋敷の中を覗き込んだ。

「……それにしてもおかしい。静か過ぎはしないか？」

アニエスは不思議に思つて、レイへと訊ねた。

領主の屋敷なのに、護衛の姿が見えないのだ。

これは事前に貰つた情報とも食い違つ。

「確かに、人の気配が全く無い」

レイも神経を研ぎ澄まし、中にいる人間の数を探ろうとしたが、それを全く感じることが出来なかつた。

この場合、考えられるのはレイに気配を探られないようなレベルの人間がいる可能性だが、いたとしてもそんなに数は多く無いであろうし、それ以外の人間の気配を感じられないのはやはりおかしい。レイは屋敷の門を押してみた。

すると、呆氣なく重そうな門が開いてしまつた。

「……何をやつてるんだ！？」

アニエスが慌てて言つと、レイは何も言わずに屋敷の中へ入つて行つた。

仕方なしにアニエスもレイの後に続く。

アニエスは確認するようにレイの背中へ向けて言った。

「今日はまだ下見だけだぞ?」

「……もしかしたら下見しなくても良くなってるかも知れない」

「?どういうことだ?」

「……アニエス、あれを見ろ」

レイが指差した方を見ると、そこには噴水があつた。

噴水の水はあるで上等なワインのように赤く染められている。

そして、その水面にはうつ伏せになつた男が浮かんでいた。

「!?!」「これは!?!?」

「……………」

レイはすぐに噴水まで近寄り、男を調べた。

男は肩から脇にかけてバツサリと斬られている。

仰向けにすると、男は苦悶の表情を浮かべていた。

「……お粗末なことだな」

レイは思わずそう呟いた。

レイが相手を殺す時は、余程実力が拮抗していない限りは、大体が一瞬で決まってしまう。

一瞬で決まるが故に、相手も苦しむ間も無く死ぬのである。

死体の表情から察するに、これだけ苦しみながら死んだということが、一瞬で相手の命を断てなかつたことを意味する。

わざとそうしたのか、これをやつた人物の技量の問題かはこの時点では分からないが、少なくともこれを行つた者の実力がそれ程高いものではないということをレイは感じた。

相手が完全に死んだことを確認しないのは、自らの命取りになるからである。

相手がメイジならば、死ぬ最後の瞬間になにか魔法を使われるかも知れない。

そうなれば、最悪相打ちになつてしまふ可能性だつてある。

実力がある者であれば、こんな殺し方はまずしない。

また、斬り口がざんばらなのを見るに、その者の使用している刃物は斬れ味があまりよくないのであらうことが推測された。

鋸びているか、もしくは剣ではなく斧などの類なのかも知れない。

「屋敷の中へ行くぞ」

「……………」

アニエスは無言で頷くと、レイの後へ続いて屋敷の中へと入った。

屋敷の中は外よりも酷い惨状であつた。

使用人らしき女性や少年、護衛らしき若い男たち、全員が無残に殺されていた。

至る所が血に塗れ、咽返りそうになるような臭気が辺りに満ちている。

血には慣れている筈のアニエスも流石に口元を押さえていた。

「皆殺し……か。慘たらしいな。流石にここまでやつてのけたのは見たことが無い」

「大丈夫か？」

「……ああ、大丈夫だ」

アニエスはレイに目配せする。

2人は屋敷の奥へとどんどん進んで行つた。  
やがて、不自然に扉が開いている部屋を発見し、すぐに中へ入つた。

「……」

中も相変わらず血に塗れていたが、それより目を引いたのは部屋の中央で倒れていた人物であった。

「ブル……ギッショ……！」

アニエスは恵々しそうにその名前を呟く。

ブルギッショだったその死体はだらしなく前のめりに倒れ込んでおり、首から上が無かつた。

それに近寄ろうとするレイの足に何かが当たった。

それは、死体の首から上の部分であつた。

レイはそれを躊躇無く持ち上げる。

「……先を越されたな」

「……私のこの手で奴を殺れなかつたは残念だが、致し方あるまい」

「問題は誰がこれをやつたか……だな」

「ああ、一体何者なのだろうか？」

屋敷内の様子から察するに、この惨劇を引き起こした人物はブルギッショに対して何かただならぬ思いを抱えていたことは想像に難くない。

それならば怨恨の線が疑われるが、ここ最近のブルギッショは荒地同然のこの土地を建て直した領主ということで一目を置かれていた。領内に住む者たちからの評判も悪くは無い。

表層的な面では彼に恨みを抱くような人物はいなかつたであろう。勿論、ここにいるアニエスみたいに過去の行いから恨まれていたとかそういう可能性が全く無いとは言わないし、彼に嫉妬した人間が引き起こした事件かも知れないので一概には言えないが。

「……足跡？」

レイは地面に血で作られた足跡があるのを発見した。  
これだけ夥しく血が流されているのだから、当然と言えば当然ではある。

レイはその足跡を追うこととした。

アニエスも無言でそれを追い掛ける。

足跡は屋敷の外へと続いていた。

「聞抜けな奴だ。足跡を残すなんて、まるでついて来いと言つていいようなものじゃないか」

アニエスは何時でも剣を抜けるように、柄に手を置きながら言った。  
レイはチラッとアニエスの方を見た。

「……もしくはそう言つてるのかもな。ついて来い」と

「何の為に？」

「あ、な」

それだけ言つと、再び無言で足跡を追い始めた。  
やがて、2人は薄暗い森の中へと入った。

足跡の血は土に吸収され、目に見えにくくなりながらも、その鼻をつく鉄の臭いがこの先にまだあの足跡が続いているということを証明していた。

目と鼻を頼りに足跡を追つこと数分、遂に足跡がそこで途切れてしまつた。

「……ここの靴を脱いだか、あるいは」

「ここの辺にいるか、といつことか」

2人は周囲を警戒する。

お互いの背を合わせ、共に剣の柄へと手を置き、すぐに抜ける体勢へと変わった。

卷之三

2人とも一言も発さず、ただ1、2回だけ目を合わせる。そして、神経を集中し、全ての音に耳を傾けた。時折、獣の唸り声のような音も耳に入つて来る。突如、奇妙な鳥の鳴き声が辺りに響いた。

次の瞬間、すぐ側の木から何かが落ちて来た。

— ! ! —

それが人だと気が付いた瞬間、レイとアーニエスは剣を抜いて構えた。両者共に実に素早く、無駄の無い動きであつた。

そいつは地面へ着地するなり、そのままこちらを睨み付けるように顔を上げ唸つた。

顔や全身を包帯でぐるぐるに巻いており、その包帯も返り血を浴びたせいか真っ赤に染まっている。

ルを連想させた。

そいつはこちらを睨み付けながら、左手に持った剣を2人へ向けた。剣はえらく錆び付いており、折れていないので不思議なくらいである。

アニメの汗が一筋、地面へ伝え落ちる。

すると、それを合図にするかのようにいつまアーニスへと襲い掛かつた。

「ぐうー？」

アーネスは素早く剣を構え、そいつの斬撃を受け止めると、そのまま弾いて空いた胴体部を狙って剣を放った。  
しかし、そいつはまるで獣のようにそれを後ろへ飛んで交わすと、不恰好なまま着地し、そのままこちらを睨み付ける。  
アーネスは眉を顰めて言った。

「……何だこいつは！？」

どうやら、こいつがお前の獲物を横取りした奴みたいだな」「こいつが……？」

ノルマニエラニヒヌカシニノモ

まるで獣のようなその立ち居振舞いは人とはとても思えない。意思の疎通が出来るかさえ怪しかつた。

「おい、貴様！！」

だがしかし、アーチスは問い合わせた。

「答える！ 何であの男を殺した！ ！」

そいつはアニメスの問い合わせにも、ただ唸るだけであつた。

「私はアニエス・ド・ミラン！！今は亡きダングルテール村の唯一の生き残りだ！！あのブルギッショという男は私の村を家族を全て焼き払つた者たちの仲間で、皆の敵だ！！貴様は何故奴を殺した！」

？」

「！？」

アニエスがそう言つと、そいつは突然驚いたようにアニエスの顔を凝視する。

暫くそうしていると、そいつは初めて声らしき声を出した。

「ア”ニ”エ”ス”……ア”ニ”ー”か”？」

「何だと！？」

そいつの言葉にアニエスは愕然とした様子であつた。

アニエスをじつと見ていたそいつは、突然身を翻してその場から走り去ろうとした。

アニエスが手を伸ばし、それを制止しようとする。

「待て……」

「……………！」

そいつは地面の土を一頃り掘むと、それを2人に向けて投げつけた。

アニエスは思わず顔を背ける。

レイは剣を振つてその土を払うと、その勢いのままそいつを追い掛けようと足を踏み出した。

その時、アニエスがレイを呼び止める。

「待つてくれ、レイ！？」

「……………！」

レイは素直に動きを止めた。

その隙にそいつはその場から去つて行つて見えなくなつてしまつた。レイはそれを見て取ると、素早く剣を仕舞い、アニメスへ向き直つた。

アニメスは目を見開き、口を開けたまま立ち尽くしていた。

「……何故止めた？」

「そんな……馬鹿な。有り得るわけがない。あいつは……あいつは

「……」

アニメスはレイの言葉が耳に入らず、ただうわ言のよひで繰り返した。

「あいつは……」

アーティアーティ

純朴そうな青年がこちらへ走つて来ながら、少女へと声を掛けた。右目に特徴的なホクロがあるのが印象的である。

「なあ」「アワイト？ そんなにあわてて、どうしたの？」

少女が訊ねると、ドワイトと呼ばれた青年は息を切らしながら答える。

「ハア、ハア……聞いたか？ウォンキー爺さんがまた腰痛めて寝込  
んだらしいぞ！」

「ええ!? おじいちゃんが!?」

ウォンキー爺さんは少女の家の隣に住む、少し気難しい老人であつた。

たが、実は不器用なだけだとでも優しく、少女に内緒でお小遣しをくれたりと、まるで本当の祖父のように少女を可愛がってくれたのであった。

トロイドとはれた青年は少女の手を引いて走り出した。

「アーティスト」

「アーニ、ウォンキー爺さんとのろへ見舞いに行くぞ！」

そう言いながらも少女は嬉しそうに、彼に手を引かれながら走つて

いた。

「ドワイト……」

「アニエス！』

「……」

レイの呼び掛けに、ようやく気が付いたアニエスは慌ててレイの方を振り返る。

「レイ……？」

「どうしたんだアニエス？先程からボーッとして」

「ボーッと……していたのか私は？」

「ああ、もし戻らなかつたら頬の一つでも叩こうと思つたくらいだ

「……手厳しいな。これでも私は女だぞ？」

アニエスは憂いを帯びた顔で言うと、先程襲つてきた人物が走り去つて行つた方を見つめていた。

「…………」

「……奴はお前の知り合いなのか？」

「……何故そう思う？」

「俺の耳が確かならお前は先程『ドワイト』と呟いていたが？」

「そうか……。私はそう呟いていたのか……」

アニエスは信じたくないといった表情で首を振つた。

「……私を『アニー』と呼ぶのは、両親以外ではただ1人しかいな  
い。だが、その人が……ドワイトが生きている筈が無いんだ」  
「生きている筈が無い……とは？」

「ドワイトは私の目の前で……」

アーネスの目の前がフラッシュバックする。

燃え盛る村、木材や人の焼け焦げた臭い。

耳に聞こえてくるのは人々の悲鳴と男たちの怒号。

肌で感じる熱に幼いアーネスは気絶してしまいそうであった。

「アニー！早く！」

「ドワイト！」

そんなアーネスの手を引き、一生懸命走っているのは純朴そうな青  
年であった。

「ドワイト！おとうさんとおかあさんが！」

「アニー！2人はもうダメだ！……せめて君だけでも！」

「ドワイト！」

必死で走る2人の前に何者かが立ちはだかった。

「待て！」  
「ぐつー？」

男は2人の行く手を遮ると、まるで独り言のよつにブツブツと何かを言い始めた。

「……我が名はブルギッシュ・デ・アブラー。二つ名は『種火のブルギッシュ』だ。急に名乗り上げたことを許して欲しい。これでも貴族なのでね。そしてこれも命令でね。恨んでくれるなよ」

即ち「一ノ門」の「門」は、その「門」を「吸う」、「呑む」ことである。

それを見て取ると、ドワイトは急に口び出した。

ドワイトはアーネスを突き飛ばすと、そのまま男に向かつて突進した。

「アーニ！君だけでも逃げろ！！」

卷之三

……ファイヤーボール！！

男の杖の先から火の玉が放たれ、ドワイトの体を包んだ。

ドワイトは耳をつんざくような悲鳴を上げると、その場に倒れ落ちた。

彼を包む火は、勢いそのままにどんどん燃え上がって行く。ドワイトは最後の力を振り絞り、今にも消えてしまいそうな声でアーチスの名前を呼んだ。

「ア……」

「イヤア アアアアアー！」

「……ドワイトは私の田の前で死んだ。焼け死んだ！あの男……ブルギッシュの手によつて……だから生きてる筈がないんだ」

アニメスはまるで自分に言い聞かせるように声を張り上げた。レイは落ち着かせるようにアニメスの肩を軽く叩いた。

「……取り敢えず落ち着け。冷静にならねば見えるものだつて見えなくなる」

「……すまんな、取り乱して」

アニメスはフフッと自嘲気味に笑つた。

「情け無いな……。奴が知り合いかも知れないと思つただけでこの有様とは……。自分はこんなにも弱かつたのかと改めて思い知つたよ。本当に嫌になる……」

「そう自分を卑下するな、アニメス」

「……分かつてる。分かつてるさ」

アニメスは咳くよつてかうづきつと、田を闊じて首を振つた。

「だが、今は……少しそつとしておいてくれないか？ほんの少しでいいんだ。ほんの少しで……」

「ああ、分かつた」

レイがそう答えると、アニエスはレイに背を向けた。暫くそうした後、アニエスは再びきりりとした表情で振り返った。

「……世話を掛けたな、レイ」

「大丈夫か？」

「何、問題無い。いつもの私だ」

そう言ってアニエスは胸を張ってみせる。

その様子は何処か無理しているようにも見えたが、レイは特に何も言及しなかった。

彼女に会つてまだ数刻しか経つていないが、それでも交わした会話やそこから時折垣間見える彼女の本質を知ることで、レイはアニエスをそこまで弱い人間では無いと信じていた。

それならば、わざわざ自分から何かを言つことも無いだろうとレイは思った。

すると、突然アニエスは大きな声を出した。

「奴を追うぞ！」

声高らかにそう宣言する。

「……奴の正体を見極める！奴は側に来た我々を突然攻撃した！そこから推測するに、奴は自分に近付く者を見境なしに襲う可能性が高い！最悪、罪もない者たちが奴に襲われ、その命を落とすかも知れない。奴は躊躇うことしない。それは屋敷の中にいた他の連中の惨状を見れば明らかだ。私の目的は確かに復讐だ。だが、復讐とは無関係な者まで無慈悲に殺すことは絶対にしない！奴の目的が私と同じかどうかは分からんが、奴は許されざることをした！私はそ

れを許すことは出来ん！だから奴を追う！」

アニメスの言葉を聞き、レイはフツと笑った。

「まるで王国の騎士みたいな台詞だな」

レイがそう言つと、アニメスはまるでいたずらっ子のよつこに笑つてみせた。

「昔好きだったんだよ。騎士じつこがな！」

そう言つてのけるアニメスのその屈託の無い笑顔はレイにとって、とても魅力的に映つた。

レイは再びフツと笑つた。

「それは随分とお転婆なことで」

「フン、私らしいだろ？」

「……では、可憐なる騎士殿。先へ進みましょうか？」

「ああ、私について来い！－レイ－」

そうして、2人はドワイトらしき人物が走り去つて行つた方角へと足を進めた。

森の奥の方は、今までよりも薄暗く、まるでそこだけ夜の闇に落ちたみたいであつた。

日の光さえ遮る木々の群れが人々の進入を拒む。

まるで森全体が生きているとさえ錯覚しそうであつた。

そんな森の中を2人は突き進んだ。

地面には奴の足跡が薄つすらと残つてゐる。

それを辿つていいくと、確かに人が通つた形跡が残つていた。

邪魔をする木々は薙ぎ払われ、まるで獸道の如く道が出来ていた。

「足跡が新しくなつて来たな。ということは奴に大分近付いて来たということか」

アーネスがそう言つと、レイは無言で頷いた。

2人して、何時でも剣を抜けるように構える。

先程の奇襲から考へるに、ドワイトらしき人物の戦い方は獸に近い。剣術や戦術などでは無く、ただ力のままに持つた武器を振るう。実にシンプルで、實に厄介な戦法である。

型にはまらない戦い方は、それなりの実力者にやられればかなりの脅威となる。

純粹な技量ではレイは勿論、アーネスよりも劣るであろうが、下手をすると思わぬ一撃を受ける可能性がある。

それが致命傷になつてしまえば、元も子もない。

達人が素人のまぐれで殺される。

それは決して珍しいことでは無い。

寧ろ、真に実力のある人間にとつて、読めない攻撃ほど恐ろしいものは無いのである。

2人は共に神経を研ぎ澄ませ、慎重に前へと進んだ。

少し先へ進んだ時点で、血の臭いを感じ取つた。

奴は確実に近くにいる。

先手を取られれば、奴のペースに持ち込まれてしまう。  
それだけは避けなければならない。

緊張が辺りを支配する。

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

まるで洞穴の向こうから聞こえるような声が辺りに響く。  
すると、そいつはまるでグールのように地面の中から現れた。  
そして、レイ目掛けて持っていた剣を力任せに振り下ろす。

「レイ……」  
「……………！」

レイは予期していたかのようだ、素早く剣を抜き、その斬撃を受け止めた。

そして、刃同士を擦り合わせたまま力で強引に剣を押し返すと、一気に間合いを詰めてそいつの持っている剣目掛けて素早く剣を振り下ろす。

錆び付いた剣はレイの斬撃で呆気なく真っ二つにへし折れた。

「ク”ウ”！？」

そいつは折れた剣を捨てるど、後ろへ飛びながら懷から錆びたナイフを取り出し、レイへと投げつけた。

レイは紙一重でそれを交わし、再びそいつとの間合いで詰め、肩からそいつへ突進した。

そして、そのまま地面へ押さえ付ける。

「ク”ア”ア”ア”ア”！力”ア”ア”ア”ア”ア”！」

そいつは激しく暴れて抵抗した。

レイはそいつの首に自らの左腕を当てるど、そのまま地面へ向けぐ

つと力を入れた。

「……………！」

すると、すぐにそいつは大人しくなり、手足を地面へ投げ出す。そして、そのまま動かなくなつた。

それを確認すると、レイは慎重に立ち上がりそいつから離れていた。

アニメスがレイへ訊ねる。

「…………殺したのか？」

「いや、失神させただけだ。しかし、地面の中に隠れていたとは……まるでグールだな」

「ドワイト……」

アニメスは失神したそいつの近くに寄ると、顔をまじまじと見つめる。そして確信した。

「…………やはり、ここにはドワイトだ。間違いない」

「そりなのかな？」

「右目の中のホクロ……焼けただれても分かる」

そう言つと、アニメスはそいつの顔を手で撫でる。

「ドワイト……何故こんな……」

田の前のドワイトは、全身を包帯で包み、僅かに露出した田と口さえ焼けただれ、生きていることさえ奇跡的に見えた。唸るような声しか出せないのは、喉も舌も焼かれてしまつたからな

のだろう。

あの後、どうやって助かったのか。

そして、どうして今こうして剣を持っているのか。

謎は深まるばかりであった。

アニメスはレイへと向き直った。

「すまないな」

「ん？」

「こいつを……ドワイトを殺さないでくれて」

「……あの時はああするしか無かつた。……『気にするな』

「嘘が下手だな、お前は」

アニメスはそう言つと、少しだけ安堵したように笑つてみせた。

レイも口角を僅かに緩める。

「ア――――――――」

その時、突如辺りに鳥の鳴き声が響いた。

思わず驚いたアニメスが周囲を見回すと、木の上に一羽のカラスが止まっていた。

「……何だ、カラスか。驚かせるな、全く」

「…………」

レイはカラスと睨み合つと、すぐに懷に手を入れた。すると、カラスは翼を広げ、その場から飛び去ってしまった。レイはチッと舌打ちすると、カラスの飛んで行つた方を目で追い掛

ける。

(あのカラス……間違いない。教団の奴か!)

レイは投げナイフから手を離し、チラリとドワイトの方へ目をやつた。

(このドワイトという男……無関係とは思えないな)

レイは再びカラスの飛んで行つた方を見つめると、懶々しそうに空を睨み付けた。

## ラ・ロシユール周辺の森にて 1（後書き）

ドワイトはオリジナルキャラです。

村の生き残りがアーネストだけじゃなかつたら…と妄想して出来ました。

ちなみにレイが彼を失神させたのはギロチンチョークみたいなのを想像して下さい。

そして、教団。

これは後々出て来る（というか時系列的には初期の方）話全体の根幹に関わらせようかなあとか思つてゐるオリジナル設定です。

先刻の闘争から、どのくらいの時を経たのか。空も見えぬ、光も射さぬこの場所では、それを正確に知る術は無かつた。

相も変わらず、周囲は闇夜のように暗い。

レイとアニエスは気を失ったドワイトを近くの木に縛りつけると、ただじつとその場で彼が目を覚ますのを待っていた。

その間、2人は何も言葉を交わさなかつた。

アニエスは自分以外の村の生き残りの存在に思うところがあつたのか、終始穏やかではない表情でドワイトを見つめ、レイは先程のカラスを見てから、険しい表情をしたまま無言で宙を見つめている。事情を知る者ならば、1秒たりともその場にいたくなる程のただならぬ空氣が辺りに蔓延していた。

……………ピクッ

その時、重苦しい雰囲気を断ち切るかのよつてドワイトの肩が僅かに痙攣する。

それは覚醒の合図であつた。

レイとアニエスは共に視線を同じ方向へ定め、ドワイトの動向に注目する。

彼の閉じられていた目がゆっくりと開いて行く。

「……ン” “ン” ?」

ドワイトの口から声が漏れる。

田を覚ましてからの第一声には人間らしい戸惑いが混じつているよ

うに感じられた。

彼はすぐに自分が置かれている状況に気が付き、縛られているのも構わず暴れだした。

獰猛な獸のように歯を剥き出しにし、辺り構わず喚き散らす。

しかし、さへく絵柄が絵はそに簡単は外せるものではなく、トを拘束し続ける。

書くその間にじては、叫び涙がたかが荒く息を叫きながら、  
ワイトはがつくりとうな垂れた。

その時を見計らつて、アーネスが声を掛ける。

「アーティスト」

「ドワイト！」 ハ „ ア „ ノ „ ブ „ ノ „ ブ „ ノ „ ブ „

ハ  
ア  
ハ  
ア  
お  
ま  
え  
は  
ア  
—  
—  
—  
か  
?

ドワイトはアニメの顔を見ずに書った。

「ああ！－私だ！－ア－エスだ！－」

アーニスは思わず興奮しながら答える。  
こんな状況でも無ければ、飛びついて抱擁の1つでもしたいところ  
であろう。

り果て過ぎていた。

つた。

「どひして……どひしてこんな……ドワイト」

「……………」

ドワイトはまるでアニメスの顔を見ないようにしていて、アーヴィングのかるいようにして立つた。一切顔を上げようとはしなかった。

アニメスも何か言いたそうにしているが、言葉に出来ないといった感じでドワイトを見下ろすだけである。その様子を後ろから見ていたレイはハアと息を吐いて前へ出ると、ドワイトの前に立つた。

レイの存在に気が付くなり、ドワイトはすぐには顔を上げる。

「あ” も” も” !—ア” ニ” —” カ” ら” は” な” れ” ろ” —!」

そう声を張り上げると、ドワイトはぎこちなく歯を食って縛りながらレイを敵のように睨み付ける。

レイはドワイトのこの態度に思わず肩をすくめると、アニメスに目配せした。

レイの視線の意味を瞬時に汲み取ったアニメスはドワイトに落ち着いた声色で話し掛ける。

「……ドワイト、レイは敵じゃない。こいつは私のパートナーみたいなものだ」

「……今だけ、な」

「だから、そう敵視しないでくれないか?」

アニメスがそつまつと、ドワイトは納得いかないといつぱんに首を激しく振った。

しかし、次にレイを見た時は、先程のよつてレイを睨み付けるのを

止めていた。

レイはアニメスに「すまなかつたな」と田代会図を送った後、再びドワイトと向き直った。

「……色々言いたいこともあるんだらうが、少しこちらの話をさせてもうつてもいいか？あんた……ドワイトと言つたか？これに見覚えは無いか？」

レイは懐から錆びた十字架のよつなものを取り出した。十字架の真ん中に髑髏が張り付けにされているような奇妙なデザインである。

「…………」

それを見るなり、明らかにドワイトの態度が変わった。その十字架からしきりと目を逸らしている。ドワイトの変化にレイは確信を持つ。

「やはり知つてゐるな？『教団』のことをして…」「ちょ、ちょっと待つてくれ、レイ」

アニメスが慌てて話に割つて入つて来る。

「何だその十字架は？それに『教団』つて何だ？」

「詳しく述べればお前も巻き込まれる」

「お前の心遣いは分かつた！だが、ドワイトが関係しているなら、私が何も知らないというわけにはいかないだろー！」

「レイー……」

アーネスが再度問い合わせると、レイは苦渋の表情で彼女へと向き直った。

「……確かにこの男がお前の知り合いなら、お前も無関係ではない、か」

レイは覚悟を決める。

「いいか、この話は決して口外するな。知ってる素振りすらも見せない方がいい。下手をすればお前も奴らに目を付けられるかも知れないからな」

「ああ、分かった」

「……少し前になるか、俺は旅の中でロバ・アル・カリイエに寄つたことがあった」

「ロバ・アル・カリイエだと！？そんなの旅の途中で寄るような場所じゃないだろ！？」

「まあ、確かに気軽に行ける場所では無いが、それでも行き来出来ない場所では無いだろ？」

「……お前はただ者では無いとは思つていたが、本当にとんでもない奴だつたんだな。おっと、話を逸らしてすまなかつた。続きを話してくれ」

「……ロバ・アル・カリイエのある街に立ち寄つた時のことだ。そこではとある新興宗教が盛んでな。新興宗教とは言つても、開かれたのは20年も前のことらしいが……街の住人の殆どがその信者と言つても過言じやなかつた」

「新興宗教……か」

アーネスはその言葉を聞いて、微妙な表情になる。

「……それがもしも」ちら側の話だったり、とつくと上から弾圧さ

れてるな。その新興宗教とやらの繁栄も、そいつた支配の行き届かない土地だからこそその事象と言えるな

「ああ、それでその開祖がダリウスとかいう男なのだが……」

嫌なことを思い出したかのように苦虫を噛み潰した表情をするレイを見て、アニメスは首を捻つた。

「どうかしたのか？」

「……ああ、すまんな。この男に関してはあまり思い出したくなくてな。つい、な」

「大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。……で、そのダリウスという男だが、街の住人……というか奴の信者にはとても慕われていた。信者たちは奴を尊敬し、そして愛していたよ。奴の言うことなら何でも聞くくらいにな。恐ろしいのは奴が、それ以前はただのメイジだったということだ。そんな男がそこまで成り上がったんだ。とにかくただ者では無い。そして、奴は街に『教団』を作り上げた」

「『教団』……」

アニメスはちらりとドワイトの方を見ると、その言葉を口の中で噛み締めた。

「『教団』は表向きはただの慈善団体のようなものだ。街に花を植えるだの、飢えた者にパンを与えるだのな。まあ、こじらじや全く見られない光景ではあるが」

「表向きってことは当然……」

「そう、裏の顔もある。『教団』は自分たちに従わない者や自分たちの不利益になる者を秘密裏に始末している。……そんな噂が一部では囁かれていた。とは言え、街には信者では無い者もいたし、旅人の往来も多い街だつたから、それもあくまで噂の域を出なかつた」

「だが、その顔から察するに噂だけ……ということは無さそうだな」「ああ、その通りだ。だが、俺がそれを知ったのは奴に……ダリウスに会つてからだつた」

「会つたのか？その開祖つて人物に？」

「会つた、と言つよりも会わされたと言つた方が正しいかも知れないな。奴は俺に色々と自分の理想について語つた。そしてその後、俺にこう言つた。『私の元でこの教えを広めて行かないか？』とな

「……お前は当然、そんな申し出を受けることはないだろうな」

アニメスがそう言つと、レイは無言で頷いた。

「俺は縛られるのは好きじやないし、基本的には裸一貫でいいからな。そんな教えを広めるなんて大義名分を持つて旅をしたくは無かつた。だから、その場で断つてやつた。だが、問題はその後だ」「……どうと？」

「奴はすぐに本性を現した。俺と別れてからそんなに時間も経たない内に、奴は刺客を放ち、俺を暗殺しようとした」

「……それはまた急な話だな」

「ああ、あまりに急過ぎて、逆に奴を陥れたい誰かの仕業か？と裏読みしたくらいだ。信者たちに囲まれ、身動きが取れなくなつてた俺は、その時たまたま知り合つた旅芸人一座の人間に助けられ、街の中を脱出すことが出来た」

「なあ、何でお前は狙われたんだ？いくら自分たちに従わない者を殺すと言つても、あまりに大事過ぎやしないか？それに奴らに従わない人も街にはいたんだろ？……いち旅人のお前が何で殺されそうになつたんだ？」

「……悪いがその理由を話すことは出来ない。お前まで巻き添えにしかねないからな」

「……どうやら軽い気持ちで聞いてはいけない理由があるらしいな？」

「ああ、そうだ」

「……分かった。理由は聞かない。私としても復讐という目的があるし、そちらを優先したいからな」

「そうしてくれるとこちらも余計な気を回さなくていいから助かる。……以来、俺は奴ら『教団』の連中に付け狙われている」

レイはそこまで話すと、懐から先程の鎧びた十字架を取り出した。

「これはその時俺を殺そとした暗殺者から奪つたものだ。奴ら『教団』のシンボルらしい」

「……そう言えばその十字架。先程は唐突だったから知らないものだと思っていたが、こうしてお前から話を聞き、落ち着いて見ると何処かで見たことがあるような気がする」

「『教団』の教えは時々、ここトリスティンやガリア何かにも来たりしているからな。何かの拍子に見たのかも知れん。最も、その大半はロマリア辺りが揉み消してるのは思つがな」

実は暗殺者も一緒にこっちへ来ているのだがな。トレイは心の中で付け加えた。

アニメスは今までのレイの話を頭の中でまとめ、納得したよつて頷く。

「『教団』については大体分かった。問題はそれとドワイトがどう関係しているか、だ」

「このドワイトとかいう男はこの十字架を見て動搖した。奴らと関係がある可能性が高い」

「……それは少しこじ付け過ぎじゃないか？『教団』の人間が時々こちらへ来ているなら、ドワイトもそれで知ったのかも知れないし、関係があるとまで言い切るのは無理が無いか？」

「もう一つ根拠がある。とは言つても、もうこの場にはいないがな」

「それは何だ？」

「カラスだ」

「カラス？」

「先程、ここから飛び去ったカラスが1羽いただろ？」

「ああ、急に鳴き出したから流石の私も少し肝を冷やした」

「……思い出したんだ。あのカラスが『教団』の中に入る奴の使い魔だつてことをな」

「それは確かかなのか？そもそもそんなカラスの見分けなんかつかのか？」

「間違いない。そいつが『丁寧に自慢していた。『オニキスのよう』に美しき我が使い魔』とな」

「だとしても……」

「……も”う”い”い”、ア”ニ”ー”」

アニメスがレイに反論しようとした時、ドワイトが確かにそう言ったのを2人は聞いた。

アニメスはドワイトへ向き直る。

「ドワイト！」

「ア”ニ”ー”、そ”の”男”的”言”う”通”り”た”。俺”は  
”連”中”を”知”つ”て”い”る”。い”や”、奴”ら”と”つ  
”る”ん”で”い”る”と”言”つ”て”も”い”い”」

ここまで長い言葉をこの男が喋るのは初めてであった。

アニメスも思わず押し黙ってしまう。

ドワイトは2人を見つめると、再びその口を重々しく開いた。

「話”し”て”や”る”……連”中”の”こ”と”も”、そ”し”  
て”俺”の”こ”と”も”」

ラ・ロシユール周辺の森にて 2（後書き）

教団との出合いの話はまた追々…（またか！）  
次話では執筆の手間を省くといつ意味でもドワイトの台詞の一部に  
「 ”」を付けずにやりますのでじ了承下さい。

今から10数年前。

ブルギッショと名乗った男から炎の魔法を受けた俺は全身を焼かれ、既に死んでいてもおかしくない状況だった。

だが、神の奇跡か悪魔の拷問か、俺は辛うじて息を繋いでいた。村が焼き尽くされ、生き残った者たちさえもが次々と殺されていく様を、俺はかすかな意識の中で見ていることしか出来なかつた。奴らは破壊の限りをつくすと、ようやく満足したのか村を去つて行つた。

そうして、後に残つたのは炭クズと死体の山だつた。

俺は動くことすら出来ず、気を失つては、激痛で目覚め、また氣を失う。

この繰り返しだつた。

全身を襲う激痛に気が狂いそうになりながら死を迎えるのを待つていた。

この時ばかりは俺は早く死にたいと願つていた。

それくらい存在していること自体が辛かつた。

肉体的にも精神的にも。

そうして何時間経つたかは分からぬ。

何度もかの気絶から目を覚ますと、村に1人の男が来ていた。

男は黒いフードを被り、ブツブツと何かを咳きながら村の中を散策しているようだつた。

男は俺を発見するなり、すぐに駆け寄つて來た。

そして、懐から取り出した薬を飲ませてくれた。

痛む喉で無理に薬を飲み込むと、途端に頭がボーッとして、体が宙

に浮いたみたいに軽くなつた。

気持ち良くなつて、全身の痛みも嘘のように治まつていた。  
まるで天国でも行つてしまつたみたいだつたよ。

何か特別製の薬らしく、傷口に効果はないものの痛みを最大限に和らげてくれるらしい。

痛みが消え、安堵した俺を確認すると男は自らをザッパスと名乗つた。

ロバ・アル・カリイ工からやつて来た修道士らしく、自分たちの教えを広めに来ていたらしい。

先程の散策は、死んで行つた村の人の為に黙祷を捧げていたのだと俺に言つた。

俺は治療の為、体を浮かす魔法をかけられた後、彼に何処かへ連れて行かれた。

どうやらそこは、彼らの教えを普及させようとこちらへ来た修道士たちの隠れ家らしい。

中には他にも数名、似たような格好の者がいた。

そこで俺は治療を受けたが、完全に回復するのは不可能だと言われた。

俺はその言葉で悲嘆にくれたが、体を動かすことなら出来るかも知れないと言われ、それに賭けることにした。

定期的に例の薬を貰つて痛みを和らげながら俺は何ヶ月もベッドの上で過ごした。

そうしてようやく立つて歩くことが出来るようになったのは村が襲われてから1年以上も経つてからだ。

これでも恐らく奇跡的な出来事なんだろうな。

俺はあの時、既に死んでいたも同然の状態だったのだから。

自分の体のことがある程度終わつたら、俺の胸中は奴らへの復讐で

いっぱいになっていた。

毎夜見る夢は村が襲われた時のものだった。

その時その時で細部は異なっていたが、大筋は大体同じ。夢の中じゃアニーは何度も殺されていた。

俺はその度にまともな声も出ないこの喉から絶叫を吐き出していた。

夢を見る度に俺は考えていた。

どうしてこんなに同じ夢を繰り返すのか。  
どうして俺だけが生き残ってしまったのか。

そうして、一つの結論へと至った。

俺が生き残ったのは、奴ら……村を襲った連中に復讐する為。何度も同じ夢を見るのは、その復讐を忘れさせない為だとな。

ある日、俺はザッパスへその話を打ち明けた。  
彼は反対すると思つた。

彼らの教えに背くものだと思つたからな。

それでも打ち明けたのは、俺の覚悟を誰かに聞いて貰いたかったからだ。

例え反対されても、俺は復讐を成し遂げる。

志半ばに倒れたとしても、最後の一秒まで奴らへ刃を突き立てるこ  
とを諦めないとな。

ところが、ザッパスは俺の話を聞いてこいつ言ったのだ。  
「手伝おつ」と。

俺はキヨトンとした。

あの時の俺はきっと間抜けな顔をしていたに違いない。  
まあ、もっともその時から俺は全身包帯姿で、そんな表情は他の奴  
らからも見られなかつたと思うがな。

ザッパスは俺の復讐に協力してくれると約束した。

俺は彼に聞いた。

「人を殺めるのはあなたたちの神の教えに背くのではないか？」と。

「そうしたらザッパスはこう言った。

「人を殺すような者はこの地上のあらゆる存在よりも下劣な存在。寧ろ殺すことこそがその者に対する祝福なのだ」と。

俺は最高だと思ったね。

人を殺すことを下劣と言いながら、人を殺した者は殺すべきだと。矛盾しているが、何て素敵な神様だとその時の俺は思った。

ああ、今も思っているがね。

始祖ブリミル？ あんなのはダメだ。

綺麗事じゃあ、誰も救えないといふことは俺が身を以つて知ったからな。

ザッパスはとても協力的だった。

俺みたいな平民に剣を買いたえてくれ、更に魔法に関する知識まで教えてくれたからな。

もつとも、魔法についてはよくは分からなかつたが。

体は万全ではなかつた。

立つて歩けるようになつたとは言え、傷は完治していないのだから当たり前だ。

少しの運動で体は激痛を訴えた。

下手すれば、ちょっと走つただけで2日は寝込む羽目になるくらいに俺の体は弱り果てていた。

そんな時、ザッパスは俺にあの薬を与えてくれた。

あの薬さえあればどんなに体中が悲鳴を上げようと、俺は通常通り

……いや、通常以上に動くことが出来る。

俺はいつしか薬に依存していた。

それでも、ザッパスは嫌な顔一つせずに俺へ薬を与えてくれた。

神の使いとは彼らのことと言つただと俺は知ったよ。

やがて、俺は一国の兵士並みには剣を使えるようになつた。  
だが、それだけじゃメイジ相手には心細い。  
相手は極悪非道なメイジなのだから、それだけじゃ勝てない。  
いや、殺せない。

そんな時、ザッパスは俺に十字架をくれた。

何でも、彼らが仕える『教団』のシンボルらしい。

マジックアイテムもあるらしく、これを持つていると魔法のダメージを抑えてくれるそうだ。

彼らの神の祝福を受けた十字架だから大事にしようと俺は言われた。

俺は喜んだ。

ようやく彼らと本当の意味で仲間になれたと思つたからな。

そうして、俺は奴らへの復讐を開始した。

だが、いち平民の俺が仮にも貴族である連中の居所を掴むなんて、正に雲を掴むような話だった。

王国に忍び込んで、奴らの名簿でも奪つか？

いや、俺は“旋風のトラッシュ”でも、今まで言つ“土くれのフーケ”でも無いからそれは無理だ。

そもそも、王国に奴らの名簿があること自体が確定的なことでは無かつたからな。

仕方なく、自分の足で探すこととした。

だが、この見てくれじや街の中も堂々と歩けない。

人目を出来得る限り避けなきゃならない。

正に日陰者だったよ。

おかげで人に話を聞くことすら出来ない。

ザッパスがいなければ、俺は生きてることさえ難しかつただろう。

彼は独自に調べてくれると約束してくれた。  
本当に彼には感謝してもしきりないくらいだ。

それから10年以上、進展の無いまま時は流れた。  
所詮、いち平民じゃ……しかもこんな見てくれじゃ連中の中のただの1人さえ知ることも出来ないということだ。  
現実の高い高い壁にぶち当たり、俺は途方に暮れていたよ。  
そんなある日、俺は不意にブルギッシュ・デ・アブラーという名前を思い出した。

それは俺を焼いた奴の名前だった。  
何でそんな大事なことを忘れていたのか、俺には分からなかつた。  
年々物忘れが酷くなつて来ていることと関係があるのだろうか?と  
俺は思つたが、そんなことはどうでもいい。

物忘れにしても、思い出そうとすれば思い出すことは出来るのだから特に気にはしていなかつたしな。

俺は思い出した名前をザッパスに告げた。

そうしたら、彼はすぐにその男を探し出した。  
奴は……ブルギッシュ・デ・アブラーは何時の間にか何処かの領主になつていた。

村を焼き、皆を殺した極悪人が、まるで聖人君子のよつて素晴らしい領主様と称えられているんだ。

俺は激しい怒りを覚えた。

それは、俺が復讐を誓つたあの頃と同じような……久しく忘れていた感情だつた。

ザッパスは言った。

「長かつたですが、ようやくその時が来ました」と。  
俺も頷いた。

彼は俺にあの薬を再び与えてくれた。

今度はより強力な特別製で、活力が漲るんだ。

有難くそれを受け取ると、俺は躊躇わざにそれを飲み干した。

そして、素人手入れが祟つて鎧び付いちまつた剣を手に取つて無我夢中で飛び出していた。

気が付いた時には、奴が無様な姿で俺に命乞いをしていた。

俺は奴の命乞いなんぞに耳を貸す気は毛頭無かつた。

奴らだつてそうだつたんだ、俺が聞いてやる義理も糞もあつたもんじゃないからな。

俺は奴の首を刎ねてやつたよ。

鎧び付いた剣でもあんなに人の首は綺麗に飛ばせるんだな。

俺は歡喜と興奮に打ち震えていた。

……だが、それからはよく覚えていない。

再び気が付いた時には、アニー……お前と剣を交えていた。

俺はお前を殺そうとしていた。

本氣で。

俺は怖くなつてその場から逃げた。

とにかく走つた。

体中の痛みさえ気にならないくらいに。

だが、痛みはしつこく俺の限界を知らせて来た。やがて動けなくなつた俺は、地面の上でみつともなく倒れ込んで動けなくなつていた。

このままだと、俺は追つて来たアニーたちに殺される。

それは嫌だ。

殺されるにしても、誤解されたままは嫌だ。

そう思つた時、彼に予備として貰つたあの薬の存在に気が付いた。

俺はすぐにそれを飲み、また走り出した。

「……そしして、今ここてお前にたちと話

ドワイトの長い話が終わる。

声を出すのが辛いのか、たどたどしい喋りで必要以上に時間を掛け  
ていたが、レイもアニエスも彼の言葉を一言一句逃さぬよう、真剣  
に聞き耳を立てていた。

話を終えたドワイトは、疲れたのか再びぐつたりと頃垂れていた。  
アニエスは無言で彼の元へ行くと、縛っている縄を解こうとした。  
レイは冷静にそれを止めようとする。

「アニエス、縄を解くのはまだ早い。2度も襲われたことを忘れた  
のか?」

「しかし、今のドワイトに敵意は無い!」

「そいつの言葉を思い出せ、奴はいつも言った。『気が付いたらお前  
を殺そうとしていた』と」

「……」

「……頭は冷えたか?」

「すまない……。フツ、やはり私はダメだな。知り合いで……それも  
同じ村の者だと思つと、つい警戒が緩んでしまう。普段ならこんな  
ミスを犯そうとはしないんだがな」

アニエスは自嘲氣味にそう言つて、ドワイトから離れた。

「……しかし、どうこうことだ? 今のドワイトには確かに敵意は無  
い。それに先程の時点で自分を追つて居るのが我々だということも  
分かつて居た筈だ。なら、あんな奇襲みたいなことをするのにおか  
しい」

「奴が服用したという薬が怪しいな」

「薬……特別製とか言つて居たアレか?」

「ああ、どうも奴が記憶を混濁せている」と奴が服用している薬には何か関係があるみたいだ」

レイはドワイトに近寄った。

ドワイトは相変わらずレイには警戒心をあらわしていた。

「……何”た”？」

「先程話の中から出て来た薬は今持つていいか？」

「……予”備”で”1”つ”」

「それをこいつに渡してくれないか？」

「……」

ドワイトは無言で視線を自身の腰の辺りこむ。そこには、濃い紫色の何かが入った小瓶が見えた。レイはそれをドワイトの腰から取り上げ、蓋を開ける。そして、小瓶の中身に鼻を近付けた。

「…………」

レイは思わず咳き込み、小瓶を顔から遠ざけた。アーノスが何事かと声を掛ける。

「どうしたー？」

「これは……」

レイはアーノスの方を振り返る。

「これは禁制の麻薬だ。ロバ・アル・カリイ工製のな

「麻薬！？」

「服用すれば、脳が破壊され健忘症に陥る……なるほどな、これで

奴の行動に納得がいった

「そんなものが……」

「（）いらっしゃる手に入らないものだからな。ロバ・アル・カリイーでも公認されているわけではないが、平民でも服用している者がいる。俺の知り合いもこれを持つていたしな。少量ならそんなすぐ影響が出るわけでも無いらしいが、これだけ純度の高いものを多量に摂取すれば自我が保てなくなつても不思議ではない」

「ドワイト……」

アーネスはドワイトの名を呟くと、そのまま絶句する。

ドワイトはレイの言葉を信じたくないといった感じで頭を振つていた。

「そ”ん”な”筈”は”無”い”！そ”ん”な”……”

レイはドワイトに訊ねた。

「そのザッパスという男は今何処にいる？さつきの話から察するに、お前は知つてゐる筈だ」

「……そ”れ”は”言”え”ん”。俺”は”恩”人”は”売”ら”な”い”」

「例の隠れ家とかいう所か？」

「言”え”な”い”と”言”つ”て”い”る”！-”

「そうなんだな？」

「く”と”い”！」

歯を剥き出したしながらドワイトはレイを睨み付けた。

レイもじつとドワイトの顔を見つめた。

お互に、無言のまま見つめ合つていると、突然ドワイトが咳き込んだ。

「ゴフツ、ゴフツ、ゴフツ、う”つ”！」

ドワイトは思わず顔を下に向けると、地面へ大量の血を吐いた。  
それを見て、アニエスが慌てて駆け寄った。

「ドワイト！！」

「ゴフツ、ゴフツ、来”る”な”、ア”ニ”ー”……」

ドワイトはより一層苦しそうな声で言った。  
そんなドワイトを見てレイは目を瞑り、首を振った。

「……あんた、そのザッパスといつ男にいつに使われているだけだぞ」

「何”を”ー”つ”つ”、ゴフツ、ゴフツ」

「あんた、さつきこいつ言つてたな？『薬に依存している』と。確かにそれは麻薬だから依存性が高い。その効用で体の痛み程度は簡単に忘れられるだろう。だが、その代わりに薬はあんたの肉体と精神を本当の意味で破壊する。あんな純度の高いものを飲めば尚更だ。  
それでもいいのか？」

「う”う”つ”、ゴフツ、ゴフツ」

「そんな危険な薬と知りながらも『え続けたのは誰だ？そのザッパスつて男だろ？そんなものを平氣で『えるような奴をまだ庇う氣か？』？」

「ゴフツ、ゴフツ」

「あんたは10数年前に守つたアニエスを自分の手で殺す氣か？」  
「ー”ア”ー”ー”……」

その名を聞き、ドワイトは思わずアニエスの顔を見た。  
アニエスは心配そうな顔でドワイトを見ている。

彼女の顔を暫く見つめるドワイトの脳裏には途切れ途切れながらも過去の記憶が浮かんでくる。

すると、観念したようにドワイトは目を閉じた。

「……こ”的先を暫く行くと、傷の入った木か何本か立つている場所がある。……それを行つていけるは彼らの隠れ家に行ける。あまり目立たない傷たから一目ては気付かないたろうか、注意して見て見れは分かる」「そうか、分かった」

「勘違いする俺はアニーとの思い出を守りたい……それだけだ」

レイはいつものようにフツと笑つて見せると、ドワイトを縛る縄をナイフで切斷する。

縄は地面に落ち、ドワイトの拘束が解かれる。

ドワイトはよろめきながらも、自分が縛り付けられていた木を支えに立ち上がつた。

そして、レイを見る。

「……いいのか？お前を後ろから襲うか」も知れんそ？」

「今のお前じや俺を殺せない。アニエスもな」

「そうか……」

ドワイトは弱々しく笑うと、木に体重を預けて寄りかかる。側には相変わらず心配そうな顔をしたアニエスがドワイトの体を支えている。

レイはドワイトに背を向けると、先程教えられた場所へ向かつて歩いている。

ドワイトは弱々しく笑うと、木に体重を預けて寄りかかる。側には相変わらず心配そうな顔をしたアニエスがドワイトの体を支えている。

レイはドワイトに背を向けると、先程教えられた場所へ向かつて歩

「うとうかる。

すると、アニエスがレイの背中へ向けて言った。

「……すまん、私はここでドワイトを見ている。レイ、お前とは一緒に行けん」

「……それもいいだらう。そもそも奴に会いに行くのは俺の勝手みたいなものだ。お前が無理について来る必要も無い」「すまんな。そう言ってくれると助かる」

「ア”ニ”ー”……」

ドワイトはアニエスの頬を撫でた。

「……す”ま”ん”な”、せ”つ”か”く”的”再会か”こ”ん”な”ん”て”」

「どんな再会だつていいさ。死んだものと思っていた知り合いとまた出会ったんだ。これ以上は何も望まん」

「ア”ニ”ー”、お”前”は”変”わ”ら”な”い”な”」

そう言つと、ドワイトは今までにない程優しい笑顔を浮かべた。それを見て、アニエスも微笑む。

「ドワイトも変わつてないぞ」

郷愁に暮れる2人を背に、レイは何も言わずにその場を去つて行つた。

ドワイトに教えられた通りに歩くと、ようやく人為的につけられたであろう傷のある木を見つける。

それ程大きい傷では無く、確かに一目見ただけでは気付かないし、これが目印であるとも思えない。

他にも似たような傷のある木を確認すると、その木を辿って行く。すると、やがて一軒のログハウスを発見する。

森の奥にひつそりと佇んでおり、正に隠れ家という言葉がぴったりであった。

レイは木々の中から、隠れ家の周辺に人がいなか神経を研ぎ澄まして気を探つてみる。

すると、誰かが一人隠れ家の中にいることが分かった。

更に神経を研ぎ澄ましてみると、この周辺にも他に人が潜んでいる様子は無いようだ。

レイは警戒しながら隠れ家へと近付き、入り口の前に立つ。そして、剣を何時でも抜けるように構えながら、入り口の扉を開き中へ入った。

すると、中には黒いローブを被つた男が、まるでこちらを待ち構えていたかのように立っていた。

「……よく来ましたね。お待ちしておりましたよレイさん

「お前がザッパスか？」

「ええ、その通りです。……立ち話も何ですし、中へどうぞ

そう言つとザッパスは頭に被つた黒いローブを取つた。

中からは白髪混じりの中年の男が現れる。

一見すると誠実そうな聖職者らしい顔つきである。

ザッパスはレイを中へ招き入れた。

レイは何時でも攻撃態勢に移れるようにしながら、彼の招待を受けることにした。

ザッパスへ連れられ、中を見ると隠れ家内は見た目通り狭く、玄関

らしき所を抜けるとすぐリビングへと出で、近くに寝室らしき部屋が確認出来た。

テーブルの上にはロバ・アル・カリイエでよく飲まれている緑茶が2つ置かれていた。

「あなたが来ると思つて用意したのですが……冷めてしまいましたね」

「…………」

レイは無言でザッパスの一撃一動を観察している。

何かこちらへ危害を加えようと動いた瞬間に、レイの剣がザッパスの首を刎ねられるようにレイは身構えていた。

「…………そう怖い顔をしないで下さい。私は杖を持つていませんよ?」

ザッパスは両手をレイへ見せて、自分が無力であることをアピールした。

しかし、レイはそれでも油断はせずにザッパスを観察し続ける。

ザッパスはやれやれといった感じで椅子に座った。

そして、レイにも座るように手で促す。

レイは警戒を怠らずに席へと着いた。

ザッパスは冷めた緑茶を一口啜る。

「…………やはり、このお茶は美味しいですね。冷めてもその美味しいは失われない」

「俺はお前とお茶について話に来たんじゃない。いいから、本題へ入れ」

「これは手厳しい…………」

ザッパスはそう言つと、人当たりのいい顔で笑つてみせる。

「彼のことを聞きたいのでしょ？」

「それも理由の一つだ」

「いいでしょ。教えてさしあげます。『求める者には『与えよ』。

これは我々の神のお言葉です。その相手が例え敵であつても」

「それはじ立派な言葉だな」

レイは不愉快そうな顔を隠さずにそう言った。

ザッパスは気にする素振りを見せずに話し始めた。

「彼……ドワイトと出会ったのは10数年前のことです。恐らく詳しい経緯は彼から聞いてるのでしょうから大筋は省きますが、私はあの村で死に瀕した彼を見てこれは運命だと感じました」

「…………」

「当時、我々『教団』は密かにとある薬を開発していました。それはある地方で採取されるとある実を粉末状にしたものなのですがね。これには人を一時的に神の地へ近付かせる効果があることが分かつたんですよ」

「…………」

「しかし、これを使用した者はその代償として心身ともに危険に晒してしまうということが動物実験で分かりましてね。それで人ではどうなるのか、実験のサンプルを探していたんですよ」

「…………」

「そんな時、たまたまこの地を訪れていた私が調度滅ぼされた村を発見しましてねえ……心躍りました。神のお導きを田の辺たりに出来たのですから」

「…………」

「そこで神の地へ旅立つ寸前の者はいないかと探していたのですが……そこに偶然彼が居合わせましてね。迷わずにあの薬を使いましたよ」

「……………」

「そうしたら、彼は痛みも忘れ、まるで神の地へ行つたかのようにならかな顔をしたのです。薬は人にもちゃんと効果があるのだと分かり、私は神に感謝しましたよ」

「それから彼へは薬を与えて続けました。彼は見る見る内に健やかになり、ついには剣さえも触れるようになったのです。もう少しで神の地へ旅立ちそうだつた彼がですよ？これは素晴らしいことです。人には動物よりも強く依存性が現れるということも分かりましたしね」

「……………」

「彼はいい実験のサンプルになつてもらいました……。10数年与え続けても健在であり続けられることを身を以つて証明してくれましたからね」

「……………あの薬を流行らせたのはお前たちか？」

「ええ、そうですよ。神の地へ生きながら到達させる……」この偉業を成し遂げたのですから、早速広めないとと思いましてね

「何故、奴にあんな純度の高い薬を与えた？」

「実験データが欲しかったんですよ。あれだけの純度での生成を達成出来たのはつい最近のことなのでしてね、どうも」

「お前は人を何だと思っている？」

「尊い、掛け替えのないものだと思つておりますよ」

抜け抜けとザッパスは言った。

「しかし、やはりあの純度のものだと人体への影響も大きい……。これは実用に適さないことが分かりました。これも彼のおかげで分かつたことです」

「奴はどうなる？どうせずっと監視していたんだから大体分かるんだろう？」

レイは室内に置かれた鳥籠を睨み付けた。

そこにはオーキスのように美しい黒色をしたカラスがこちらを見つめていた。

ザッパスは一ツコリと笑いながら言った。

「残念ですがそろそろ神の地へ行くと思いますよ。心も体も……」

」

「アーティスト」

先程からずつと畠を見つめたまま動かなくなつたドワイトへアーニーは、声を掛けた。

「どうしたんだワイト……」

アーニスがドワイトの肩へ手を伸ばそうとした時の時、ドワイトは絶叫した。

戸惑うアーネスへドワイトはすぐに顔を向けた。  
そしてアーネスは見てしまった。

殺意に満ち溢れ、今すぐでも自分を殺さうとしているアコヤの田を。

ザッパスは一通り話しあると、再び緑茶を手に取つて一口啜つた。

「……ふう。 そういう、 そのお茶、 遠慮しないで飲んで下さいよ。 私独自に茶葉をブレンドした特別なものなんですよ。 味も香りも今まで一番の出来です」

「…………」

「……もしかして、 毒が入つている。 とか思っていますか？」

ザッパスが困ったように笑つてみせると、 レイはそれを一瞥してから視線を逸らす。

緑茶には一切、 手をつけようとしなかつた。

「……仕方が無いですね。 無理強いはしないでおきましょう」

そう言つて、 ザッパスは残念そうに首を振ると緑茶を啜つた。 そして、 何かを思い出したかのようにレイの顔を伺つた。

「そう言えればお連れの方はどうしました?」

「連れ……ああ、 あいつのことか」

「まさかとは思いますが、 彼の側にいるのでは……。 おお、 それはとても危険です。 彼の心と体は神の地へ旅立ち、 その亡骸は最早人あらざる者へと変わつてゐるでしょう。 ……また尊い命が失われてしまひました」

ザッパスはわざとらしく机の上に十字を切つた。

しかし、 レイはそれを見て馬鹿にしたようにフツと笑つてみせる。 レイの態度にザッパスは「おや?」 という顔をした。

「お連れの方が心配では無いのですか？」

「心配？フン、笑わせるな。あいつが……アニエスはそう簡単に殺されるような人間じゃない」

「凄い自信ですね……何か根拠でもあるのですか？」

「俺は人を見る目だけはあるつもりだ。でなきや今まで生き残つてはいない。アニエスは出来る人間だ。俺なんかよりもずっと……な

「力”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

「ぐつ……！！」

ドワイトはアニエスに馬乗りになり、彼女の細い首を全力で絞め上げていた。

アニエスを殺そうとするドワイトの目は血走り、力一杯歯を食い縛つた口からは唾液が止め処なく溢れている。

「離”せ”つ”！！」

アニエスは近くに落ちていた石を掴み、それでドワイトの即頭部を殴りつけた。

すると、首を絞める力がフツと弱くなる。

その瞬間を見計らつてアニエスはドワイトの腕を取り、彼の体ごと横へ払いのけた。

そして、すぐに立ち上ると咄嗟に後方へ飛び上がり、ドワイトと距離を取つた。

左手で絞められた首を擦りながら、もう片方の手を剣の柄へと

持つて行くも、アーネスは目の前の状況に明らかに動搖していた。

「ドワイト……！？どうしたんだ一体！？」

「力”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

アーネスの問いに、ドワイトは歎じみた咆哮で返した。  
とてもではないが、アーネスには今のドワイトが正気であるとは思えなかつた。

それでも僅かな望みに掛けて、ドワイトへ呼び掛ける。

「ドワイト！私だ！アーネスだ！」

「力”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

ドワイトは再びアーネスに掴み掛からうと飛び掛つて来る。  
それを交わしながら、アーネスは尚も呼び掛けを続けた。

「ドワイト！私アーネスだ！お前の幼馴染でお転婆だったアーネーだ！」

「ア”ニ”一”……」

その言葉に僅かに反応を示すドワイトを見て、アーネスは頷く。

「そうだ……私はアーネスだ！」

「ア”ニ”一”……！」

ドワイトはハッキリとアーネスの名前を呼ぶ。

「ドワイト……！」

「俺”を”……殺”せ”……！」

「……何を言うんだドワイト！？」

アーネスは驚いて言った。

ドワイトは頭を抱えながら唸るよつて言葉を続ける。

「俺か俺て無くなる前に……殺してく

「そんな！！」

「頬  
”む  
”  
！」

「た  
く  
な  
い  
！  
そ  
れ  
に  
お  
前  
ア  
の  
手  
に  
掛  
か  
し  
む  
！  
俺  
は  
お  
前  
を  
…  
ア  
一  
番  
い  
い  
！

「す  
”ま  
”な  
”い  
”な  
”  
：」

ドワイトの顔から僅かに見える目は、アーニスには笑つていぬまつに見えた。

次の瞬間、エワイアはアーハスへと飛び掛った。

「うへ……黒龍巖の御用達が何者か知りません。」

アーネスはそう叫びと剣を抜き、自らも飛び出した。

そしてそのまま連れ違いさまはドワイトの体を轉り捨てる  
ドワイトは力無くその場へうつ伏せに倒れ込んだ。

アーネスは荒く呼吸をしながら、ゆっくりと振り返った。

「アーティスト?」

1

アーニエスが呼び掛けても、ドワイトは一切返事をしようとせしなかつた。

思わずアーネスは彼の元へと近付いた。  
すると、僅かに体が動いていることに気が付く。

アニメはうつ伏せになつているドワイトを仰向けに直すと、すぐ二股ニットサニ。

אַדְמָרָן

変則的な呼吸が、彼が死の淵に立っていることを示していた。

「アーティスト」  
「アーティスト」  
「アーティスト」  
「アーティスト」  
「アーティスト」

アニヒスが今にも泣き出しそうな顔でそう呟くと、ドワイトは震える手で彼女の頬を撫でた。

アーニスはドワイトの手を優しく握る。

「…………あつがとつ」

その言葉をハツキリとした口調と声で言うと、その後にまるで憑きものが落ちたかのようにドワイトの全身から全ての力が抜けた。瞳孔は開き、変則的な呼吸音も完全に途絶える。

ドワイトの死を田の前で確認すると、一筋の霊がアーノスの頬を伝つた。

「何がありがとうだ……馬鹿野郎……」

吐き捨てるよひかひひひと、アーニスはドワイトの手を握つたまま声も無く泣いた。

光も射さぬ森の奥深くで孤独に。

「……まあ、彼のことはもういいでしよう。他に何か聞きたいことがありますか？あるのでしょう？でなければ私は会つた瞬間に殺されていますからね」

ザッパスは笑みを絶やさずことなく、相変わらずの丁寧口調でレイに向かつて訊ねた。

レイは腕を組みながら、無言でザッパスの顔をじっと見つめている。少し間を空けてから、レイは口を開いた。

「聞きたいことなんて決まつているだろ？『教団』のことだ」「我々の素晴らしいことは以前、充分に説いたつもりだったのですが…」

「ああ、確かにお前らは素晴らしいよ。あまりに素晴らしいんで、つい殺されそうになつたがな」

レイは皮肉混じりにそう言つた。

ザッパスは相変わらず一口一口と笑みを浮かべ、それを意にも介さなかつた。

「死ぬのではなく、神の地への旅立ちです。恐れることなど何もありません。あるがまま受け入れるのです」

「……つまり、無抵抗で死ねってことか？それはとても素晴らしい神の教えただな」

「死ぬのではなく、神の地への旅立ちです」

「フン、お前らの神の戯言なんかどうでもいい……」

ザッパスがレイに諭すように繰り返すと、レイはそれを鼻で笑い、話を元に戻した。

「お前は確か、『教団』の選ばれし7人、……要するに幹部だったよな？以前会った時にそう自称していたと俺は記憶しているが」「ええ、確かに私は幹部の1人です。あの薬の研究、及び生成をしたことが認められ、『教団』を代表する7名の中に選ばさせて頂きました」

「ならば、話は早い。他の6人の情報を教える」

「一応、お聞きしますが、聞いてどうするのですか？」

「殺す」

レイはただ一言そう告げた。

それはシンプル且つ絶対的な決意である。

ザッパスはやれやれと首を振つてみせる。

「……求める者には『えよ、奪つ者には死を。これが我々の神の御言葉です』

「随分と都合のいい神もいたものだ。俺は始祖ブリミルとやらもどうかと思っているが、お前らの神はもつと酷い」

「我らが神を愚弄なさいますか。実にあなたらしいです。しかし、それは間違いなのだと気付くべきですね」

「俺は俺のやることなすことが正しいとも呑みているとも思つていながら、別に気付く必要は無いな」

ザッパスは「おおっ！」と声を上げ、祈るよつたポーズを取った。

「神よ……！」の哀れな子羊に天罰と悔い改める機会をお与え下さい。いえ、どうせあなたのことだから既に天罰は下り続けているのでしょ。ならば早く悔い改めなさい！」

「ほう？よく知っているな。そう言えば『最近、俺を殺すと襲つて来る奴がよく来ているなあ』

「やはり、我らの神は全てを見知つていて、あなたへ天罰をお与えになつていましたか」

「惚けるな。神じゃなくてお前の差し金だろ？目の下に蛇の入れ墨……あれは間違いない『教団』の暗殺者だ。俺が何人始末したと思つていいや？」

「……なるほど。彼らを差し向けたのが私であると？」

「流石に全部が全部、お前の仕業だと思う程俺も単純ではない。だが、その多くにお前が関与していたのは間違いない。違うか？」

「私は、穏健派ですよ？暗殺者を仕向けるなんて、とてもとても……」

…

首を振つて白々しく否定の意を示すザッパスを見て、レイは大きく息を吐く。

目の前の男は暗殺者を仕向けたことは否定したが、『教団』に暗殺者がいることは否定しなかつた。

しかも、それが当然といった様子で話している。

無論、この2人の間では既知のことであり、それがレイの命が『教団』に狙われる要因の一つでもあるのだが、それでもザッパスという男の本性が垣間見える瞬間でもあった。

「今思えば、あの時の暗殺者もお前の差し金だつたか……」

「どうもあなたは私を勘違いしていらっしゃる。私は命が尊く掛け替えの無いものだということを知っています。それを失わせような

ども覚えるわけがないじゃないですか

「……どの口がそれを言いやがる。この外道が」

レイの口調は淡々としていたが、それでもそこにには田の前の男に対する強い敵意が込められていた。

ザッパスは立ち上がると、そのまま玄関の方へと歩き出した。

「……話にならませんね。どうやらお帰り頂いた方がよろしこうだ」

そう言つて、玄関の扉を開いた。

「ああ、出て行つて下さー。もつあなたと話すことはありませんー。」

「……なるほど、『教団』の幹部についての情報を教えられないから、適当な理由をつけて帰すつてところか」

レイは酷く冷めた目でザッパスを見ている。

「別に俺はお前が俺を殺そうとしたかなんてどうでもいい。俺が欲しいのは『教団』の情報だ。まあ、教えろ

「お帰り下さい！」

「……話にならないのさーうちの台詞だな」

そう言つて、レイは背中の剣を抜き、切つ先をザッパスへ向けた。

「煙に巻けり」としても無駄だ。知つている情報は全て話してもいい。

「どんな手を使つてもな」

「フフフ、やはりこうこうになりますか……」

ザッパスは先程までは打つて変わつて、下卑た笑みを浮かべた。

「我らの神に従わず、あまつさえには愚弄するような下郎は私自身の手で始末をつけましょ……」

そう言つて、杖を取り出そうとした瞬間、目の前にいた筈のレイが消えていた。

「！？」  
「…………！」  
「…………！」

レイは一瞬で間合いを詰め、ザッパスの死角へと回り込んでいた。そして、そのまま彼の杖を持つ手を両掛けで躊躇無く振り抜いた。

「…………！」

しかし、剣は何も無い宙を斬った。

ザッパスは笑いながら、レイの後ろに立っている。

「アースハンド！」

ザッパスがそう叫ぶと、土で出来た大きな手が床を突き破りレイの足をしっかりと掴んだ。

レイはその場から身動きが取れなくなる。

(どうこいつ…… 何だ？)

レイ程の人間が目測を誤るなどということは有り得ない。

それならば、ザッパスが何かの魔法を使つたというのが考えられる。しかし、魔法には杖と詠唱が必要である。

杖を取り出すのと同時に詠唱を終えていたとしても、レイの斬撃の

方が早かつた筈である。

「フフフ、驚いていますね？」

レイが思案していると、ザッパスがニタニタと笑いながら見ている。

「恐らく私が何か魔法を使つた。と思ったのかも知れませんが、私の魔法は今のですよ？私は土のメイジなのでね」

「くつ……！」

「フフ、何の為にあなたをここへ招いたと思ってるんですか？」

「……やはり罠か」

「ええ、罠です。それもごく単純な、ね。でも、あなたなら掛かってくれると信じていましたよ。あなたは欲しいものの為ならどんな危険をも厭わない……そんな人だ」

「俺に何をした？」

「フフフ、これです」

そう言いつと、ザッパスは懷から濃い紫色をした粉末状のものが入った小瓶を取り出した。

「事前にこれを燻した煙を充満させておいたのですよ。この隠れ家の中には。通常なら直接吸い込むより効果は薄いのですが、純度の高いこれはなら多少効果が続いていてもおかしくはないでしょ？」

「つまり、俺は軽い幻覚を見た、ということか」

「ええ。なるべく効果が出るよつにここへ長居させようと、色々とお話をさせて頂きました。まあ、その殆どはあなたが知つても何にもならない情報なんですけどね」

「……お前もあの薬を吸つてている筈だ」

「これを作ったのは私ですよ？それに常用している人間ならこのくらいですぐに影響が出たりはしません。かくいう私も愛用している

のですよ」

「……匂いで気付かれると思わなかつたのか？」

「現にはあなたは気付かなかつたぢやないですか……まあ、その為に香りの強い緑茶を淹れておいたわけなんですがね。ちなみにあなたのそれには予想通り毒が入つていたんですね。ちなみにあなた純な罫には流石に引っ掛かりませんでしたね」

「……不覚を取つたな」

「自分のミスを素直に認める……フフ、あなたのそういうところ嫌いじゃないですよ」

ザッパスは笑みを浮かべながらレイに杖を向けた。

「さて、そろそろお話は終わりです。あなたも神の地へと旅立つ時が訪れました。それを受け入れなさい」

ラ・ロシユール周辺の森にて 6（前書き）

今回でアニエス編は終了です。

「さて、あなたはもうすぐ神の下へと旅立つわけですが……最期に何か言いたいことはありますか？」

さも自分は慈悲深い人間である、といつ顔でザッパスが訊ねると、レイは虫唾が走るのを隠さずに言った。

「何か勘違いしていないか？確かに足は動かないが、それ以外は動く。お前を斬り伏せることだって不可能じゃない」

「あなたこそお忘れですか？あなたは今、軽い幻惑状態にある。今話している私がこの場所に立っているとは限らないのですよ。それに……」

ザッパスは話すのを中断すると、軽く詠唱を始める。  
それを終えると同時に杖を振ると、今度は土礫が床を突き破って浮かび上がった。

「わざわざ私があなたの間合いに入る理由もない。安全な場所からじわじわとなぶり殺しにしてさしあげますよ。おっと！私としたことが口が滑りましたね！」

ザッパスは陰惨な笑みを浮かべながら、まるで虫けらを見るような目でレイを見下した。

「でも、安心して下さい。当たり所が悪ければ……いえ、この場合は良ければ、でしょうか？苦しむことなくすぐに神の地へと旅立ちますよ」

「下衆野郎が……悪いが、お前の悪趣味に付き合つつもりはない」

そう吐き捨てるレイは剣の柄を持ち直し、まるで槍を投げるように構えてから目を閉じた。

訝しげにその様子を見ていたザッパスは思わずレイに訊ねる。

「何の真似ですか？」

「見て分からぬか？」

「まさか、それを私に投げつける……なんて愚かなことをお考えですか？」

「そのつもりだ」

「何故目を閉じているのです？」

「……いくら相手の気を察知出来ると言つても、実際に目で見ていると、どうしても目に頼ってしまう。その目が役に立たないと分かつたら使わなければいい。そう思つただけのことだ」

「絵空事を……！」

憐れみを通り越して怒りを顕わにしたザッパスが杖をレイへと向ける。

「ブレッドー！」

ザッパスの周囲に浮かんでいた土礫が弾丸のような速度でレイへと向かうと、容赦なく彼の体を打ち付けた。

レイは逃げる素振りさえ見せず、先程の構えのまま目を閉じてその場にじっとしている。

やがて土礫が通り過ぎた頃には、彼の体はボロボロとなっていた。土礫が直撃した箇所が見る見る内に赤黒く変色し、箇所によつては出血もしている。

それを見たザッパスが高笑いをした。

「どうしました！？ 何も出来ないですか！？」

「…………」

ザッパスは無言のレイを一警した後、フンと鼻を鳴らすと再び周囲に土礫が浮かび上がらせる。

ザッパスの表情は先程までとは打って変わつて厳しいものとなつていた。

「……気が変わりました。とつとと神の……いや、地獄へ行つて下さい」

そつ言い捨てるど、ザッパスは再び杖をレイへ向ける。

「ブレッ…………！」

「そこだ！！」

その刹那、レイはカツと目を見開くと、素早い動きで剣を思い切り投げ放つた。

剣は正確にザッパスの中心を捉え、まるで閃光のような速度で彼の胸を貫く。

そして、勢いそのままにザッパスの体ごと壁へ突き刺さつた。

ザッパスは壁に張り付けにされた形となる。

「力…………ハア…………？」

ザッパスは自分の身に何が起きたのかすぐには分からなかつた。

気が付いた時には口から大量の血を吐き出し、体中が痙攣を始めていた。

「ぐ、ぐううう？な……ん、だと？」

「フツ、当たつたか」

「あの状態で私に当てるなど……き、貴様は人間か……？」

「生憎、まだ人間は止めていないつもりだ」

「ゴフツ、な、何故私の位置をこうも正確に……？」

「お前がこの隠れ家内に充満させていた薬のおかげで、いつも以上に集中することが出来た。まあ、また使おうなどとは微塵も思わんがな」

「ゴフアツ、くつ、そうか、わ、私は自ら墓穴を掘ったというわけか……。ガハア、さ、策士策におぼれるとは、このこと……ゴボツ！……だな」

「死ぬ前にさつきの質問に答えて貰おうか？」

「……いい、だろう。俺を殺した以上、どうせ貴様はすぐに地獄へ行くことになる……ハハハハ！ゴボア！……」しつちへ来い」

レイは言われた通りにザッバスの元へと歩いて行く。  
無論、警戒はいつさい怠らず、相手が何か仕掛けてこようとしたら、すぐに対処出来るように懐の隠しナイフへと手を伸ばしながら。  
そうしてレイがザッバスの目の前に立つと、彼はニヤリと口の端を吊り上げた。

「ロマリアの……教会……」

今にも消え入りそうな声でそう呟くと、次の瞬間、ザッバスはがっくりとうなだれた。

全身から力が抜け、手足がだらしなく投げ出されている。  
レイは手をザッバスの口と鼻に翳し、彼の呼吸が完全に止まっていることを確認する。

そして次に首に手をやつて脈拍を確認し、完全に死んだことを確信すると、彼に突き刺さっていた剣を躊躇なく抜いた。  
抜いた箇所からは血がまるで泉のように湧き出る。

レイは剣に着いた血をある程度振り払うと、鞘に収め、室内を照らしていたランプを手に取った。

そして、それを地面へ叩き付けると、火が燃え上がり、徐々に広がつていく。

このままならば、木材で出来た隠れ家はすぐに何もかもが焼き飛ぶされてしまうだろう。

焦げた臭いの中で、レイは改めてザッパスの死体を見た。

「……神だの何だの言つても、所詮は貴様も平民を讐めた一メイジに過ぎなかつた。それだけのことだ」

レイはそつ砾くと、さつと踵を返して隠れ家を後にした。

「あれは……？」

アーネスは、遠くの方が突如ぼんやりと明るくなつたのに気が付くと、そちらの方に顔を向けた。

それが火事だと分かると、一瞬過去のトラウマが彼女の頭を過ぎるが、頭を振つてそれを払拭した。

そして、火事の原因となりうるものにすぐに思い当たる。

「……まさか、レイか！？」

アーネスが火事の方へ行こうとするとい、その方角から人が歩いて来るのが見えた。

細身の長身、そして大きな剣を背負つたシルエットを見て、アーネ

スはその人物の正体にすぐに気が付く。

「レイ……」

遠目からでも相手の顔が認識出来る距離まで近付いて来ると、その人物は紛れもなくレイであった。

レイはフツと笑う。

「どうした？俺の心配でもしてくれたのか？」

「まさか……。お前が簡単に殺られるような人間じゃないことくらい分かるさ」

「そうか、なら俺の思い上がりだったな」

「まったくだ」

アニメスは呆れたように笑つてみせた。

2人はその場から別の場所へドワイトの死体ごと移動した。

アニメスは土の柔らかい場所を探し、見つけるとそこを掘つた。そして、ある程度の深さまで掘り進めると、ドワイトの死体をその中に入れる。

「……本当は故郷の村に帰してやるのが一番いいんだろうがな」

アニメスは無念そうに呟いた。

もしかしたらドワイトを救う方法があつたかも知れない。  
こんな結末にならなかつたかも知れない。

そう思つては1つ1つ後悔の念に駆られる。

「……未だに復讐に囚われている私も最期はこうなつてしまふんだろつか？」

誰に言つでもなくアニエスは呟いた。

決して答えが欲しいわけではない。

例え答えがあり、それが今の自分と正反対の答えだったとしても、それで10数年も復讐に拘つてきた自分を変えることなどおよそ無理だろう。

しかし、それでも問わずにいられなかつた。

「自分を見失つてしまえば……な」

その様子を少し離れた場所から見ていたレイが言つた。  
アニエスはレイの顔を見ずに聞き返す。

「自分を……見失う？」

「……そのドワイトという男は、『教団』の介入によつて自分を見失つていた。もし、奴が正常だつたなら、復讐に囚われていたとしても、お前に剣を向けたりはしなかつた筈だ」

「…………」

「俺は復讐を否定しない。寧ろそれは成し遂げるべきとさえ思つてゐる。だが、関係無い人間……それも親しかつた者を巻き込んでまで行つるのは復讐ではない。ただの殺戮だ」

「レイ……」

「人の心を失つてしまえば、復讐はただの殺戮となるだけだ。復讐は人間だけが行えるもの。獣は自分の親や住処を奪われても、奪つた相手に復讐など考えない。仮に奪つた相手を殺すことがあつたとしても、それは復讐じやない。自己防衛か狩りか、そのどっちかでしかない。人の心が介在しない復讐はそれと同じだ。……お前はど

うなんだアニエス？

「私……か？」

「今でもまだ人の心を持っているか？」

「さあ、な。だが……」

アニエスはドワイトの亡骸をじっと見つめる。

「こうして物言わぬ死体となつたドワイトを見て、悔しくて悲しくて泣きそうになつてゐる自分はまだ人間であると信じたいな」

「なら、それを忘れないことだ。それさえ忘れなければ復讐を終えてもお前は人間でいられる。例え後悔しようとな」

そう言つと、レイはアニエスに背を向け、静かにその場を立ち去つた。

レイの姿が見えなくなるなり、アニエスは慟哭とも怒号ともつかぬ声を上げた。

その声は薄暗い森の中に響き渡つた。

数分後、離れた場所で佇んでいたレイの元にアニエスがやつて來た。

その表情は出会つた頃と同じで、凜々しくそして気持ちの良い笑顔であつた。

「…………もういいのか？」

「ああ、心配かけたな」

「お前がここで簡単に挫けるよつた奴ではない」とくらい分かつてたさ

「…………なるほど、先程のお返しとこゝう奴か

アーニエスがニヤリと笑つて見せると、レイもフツと笑う。二人はその後、特に言葉を交わさずに薄暗い森を後にした。会話こそ無いが、二人の表情は決して暗くはなかつた。やがて森を抜け、街道へと出るとアーニエスが口を開いた。

「……ここでお別れだな」

「ああ」

元々2人はブルギッシュへの復讐の為に手を組んだに過ぎない。それもドワイトが既に果たしていた。

それならば、これ以上2人が一緒にいる意味は無かつた。

「レイ」  
「ん？」

アーニエスはレイを呼び止めると、右手を前に差し出した。レイがその手を取ると、アーニエスは笑顔で言った。

「お前とはまた何処かで逢えるような、そんな気がするよ」「フツ、そうか。その時は復讐とは関係なく逢いたいものだな」「ハハハ、そうだな」

そうして握手を解くと、レイはロマリア方面へ、アーニエスはそのままトリステイン方面へと向かつて歩いて行つた。

あの森にいる時は時間の感覚が薄れていたが、そろそろ夕方に差し迫る時間でオレンジ色の空に日が沈みかけていた。斜陽の中、2人の影はどんどん離れて行き、やがてお互い見えなくなっていた。

それでも、2人の心の中には互いの存在がずっと生き続けていた。

やがて再会する日の日曜日。

そして、その日はつい遠くなってしまった。

## ラ・ロシユール周辺の森にて 6（後書き）

ところが、無事終了となりました。

前回から間が空いてしまい申し訳ありませんでした。  
アニメスと再会する話はまた後のお楽しみといつことで一つ。

それでは、次の話もご期待下さい。

少年は何も覚えていなかった。

自分の親の顔さえも記憶の中には無い。

物心ついた時には、貴族に売られる奴隸として鎖に繋がれて各地を転々としていた。

単純な労働力として、または慰みものとして、貴族たちは奴隸を奴隸売りから買い、自分たちの元に置いていた。

その為、奴隸自体の需要はかなりあったのだが、その少年はなかなか買われる事は無く、いつも売れ残っていた。

「つたぐ、てめーらを飼つてるのだってタダじやねえんだぞ！？商品にもならねえクズはとつと野垂れ死ね！」

そう言われ、少年は奴隸売りから腹いせの為によく殴られていた。少年は自分が今、どういう立場についてどういつ風に扱われているかを子供ながらに理解していた。

そして、意外にも少年はその現実を冷静に受け入れていた。

「何であなたはそんな平氣な顔でいられるの？私たち奴隸の運命なんて、もうこのまま死ぬか、こき使われた挙げ句に死ぬか、それしか無いと言つのに……」

同じ奴隸仲間である没落貴族の少女がそう少年に訊ねたことがあつた。

少年はそれには答えず、虚うな田でこひではない何処かを見つめていた。

ある日、遂に少年を賣つ男が現れた。

男はそこそこ大きいところの領主らしいが、少年にとつてはびひで  
もいいことだつた。

ただ、周りの風景が変わるだけ。

少年にとつてはそれだけのことだつたのだから。

男は少年を買ひ上げると、すぐに過酷な労働を強いた。

そして何かと理由をつけては少年をいたぶり、ありとあらゆる暴力  
を奮つた。

それは男の家で働く使用人たちも思わず少年に同情してしまつ程で  
あつたが、この世界における奴隸の扱いなどこんなものである。  
人としての尊厳も何もかもを全て奪われ、主人の為に仕えるただ1  
つのものとして扱われる。

主人の気分1つで殺されたとしても何も文句を言えない。

奴隸とは、そんな存在であつた。

だから、理不尽な目に遭わすことはしても、殺そうとはしないだけ  
少年を買つた男はマシであると言えた。

そんな男にも家族はいた。

男と同じように少年を執拗にいたぶる意地の悪い妻とそんな彼らの  
間に生まれた息子が1人。

その息子は両親とは全く似ても似つかなかつた。

彼は奴隸である少年にも分け隔てなく接し、対等に扱つていた。

その貴族然としていない態度はこの世界においては異端な存在であ  
つた。

彼の両親はそのことで頭を悩ませ、よく注意をしていたものの、彼  
はその態度を改めることはしなかつた。

ある日、少年が外で薪割りの仕事をしていた時のこと、突如彼が現  
れて声を掛けてきた。

「やあ

まるで友人にも話しかけるよつた調子で言われる。

少年は直ちに姿勢を正すと、無言で彼に向かつて頭を下げた。

「……そういうのは止めてくれよ。少なくとも僕と二人きりの時くらいいはれ」

「……お言葉ですが、自分は奴隸です。本来ならこいつして口を聞くことわえ憚りません」

「全く、君に文字やそういう難しい言葉を教えたのは誰だと思つているんだい？……それにしても、君がこんな不遜で慇懃無礼な奴だったなんて、そんなことを知つているのはきっと僕だけなんだろうなあ」

「口を開けば御主人様にどやされますから」

「君は面白いなあ」

彼はそう言って笑つた。

彼は少年をまるで自分の弟のように可愛がつていた。

両親の目を盗み、こいつして少年に会いに来ては会話を交わし、時には文字や言葉を教えることもあった。

そのおかげで少年は奴隸なのに、平民以上の知識を手に入れることが出来たのだつた。

「君は奴隸じやなければ、きっと何か大きなことを成し遂げられたんじやないかな？」

「……突然、何ですか？」

「そのふてぶてしさはただの平民が持ち得ぬものだよ」

「御冗談を……」

「ハハハ、君がそちらの者と同じなら、そんな風に僕の顔を見なが

ら対話なんか出来ないよ。僕は貴族でそれなりの権力者なんだよ？

普通なら田を合わすことさえ恐れ多いだろ？さ

「買い被り過ぎですよ」

少年はそう言つと、再び薪割りの仕事に戻つた。

彼も少年の邪魔をしてまで会話を続ける気は無かつたらしく、その場を去つて行つた。

そんな会話があつてから数日後、少年は薪を探る為に近くの森へと入つた。

普段は近場で間に合わずのだが、生憎その日は薪の数が足りず、その為に普段は立ち入らない奥の方まで出向くこととなつた。

森の奥は薄暗く、少年が普段薪を拾つ場所と比べると、まるで別世界であつた。

この辺にはオーク鬼やコボルトが出没するといつ話を使用人たちから密かに聞いていた少年は急いで必要な分の薪を集めていた。

そんな時、地面に落ちた木の枝がポキッと折れる音を少年は聞いた。

パツとその音がする方を振り向くと、そこには1匹のコボルトがこちらを睨み付けながら立つていた。

それを見た少年は冷静にその状況を把握する。

「こひで自分の命は終わるのだな。

何の感慨も無く、そう直感した。

近付いて来るコボルトに対し、少年は特に抵抗はせず、かといって怯え震えるわけでもなく、ただその場に立ち尽くしていた。

視線はコボルトに向かっている。

1歩1歩、まるでスローモーションのよつにコボルトがこちらへ向

かつて来る。

その時、近くの木から突然枝が伸び始め、コボルトの側頭部を貫いた。

コボルトは一瞬で絶命し、その場に崩れ落ちる。

流石にこれには少年も驚きを見せ、何事かと目の前を注視していた。すると、コボルトの後ろの方に人影が見えた。  
近づくにつれ、その正体を目視出来るようになると、少年は更に驚きを見せた。

それは1人の少女であつた。

まるで黄金のように美しく輝いた長い髪を風に靡かせ、その整った顔つきで少年をじっと見つめている。  
何よりも特徴的だったのはその長い耳であった。

## エルフ

ここハルケギニアにおいて、人類の敵であり、様々な面で高い能力を擁する種族。

それが何故こんなところへ。

少年は敵意や脅威よりも先にまずそれを思つた。

エルフは自分たちの国から出ることはあまり無く、まず人里には現れない」と聞く。

はぐれエルフを見た、などという噂話もあるにはあったが、エルフを見た者は殺されるという思い込みがハルケギニアの人間にはあったからか、その話も眉唾ものとされていた。

しかし、今少年の目の前にはこうしてエルフがいる。  
少年はそれでも冷静に今の状況を見据えていた。

先程ゴボルトに対峙した時と比べると、不思議と自分が死ぬという直感が無い。

少年はエルフの少女を見つめ返した。

幼いとは言え、同年代の少年少女の中では一際背の高い少年に負けない身長で、目線の高さがほぼ同じであった。暫くそうしていると、突然エルフの少女が楽しそうに笑い声を上げた。

「アツハツハツハ！お前、人間のくせに面白いな」

凜々しくこちらを見つめていたエルフの少女の顔がまるで獲物を見つけたいたずらっ子みたいに変わる。

口調もまるで少年と同年代の男の子のようであった。

「大抵は俺たちを見るとビビって逃げ出すが、怖い顔になつて襲つて来るかのどつちかなのに、お前は違う。まるで、俺がエルフだと分かつていねえみたいじゃねえか！」

「エルフくらい知っている」

「なら、尚更変だ！そうだ、お前は変だ！」

「変なのはお前だ。人を見るなり変だ変だと笑いやがつて」

少年は反論する。

「大体、何でエルフがこんなとこにいるんだ？」

「……なあ。お前、俺が怖くはねえのか？俺つて言つたかエルフがさ

「何でだ？エルフなんて所詮は耳が長くて変な魔法を使う亜人……  
ただそれだけだろ？それにお前は怖い怖くない以前の問題だ」

「やつぱりお前は変だ！」

エルフの少女は再びゲラグラと笑つた。

笑い過ぎて思わずこぼれた涙をその細く長い指で拭つ。

「アツハツハツハ、あーおかしい……そう言えばさつきの質問に答えてねえな」

エルフの少女は一先ず笑うのを止める。

「何でここにいる、だっけ？それは簡単だ。俺はこいつして各地を旅してんだ！」

「旅？」

「性分なんだよ。一つのところにじつとしていられねえって言うの？まあ、他の連中からは変わった奴だつてよく言われてるけどな」「確かにお前は変わってるな。俺が聞いてた話の中のエルフとお前が全く結び付かない」

「聞いてたつて、どんな話だ？」

「残忍な性格で人を繰り返し襲つ……。それが俺の知るエルフだ」「ハア？ 何だよそれ！」

エルフの少女は憤慨する。

「そもそも仕掛けてきたのは人間の方だろ？俺たちエルフの土地を土足で荒らすような真似しておいて、悪いのは全部俺たちかよ！」

「俺に言つなよ。あくまで聞いた話であつて、俺の見解じゃない

「じゃあお前はどう思つてんだよ？」

「さつきも言つたろ？耳が長くて変な魔法を使う亜人。それ以上でもそれ以下でもないよ」

「お前、本当に変わつてんだなー」

「まだ言つか

少年がそう言って睨むとエルフの少女は笑いながら「悪い悪い」と謝る。

「……ところでお前、名前何て言うんだ?」

「名前? 何で突然?」

「お前みたいに面白い人間は初めてだから覚えておこうかと思つてなー。で、名前は何だ? 言つてみろ!」

「おい、お前、貴様、君、このクズが!…… どれでも好きに呼べばいい」

「おいおい、それ名前じゃないだろー。お前の名前だよ」

「無いよ」

「? 何でだ?」

「奴隸だから」

「そつかー。でもそれじゃあ不便じやないか?」

「大抵はさつきので通じるから不便じやないよ」

「いや、不便だ! 何より俺が困る! よし、俺がお前に名前をやるよ!」

「……勝手な奴だな」

少年は半ば呆れ気味に言つた。

エルフの少女は額に手を当てるで真剣に考へている。

「うーん、うーん……。ダメだー! 浮かばない……。俺、一いつのセンス無いからなあ……。うーん、そうだー!」

何かを思い付いたようにエルフの少女は手を叩いた。

「お前に俺の名前をやるよ!」

「ハア？」

思いもよらぬ提案に少年は意味が分からぬという顔をした。しかし、エルフの少女はとても満足そうな顔で何度も頷く。

「俺の名前なら、俺も忘れないし一石二鳥だ！」

「待て、どうしてそうなる？」

「お前は今日からこう名乗れ！」

戸惑う少年を指差すとに、エルフの少女がイタズラっぽい笑顔で告げる。

「レイー！」

「アツハツハツハ、君は本当に面白いね」

レイが森で起きた出来事について話すと、彼はそう言って笑った。

「レイ……か。いい名前じゃないか。今度から神のことをやう呼ばせて貰うよ、レイ」

「ハア、話すんじゃなかつたな」

ため息を吐きながらレイは若干の後悔を覚える。

「何か誤解しているみたいだけど、別に君を馬鹿にしてるつもりはこれっぽっちだってないよ?」

「だが、楽しんでるだろ?」

「そこは否定しないなあ」

彼は再び笑い声を上げた。

何時の間にかレイは彼に対して敬語を使わなくなっていた。  
敬語を使うと彼からしつこいくらいに注意されるのも鬱陶しく、それ

に元々そういう喋り方が面倒臭いというのもあった。

森で出会った変わったエルフに余計なお節介で名前を貰つたのを機に、レイは本来の口調に戻ることにした。

「……にしても、旅をするはぐれエルフとはね」

「何だ?信じないのか?」

「まさか!君がそんな嘘を吐くような人間じゃないことくらい分かるさ。ただ……」

彼は一瞬、遠い目をした。

「会つてみたかったなと思つてさ」

「森の中へ行けばいい。上手くいけば会えるんじゃないかな？」

レイが何とはなしに答えると、彼は少し寂しそうな顔で笑つた。

「フフシ、無理だらうね。僕はそういう星の下には生まれていない。それはぐれエルフにしたつて君だから会えたんだと思うよ。……きっと僕はこのまま貴族として領主の息子として、それでしか生きられないんだろうね」

「十分だろ？ 僕みたいな奴隸には夢のような話だ」

「ああ、分かるよ。僕みたいな人間にそんなこと言つ資格は無いってことぐらいはね。それでも思うのさ。もしも自分が貴族でも領主の息子でも無く、ただの平民で旅人だったなら」

「ただの平民が聞いたら殺したくなるような台詞だな」

「アツハツハツハ、確かに。でも平民でそんな気概のある人はきっと君みたいな大物だらうね。なら喜んで討たれるよ」

彼はそう言つとレイに背を向け、そのまま振り返らずに口を開いた。

「レイ、君は歪んでいるね」

「？ 何だいきなり？」

「君は平民……それも奴隸といつ立場なのに、まるでそれらしくない。でも、そんな君が好きだし、羨ましくもある」

「……どうした？ 熱でもあるのか？」

「かもね」

それだけ言つと、彼はポカンとした表情のレイを残してその場を後

にした。

名前を貰つたとは言え、それでレイの口々が劇的に変わることには無かつた。

相変わらず領主の男にはこゝき使われ、時には理不尽な暴力を受けていた。

そんなある日、領主の男が大事にしていた壺が割れるという事件が起きた。

怒り狂う領主の男は使用人たちとレイを呼び出し、誰がやったかを問い合わせた。

使用人たち全員が首を横に振り、その中の一人がレイの仕業ではないかと言い出した。

「おい、貴様。アレを割つたのは貴様か？」

レイには全く見覚えの無いことであった。

しかし、奴隸の身分である彼が主人の許可無く勝手に口を開くことは出来ず、仮に弁解したところで無駄であることを察して黙つていた。

「否定せぬといふことはアレを割つたのは貴様か……」

押し黙るレイを見て、領主の男は手にした杖を振るつた。

すると、空氣の塊がレイの体を打ち付け、幼い彼の体はその場から10数メイルも吹き飛ばされた。

背中から壁に衝突したレイは口から血を吐いてそのまま倒れ込んだ。

使用人たちも顔色を変えてざわつく。

領主の男は倒れたレイへ近付くと憎悪に満ちた顔で見下ろした。

「どうしてくれる? アレは父の形見でもあり、金だけでは代えられぬものだ。貴様如きの命では足りぬのだぞ?」

「…………」

それでもレイは口を開くことは無かつた。

ただ、強い意志を秘めた瞳で領主の男を見つめていた。

領主の男はその視線に苛立ちを覚える。

「やうか……なら、死で償え。もっとも貴様如きの命などで償えるものでは無いがな」

そう言って領主の男が杖を向けた瞬間。  
その場に彼が現れた。

「父さん!」

「一……ライトか」

彼は素早くレイと領主の男の間に割り込むと、その身を挺してレイを庇つた。

領主の男は彼の行動に眉を顰める。

「……ライト、何故その奴隸を庇つ?」

「彼の申し開きを聞くべきです! 彼が『自分がやった』との口で言つたのですか?」

「奴隸に口を利く権利などない。それにこやつが犯人であると言葉よりもその態度がハツキリと示している!」

「……ならばその認識は誤つてゐると言わざるを得ません」

「どう言つと、彼は懐に手を忍ばせた。

領主の男は怪訝そうな顔で彼を見つめた。

「どういつ意味だ、ライト……」

「いやこいつ意味です！」

彼は懐から何かを取り出して、領主の男へ見せた。

それは割れた壺の欠片であった。

「それは……？」

「壺を割つたのは僕です！」

「何だと！？」

領主の男は驚いた顔をすると、屋敷中に響くような大声を上げた。  
使用人たちもざわめく。

その中で冷静にこの場を見ていたのは、ただ一人レイだけであった。

「ライト……本当にお前なのか？よもやその奴隸を庇つて……」

「見くびらないで下さい！たかが奴隸の為にしてもいい罪を被る  
ような真似はいたしません！」

彼は声を張り上げた。

領主の男は暫く言葉に詰まつている様子だったが、何とか気を取り直すと一言だけ告げた。

「……その奴隸を地下の仕置き部屋の牢に入れておけ

「父さん！」

「……ライト、お前は後で私の部屋へ来い。以上だ。貴様らも仕事を  
へ戻れ」

領主の男は使用人たちを一瞥しながら言つと、くるりと背を向けて去つていった。

その様子を一人のメイドの少女が青ざめた顔で見つめていた。全身が小刻みに震えている。

彼はその少女に目を止めると、彼女の肩をポンと軽く叩いた。

「あ、あああ、ライト様、私……」

「……大丈夫。僕に任せて」

彼はそう言つて微笑むと領主の男の後を追つた。レイは守衛の男に地下へと連れられながらもそんな彼の顔を見ていた。

その視線に気が付いた彼は少しだけ振り返ると、困ったような顔で微笑を浮かべる。

その顔が妙に印象的で、それが見えなくなるまでレイは彼を見続けていた。

地下の仕置き部屋はいわゆる拷問室のような造りをしていた。

中には簡易的な牢屋があり、レイはその中へ入れられていた。

牢屋は狭く、いくら体格が良くても所詮は子供であるレイがギリギリ大の字で眠れるくらいの広さしか無かつた。

1日に1度だけ食事（とは言つても奴隸、しかも牢に入った者が食べるようなものなのでたかが知れている）が運ばれる以外、その部屋に人の出入りは無い。

また地下故に窓などは無く、外の様子を知る術は無い為に時間や日  
にちの感覚がすぐに消え失せていった。

そんな状態になつて2日くらい経つた頃、レイの元に餓え死なない程度のささやかな食事を持つて彼がやって來た。

彼はレイに優しく微笑みかけるとその場に食事を置いた。

レイはまるで獣のようにそれへ飛びかかると、礼儀も作法も関係無く両手で腹の中にかき込んだ。

皿はあつという間に空になつたが、レイの腹は満たされず「ぐー」と空腹を訴える。

それを見た彼は苦笑すると、何処からかパンを一つ取り出し、レイに差し出した。

それは普段レイが口にすることは決してない、彼らの食卓に並ぶような上質のパンであつた。

レイは奪つようこそを受け取ると、ガツガツとかぶりつく。外はサクサクし、中はフワフワ、微かに胡桃の味もする。しかし、レイにとってはそういうのを味わうことよりも腹を満たすことの方が先決であつた。

これまたすぐにそれを胃の中に収めたレイはよつやく人心地ついたのか、ドシッとその場に座り込んだ。

その様子を見て、彼はやつと声を掛ける。

「落ち着いたかい？」

「……初めてあんたに感謝するよ」

「君にお礼を言われたのは初めてだよ」

彼はそう言つて笑つた。

「……久し振りだね、レイ。とは言つても2日振りだけど」

「2日……まだそのくらいしか経つてなかつたのか」

「……確かにこんなところじゃ 今が朝か夜かも分からぬ」

彼は周囲を見回す。

そんな彼を見ながらレイは訊ねた。

「……何であんな嘘を言つたんだ?」

「ん?」

「あの壺を割つたのはあんたじやないだろ?」

「……そうだね、君に隠し事は出来ないね。あの壺を割つたのは僕じゃない」

「恐らく、あのメイドだろ?」

「うん、十中八九メリッサだろ?」

彼が自らを犯人だと名乗り上げた時、1人のメイドが青ざめた顔で震えていた。

その反応から察すれば、彼女がその件について何かしら関わっている可能性が高い。

彼は上を向き、床を仰いだ。

「……確かに僕はあるの壺を割つてはいない。でも、僕が割つたことにはれば、一番平和にこの事件を解決出来ると僕は思つたんだ」

「あんたは馬鹿だ」

「うん、そうだね。でも、馬鹿でも君とメリッサは救えたよ

「でも、あんたは……」

「レイ、聞いてくれ」

彼は真剣な表情になつた。

「今回の件で、改めて僕は思った。どんなに大切な思い出が詰まつ

ていようが、所詮は壷。物にしか過ぎない。人の命には絶対に代えられないものだ。でも、今の世界はそれを否定する。父さんだってそうだ。例え君が犯人では無いと知つても、君の命を躊躇いも無く奪おうとしただろし、メリッサが犯人だと知れば、その命さえも奪おうとしただろ。……僕は君みたいな奴隸も、メリッサみたいな平民も、等しくあるべきだと思つていて。それは貴族としては異端な考え方かも知れない。けれども、僕はこの考えを曲げず、世界へ発信し続けたいと考えているんだ。僕みたいな若造一人が人々の意識を変えることは難しい。それでも、変えなきやいけないと僕は考えている。貴族の為に平民がいるわけじゃない。平民の為に貴族はあるのだから」

彼は真っ直ぐな瞳でレイを見つめる。

レイは少し気恥ずかしくなり、思わず視線を逸らしてしまった。

彼はにこりと笑つた。

「君をもうすぐここから出してあげるよ」

彼はそう言つと、踵を返して出入り口へと戻つて行つた。

それがレイが見た、彼の最後の姿であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4202q/>

---

最強のメイジ殺し

2011年4月25日16時30分発行